

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第11集

毛呂山団地埋蔵文化財発掘調査報告

伴 六

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 序

埼玉県における宅地開発事業は、人口の急激な増加に伴い、活発に実施されております。

遺跡の所在する毛呂山町周辺も、近年急速に都市化が進み、新興住宅が次々に建設され、従来の景観が大きく変貌しつつあります。

こうしたなかで、今度埼玉県住宅供給公社により、毛呂山町岩井地区に大規模な団地開発が実施される運びとなりました。しかしながら、予定地内に埋蔵文化財包蔵地の含まれていることが確認されたため、協議の結果、発掘調査・記録保存の措置が講ぜられることとなりました。

発掘調査は、埼玉県住宅供給公社の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和56年9月より翌57年3月までの間実施しました。

その結果をまとめたものが本書であります。これらの資料が教育、学術、文化の一助となり、広く活用されることを念願しております。

発掘から報告書刊行に至るまで、種々便宜を図っていただいた埼玉県教育委員会、埼玉県住宅供給公社、毛呂山町教育委員会を始め、関係諸機関に対しまして、厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

## 例　　言

1. 本書は毛呂山団地にかかる伴六遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査事業は埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県住宅供給公社の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和55年9月16日から昭和56年3月30日に亘って実施した。

なお、調査の組織は2ページに示したとおりである。
3. 出土品の整理および図の作成は鈴木秀雄、富田和夫が主にあたった。
4. 発掘調査における写真は鈴木、富田が、遺物写真は鈴木が撮影した。
5. 本書の執筆は遺構説明を鈴木が、遺物説明を富田が分担し、後は各文末記載のとおりである。
6. 遺跡原点9G杭は座標X系のX座標—6,700,0Y座標—46,150,0で、グリッド図（第3図）に示した。挿図内の方位記号は座標北である。
7. 挿図の緒尺は遺構図 $1/60$ 、土器実測図 $1/4$ 、鉄器実測図 $1/3$ を原則とした。住居跡、掘立柱建物跡のピット内数字は床面あるいは遺構確認面からの深さ(cm)を示し、断面図の数字は基準線の標高(m)を示す。
10. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第四課職員があたり、横川好富が監修した。
11. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御協力を得た。

齊藤　稔（鶴ヶ島町教育委員会）

村　木功（毛呂山町教育委員会）

## 目 次

### 序

### 例 言

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査経過	3
II	遺跡の立地と環境	4
III	遺跡の発掘調査	8
1.	遺跡の概観	8
2.	遺構と出土遺物	10
(1)	住居跡	10
(2)	鉄器及び銅製品	69
(3)	土製品	72
(4)	掘立柱建物跡	73
(5)	土壤、溝、グリッド出土遺物	76
IV	結語	81
1.	遺構について	81
2.	出土遺物について	84

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	5	第35図 12号住居跡出土土器実測図	57
第2図 遺跡地形図	7	第36図 13号住居跡、カマド実測図	58
第3図 遺跡グリッド図	8	第37図 13号住居跡出土土器実測図	59
第4図 遺跡全体測量図	折込み	第38図 14号住居跡、カマド実測図	59
第5図 標準土層図	9	第39図 15号住居跡、カマド実測図	60
第6図 1号住居跡実測図	10	第40図 16号住居跡実測図	61
第7図 1号住居跡出土土器実測図	11	第41図 16号住居跡出土土器実測図	61
第8図 2号住跡、カマド実測図	12	第42図 17号住居跡、カマド実測図	62
第9図 2号住居跡出土土器実測図	13	第43図 17号住居跡出土土器実測図	63
第10図 3号住居跡実測図	16	第44図 18号住居跡実測図	64
第11図 3号住居跡カマド1、2実測図	17	第45図 18号住居跡、カマド1、2実測図	65
第12図 3号住居跡出土土器実測図1	19	第46図 18号住居跡出土土器実測図	65
第13図 3号住居跡出土土器実測図2	20	第47図 19号住居跡、カマド実測図	66
第14図 4号住居跡実測図	24	第48図 19号住居跡出土土器実測図	67
第15図 4号住居跡カマド1、2実測図	25	第49図 20号住居跡実測図	68
第16図 4号住居跡出土土器実測図1	27	第50図 住居跡出土鉄器、銅製品実測図	70
第17図 4号住居跡出土土器実測図2	28	第51図 3、4号住居跡出土土鍤、5号 住居跡出土土製品実測図	72
第18図 5号住居跡、カマド実測図	31	第52図 1号掘立柱建物跡	74
第19図 5号住居跡出土土器実測図1	32	第53図 2~4号掘立柱建物跡	75
第20図 5号住居跡出土土器実測図2	33	第54図 1、2、3号土壤実測図	77
第21図 5号住居跡出土土器実測図3	38	第55図 溝1、2、実測図	折込み
第22図 5号住居跡出土土器実測図4	44	第56図 溝1、2、大谷木川旧河川土層 実測図	78
第23図 6号住居跡、カマド実測図	45	第57図 溝1、2、試掘、グリッド出土 土器、石器実測図	79
第24図 7号住居跡、カマド1、2実測図	47	第58図 遺構配置図	82
第25図 7号住居跡出土土器実測図	48		
第26図 8号住居跡、カマド実測図	49		
第27図 8号住居跡出土土器実測図	49		
第28図 9号住居跡、カマド1、2実測図	52		
第29図 9号住居跡出土土器実測図	51		
第30図 10号住居跡、カマド実測図	54		
第31図 10号住居跡出土土器実測図	54		
第32図 11号住居跡、カマド実測図	56		
第33図 11号住居跡出土土器実測図	56		
第34図 12号住居跡、カマド実測図	56		

## 図版目次

- 図版1 遺跡遠景 第1～5号住居跡全景  
図版2 第1号住居跡 第2号住居跡  
図版3 第3号住居跡 第3号住居跡出土鎌  
図版4 第4号住居跡 第4号住居跡カマド  
図版5 第5号住居跡 第5号住居跡出土土製品  
図版6 第5号住居跡 第5号住居跡出土鎌  
図版7 第6号住居跡 第7号住居跡  
図版8 第7号住居跡出土鎌 第8号住居跡  
図版9 第9号住居跡 第9号住居跡カマド1  
図版10 第9号住居跡カマド2 第9号住居出土土器  
図版11 第10号住居跡 第10号住居跡カマド  
図版12 第12号住居跡 第12号住居跡出土土器  
図版13 第13号住居跡 第13号住居跡カマド  
図版14 第14号住居跡 第15号住居跡  
図版15 第17号住居跡 第17号住居跡カマド  
図版16 第18号住居跡 第18号住居跡カマド  
図版17 第19号住居跡 第19号住居跡カマド  
図版18 第19号住居跡出土鉄器 第19号住居跡出土土器  
図版19 第20号住居跡 第1号掘立建物跡  
図版20 第1号土壤 第2号土壤  
図版21 溝1、2全景 溝1土層堆積状態  
図版22 1、1号住出土土器 2～8、2号住出土土器  
図版23 3号住出土土器  
図版24 3号住出土土器  
図版25 3号住出土土器  
図版26 3号住出土土器  
図版27 4号住出土土器  
図版28 4号住出土土器  
図版29 5号住出土土器  
図版30 5号住出土土器  
図版31 5号住出土土器  
図版32 1～5、5号住出土土器 6～9、8号住出土土器  
図版33 1～3、8号住出土土器 4～6、9号住出土土器  
図版34 1～4、10号住出土土器 5～8、12号住出土土器  
図版35 12号住出土土器  
図版36 1、16号住出土土器 2～7、17号住出土土器  
図版37 1、18号住出土土器 2～8、19号住出土土器  
図版38 5号住出土馬具 5号住出土鎌及び鉄製品  
図版39 5号住出土刀子 5号住出土刀装具  
鎌、釘、不明鉄片、銅製品  
図版40 7号住出土鎌、刀子、鎌、釘、3号住出土鎌、17号住出土紡錘車、9号住出土鉄片、18、19号住出土刀子  
図版41 19号住出土鎌、3、4号住出土土鎌

## I 発掘調査の概要

### 1. 調査に至る経過

入間北部に位置する毛呂山町は、鎌北湖や宿谷の滝などの観光地のある静かな町だが、近年、鉄道沿線に住宅地が広がりつつあり、今回調査された件六遺跡も県住宅供給公社の毛呂山団地建設用地内に所在したものである。

教育局文化財保護課では、国・公団・公社・県の開発事業と文化財保護との調整を図るため、毎年「文化財と公共事業の調整会議」を開催している。昭和53年度は10月31日に開催したが、その席で住宅供給公社の団地建設計画が提示された。この計画の中で文化財の所在が予想される地区が3ヶ所あったため、概要・計画図を付して別途照会するよう打合せておいた。これに基づいて、昭和53年11月7日付け53埼住公総第129号をもって、住宅供給公社理事長から県教育長あてに「宅地開発予定地内の文化財の所在及び取扱いについて」という照会文書が提出された。照会されたのは、毛呂山団地・北本南団地・入間扇町屋団地の3ヶ所であったが、北本、入間については試掘の結果文化財は確認されなかった。毛呂山団地については、昭和54年5月10日に文化財保護課の井上主事が現地確認をしたが、130,000m<sup>2</sup>以上の面積で、水田や荒地もあるため遺跡の所在は明確ではなかった。そこで、後日試掘調査を実施することとなり、その日程、方法等について、数回の打合せをし、9月10日、11日の2日間で、重機により行なうことになった。

文化財保護課では、駒宮主事と井上主事の2名を現地に派遣して調査にあたり、毛呂山町教育委員会と住宅供給公社もこれに立ち合った。なお、県文化財保護審議会委員で毛呂山町在住の村本先生にも現地で指導していただいた。

試掘の結果、平安時代の集落が発見されたので先の照会を受けて、昭和54年10月1日付け教文第861号をもって住宅供給公社理事長あて文化財の所在及び取扱いについて回答した。その主旨は次のとおりである。

- 1 埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましい。
- 2 やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法の規定により埋蔵文化財発掘通知を提出すること。

しかし、協議の結果計画変更は不可能であったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は昭和55年4月1日に設立された、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになり、事業団からは埋蔵文化財発掘調査団が、住宅供給公社からは埋蔵文化財発掘通知が文化庁長官あて提出され、昭和55年9月16日から調査は開始された。

なお、文化庁からは昭和55年10月15日付け委保第5の3250号をもって、埋蔵文化財発掘調査団を受理した旨の通知があった。

(井上尚明)

## 発掘調査の組織

### 1. 発掘

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	関 根 秋 夫
		副 理 事 長	本 郷 春 治
		常 務 理 事	渡 辺 澄 夫

庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悅 光
			関 野 荣 一
			福 田 浩
			本 庄 朗 人

発 掘	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
		調査研究部第二課長	小 久 保 微
		調査研究部第四課長	増 田 逸 朗
			鈴 木 秀 雄
			富 田 和 夫

### 2. 整理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
		副 理 事 長	沼 尻 和 也
		常 務 理 事	渡 辺 澄 夫

庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悅 光
			関 野 荣 一
			福 田 浩
			本 庄 朗 人

整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
		調査研究第四課長	増 田 逸 朗
			鈴 木 秀 雄
			富 田 和 夫

### 3. 協 力 者

入間郡毛呂山町教育委員会、地元区長及び地元住民

## 2. 発掘調査経過

併六遺跡の発掘調査は昭和55年9月～56年3月までの半年計画で始められ、当初の調査予定面積は12,000m<sup>2</sup>であった。調査区域の設定は、分布調査に際して表採された遺物が希少であることや、また地形的景観等から遺跡範囲の把握に苦慮し、10余本行われた試掘トレンドで唯一遺物の出土と焼土が認められた大谷木川に沿った西側台地上に限定された。以下には発掘調査の進行状況を毎月に記してゆきたい。

9月 16日発掘調査開始。

ブルドーザーによる雑木、柔の抜根と、表土の掘削が行われ、排土は台地東側の低地に集積された。表土削平後、座標軸に合せてグリッド(10×10m)を設定し、併せて標高を求めて基準杭とした。グリッドは南から北へ1～43、東から西へS～Tとして分割し、各区を1-A、2-A……と呼称した。調査区26～43区について遺構確認面(ソフトローム直上)まで的人力による掘削と遺構確認作業が行われた。

10月 引き続き掘削及び遺構確認作業が行われ、多数の暗褐色土の落ち込みが検出されたが、遺物の出土量は極端に少なかった。ただ26～30区については暗褐色土掘削途中にしてカマドのものと思われる焼土が数ヶ所で検出され、掘削を中止して遺構確認作業が行われたが、この段階では遺構平面プランは確認できなかった。31～43区の落ち込みの掘り下げ作業が行われ、遺構と擾乱の識別がされた。その結果、掘立柱建物跡3棟(2～4号)、1号土壙を完掘した。

11月 31～43区について建物跡と土壙の実測、写真撮影が行われ、26～30区は土の乾燥度の違いから5軒(1～5号住)の住居跡が確認され、遺構掘り下げ作業が開始された。

11月 3～5号住は掘り込みが深く、遺物も多量に出土したため、調査に多くの時間を費したが下旬に完掘する。

12月 1～5号住の実測と写真撮影、終了すると順次カマドの切断が行われた。それと併行して調査は南側部1～25区の遺構確認作業へと移っていった。

1月 1～25区では確認作業の結果住居跡10軒(6～15号住)、建物跡1棟(1号)、土壙2基(2、3号)、溝2本等が検出され、掘り下げ作業が行われた。住居跡は各々掘り込みが浅く、遺物の出土も少量であったため下旬には完掘した。この時点で今回の調査対象地域外である調査区北側の町道予定地に2軒の住居跡が確認され、跡跡がさらに北側部に範囲を広げることが予想された。

2月 計画道路に住居跡断面が検出され(16号住)、急きょ調査範囲を拡大し、40～60、U～Y区のグリッド設定が行われた。調査面積は、18,000m<sup>2</sup>に変更された。1～26区では溝1、2の掘り下げ、遺構の実測、写真撮影等を継続しながら、調査の主体は北側部44～60区に移行し、遺構確認作業の結果16号住を含めて5軒(16～20号住)の住居跡が検出された。下旬には1～26区でカマドの切断、実測等が終了し、全測図の作製が開始された。

3月 中旬には16～20号住が完掘し、実測、写真撮影に併行して、住居跡の最終的な床面切断作業が行われた。19日航空写真撮影が行われた。発掘機材の整理、出土遺物の水洗、写真、実測図の整理とともに発掘調査は全作業を終了した。

(鈴木秀雄)

## II 遺跡の立地と環境

伴六遺跡は毛呂山町岩井字伴六に所在し、八高線毛呂駅から東方へ約700mの地点に位置する。東武越生線東毛呂駅からも南東へ約500mの距離で、駅周辺に広がる市街地の端であるが、特に近年この地方は都心からの50キロ圏として急速に宅地化が進み、遺跡の東側には幾つかの団地群が連なる。かかる本遺跡も毛呂山団地造成に伴う発掘調査が行われ、今回はその報告である。

遺跡は毛呂台地と呼ばれる洪積台地上に営まれている。西部の外秩父山系の東縁部から派生するこの台地は、越辺川と、その支流であり鎌北湖から流出して遺跡の直ぐ東側を流れる大谷木川等に因って形成された扇状台地で、一部の丘陵地帯を除いて広く武蔵野ロームが堆積する。現在台地は越辺川と高麗川との間に挟まれて舌状に東方へ伸びるが、西部山地に接近する地点の標高は75m前後、また越辺川沿岸に広がる沖積地を臨む台地東縁部は標高30m前後と、西から東にゆくにつれて徐々に高度を低くする。本遺跡は標高65m前後に占地して、台地のやや内奥部である。

本遺跡を乗せるこの台地上には縄文～歴史時代に至る遺跡が散在するが、現在までその発掘調査例は希少である。縄文中期の遺跡として城西大学考古学研究部によって調査が行われ住居址群の発見された西原遺跡は（註1）、日高町との境界に沿って東方へ突出した毛呂山丘陵の高麗川を見降す南側緩斜面に占地しており、中期を中心とした縄文時代の遺跡は、丘陵地帯を控えた高麗川沿岸の台地南縁部、そして越辺川流域を遡った西部山地と、比較的その標高を高くして立地する傾向を窺わせる。しかし、高麗川を挟んだ対岸の台地に位置する。花影遺跡（谷井他1974）では中期の住居跡が9軒発見されており、その立地は高麗川沿岸の沖積地を臨む標高30m前後の低台地上である。

高麗川を隔てて毛呂台地対岸の台地は、高麗川入間川とに挟まれた同様の扇伏状地形を呈して、入間台地の主体を成し、毛呂台地はむしろその一部である。

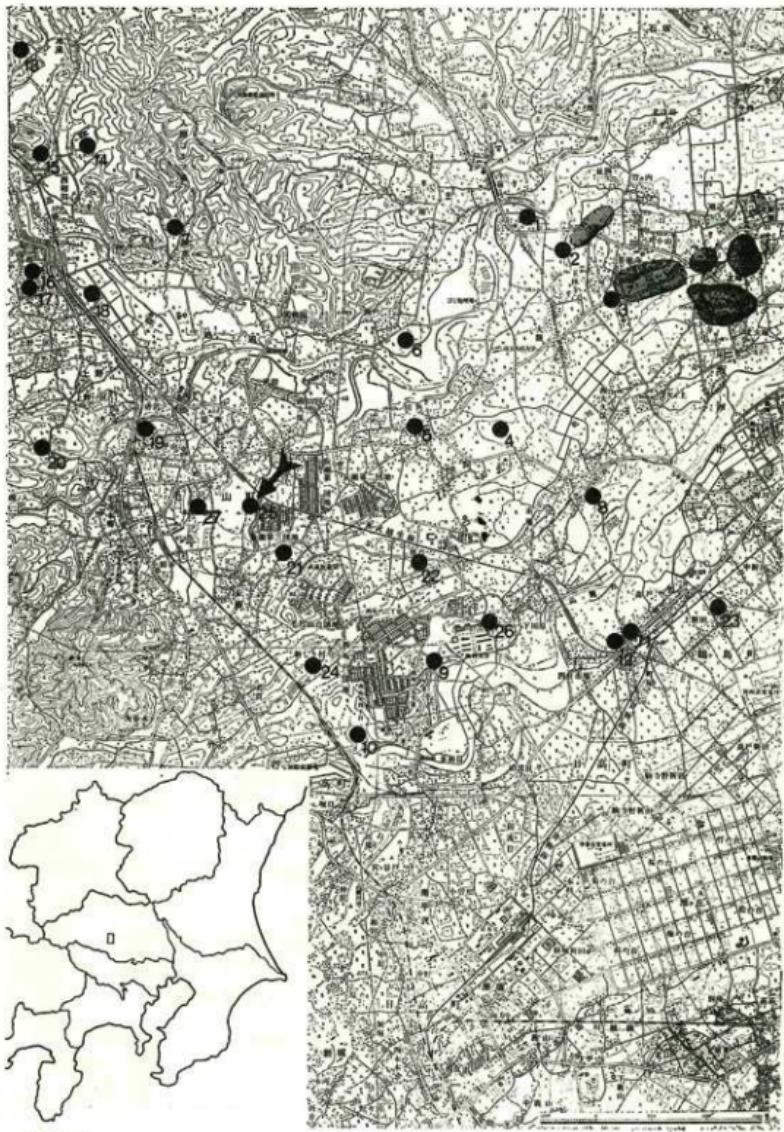
越辺川と高麗川の合流地点に展開する沖積低地を臨む台地縁辺部に立地する遺跡は數多い。

弥生時代では36軒の住居跡が発見された鶴ヶ丘遺跡（小久保他1976）、同じく3軒の相撲場遺跡（谷井1973）、後期の方形周溝墓8基が発見された花影遺跡（谷井1974）等がある。

古墳時代についてみると、古墳のその夥しい数に圧倒される。毛呂台地上に限っても、坂戸市内の善能寺古墳群、成願寺古墳群等、それに隣接して毛呂山町内の大類古墳群、川角古墳群、西戸古墳群とより台地内奥に連なり、さらに越辺川、高麗川両流域を遡って、単独の古墳が丘陵部におよんでいる。

毛呂山町内でも大類古墳群を中心としてその数は150基以上にのぼると言われている。毛呂山78号墳、109号墳については調査が行われ、78号墳は胴張りのつよい舟型石室が確認されて、頭椎太刀、鉄鎌、金銅環等が出土し、古墳時代後期と推定され、また109号墳は7世紀末の実年代が与えられた（註2）。そしてこれら多数の古墳群築造の背景として大規模な古墳時代の集落例の存在が予想される。

歴史時代の遺跡については、本遺跡以外毛呂台地上での集落例は現在知られていない。僅かに西部山地に連なる台地内奥の上台Ⅰ、Ⅱ遺跡で須恵器片が出土した程度である。しかし対岸の入間台地が東方に突出した地域では、近年大規模な集落跡の発掘や確認が行われている。坂戸市内の千代



第1図 遺跡位置図

田遺跡（金井塚良一他1972）、花影遺跡では2軒の住居跡が発見され、鶴ヶ島町内の古墳時代から江戸期までの複合遺跡である脚折遺跡群（玉利他1981）、8世紀後半から10世紀初頭までの官衙的色彩の濃い遺跡とされる若葉台遺跡群（齊藤1979）、大境遺跡等が在在し、未調査やその一部が発掘調査されただけのものもあるが、多大な成果を上げている。これらの遺跡群と平遺跡を比較した時その内容には大きな隔たりがあり、また若葉台遺跡群の土器生産地は比企丘陵窯址群である（齊藤1981）とされており、南北比企丘陵と東金子丘陵窯址群の中間的位置に立地する本遺跡の須恵器供給地の検討に良い材料が提供されている。

(鈴木秀雄)

註1、2 「毛呂山町史」毛呂山町史編さん室 昭和53年

## 参考文献

「埼玉県遺跡地名表」埼玉県教育委員会 昭和37年

## 遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	遺構、遺物	備考
1				
2	大類古墳群	古墳		
3				
4	川角古墳群	古墳 (古墳後期)	円墳、太刀・鉄鏃 金銅環・ガラス玉	毛呂山78号墳 (毛呂山町史、S53)
5				
6	西戸古墳群	古墳	円墳	毛呂山10号墳(町史)
7	大鶴様古墳	古墳(後期)	円墳	
8	塚山古墳	古墳(後期)	前方後円墳	
9	愛宕塚古墳	古墳(後期)	円墳	
10	坂上古墳	古墳(後期)	円墳跡	
11	清名塚古墳	古墳(後期)	円墳	
12	石尊塚古墳	古墳(後期)	円墳	
13	春日井戸古墳	古墳、奈良	土師器、須恵器、石器	
14	山田遺跡	縄文(後)、奈良、平安	縄文土器、土師、須恵器	
15	興禪寺遺跡	縄文、古墳	縄文土器、土師器	
16	上台Ⅰ遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	縄文土器、土師器	
17	上台Ⅱ遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	土師、須恵器	
18	越生五箇遺跡	縄文(早・中期)、奈良	縄文土器、須恵器	
19	古宮遺跡	縄文、古墳	石器、土師器	宅地化
20	御堂ヶ谷戸遺跡	縄文(中期)、古墳	円墳、縄文土器	
21	塚場山遺跡	縄文、古墳	縄文土器、土師器	溝滅
22	旭台南遺跡	縄文、奈良	石器、須恵器	溝滅
23	愛宕遺跡	先土器、古墳～平安	ナイフ、ブレイド、土師、須恵器	
24	新しき村遺跡	弥生(中期)	弥生式土器	
25	伴六遺跡	平安	住居跡20、振立柱跡4	今回報告
26	西原遺跡	縄文中期	住居跡	城西大学考古研 重要文化財
27	出雲伊波比神社			



第2図 遺跡地形図

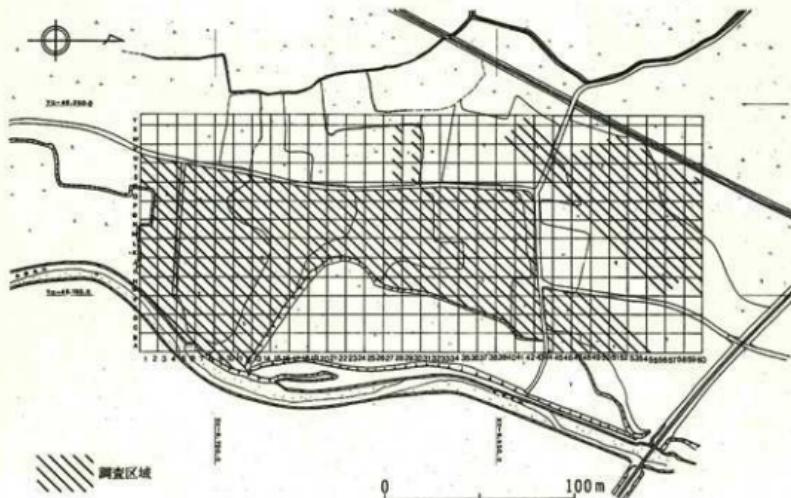
### III 遺跡の発掘調査

#### 1. 遺跡の概観

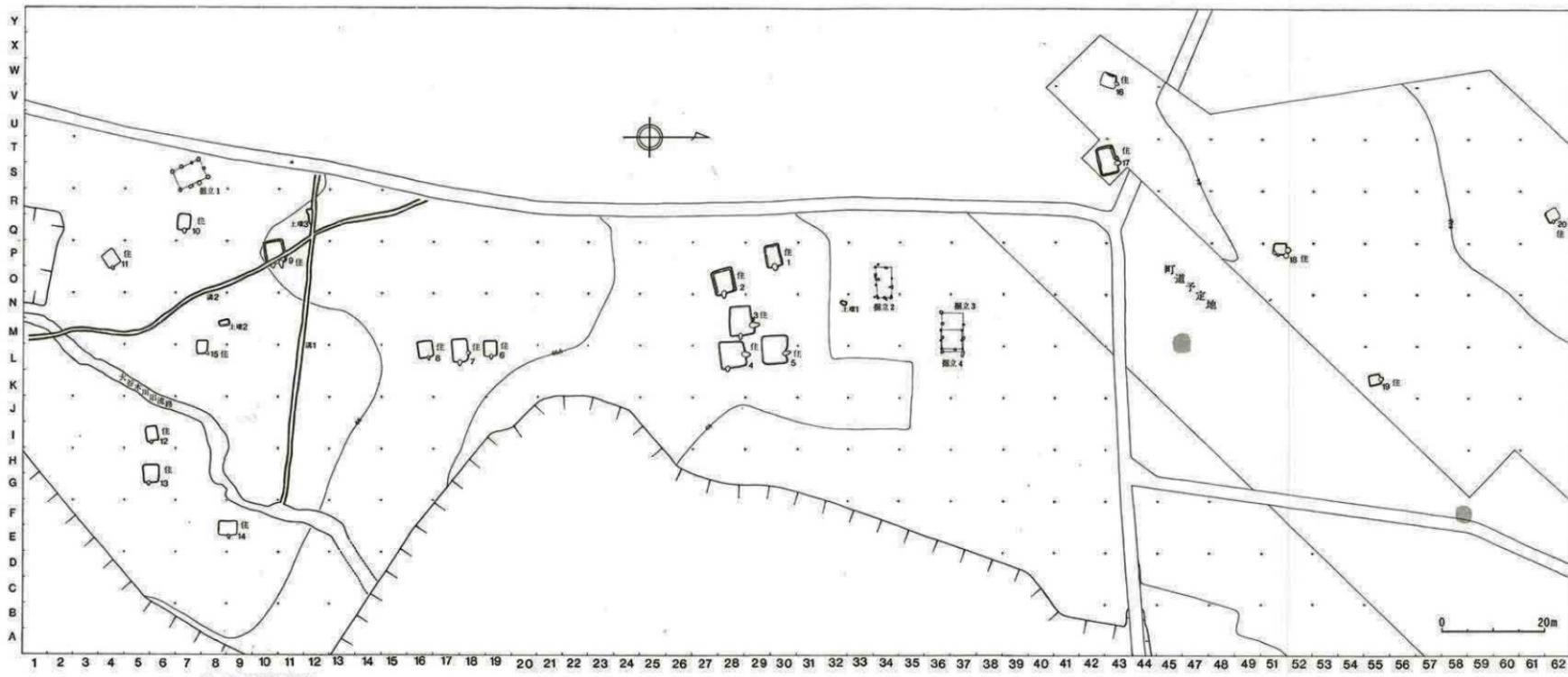
遺跡は、外秩父山系の東縁にあたる山地を背後に控える洪積台地上に立地する。標高は63.5m～66m前後を測り、蛇行して北流する大谷木川に面した左岸（西岸）に位置する。本殿が国の重要文化財に指定されており、また流鏑馬の神事を伝えることでも有名な古社、出雲伊波比神社は、当遺跡の西方約600mの独立丘陵臥龍山上に鎮座している。

調査前の遺跡周辺の土地利用について観察すると、大谷木川に沿った微高地は、主として桑園や畠地として、その西側の一帯は水田として利用されていた。畠地と水田部分との比高差は10～30cm程度で起伏は少ない。調査と平行して進められた計画道路工事の際、掘削された道路部分の土層断面観察による限り、水田地域には何等の遺構も検出されていない。調査によって遺構の発見された範囲は、ほぼ桑園や畠地として利用された部分に一致することから、集落は大谷木川に面した微高地上に営まれたと考えられる。

次に、調査区内の標準的な土層堆積について観察すると（第5図）暗灰褐色を帯びる表土下に、暗褐色の粘質土が堆積する。この暗褐色粘質土の堆積状態は部分的に異なり、調査区南側で薄く、中央部で最も厚く堆積する状況が窺われた。大谷木川の氾濫土と考えられる。その下部には、ローム層が約50～60cmの厚さで堆積し、乳灰色粘質土層に移行する。調査区中央部の1～5号住居址は、第2層の暗褐色粘質土を掘り込んで構築されていたため、プランの確認は、かなり難しかっ



第3図 遺跡グリッド図



第4図 遺跡全体測量図

た。他の部分の遺跡に関しては、ローム上面が実質的な遺構確認面であった。

尚、調査に際しては、座標北を軸に、調査区全域をカバーする  $5 \times 5$ m のグリッドを設定した。そして東南隅を基点に、5m毎に東西に A～Y、南北に 1～60までの番号を付し、両者の直交する位置のグリッド名稱 (1A, 2A……)とした。(第3図)

今回の発掘調査は、総面積約18,000m<sup>2</sup>を対象に実施され、その結果、下記の遺構が検出された。

平安時代の堅穴住居跡	20軒
掘立柱建物跡	4軒
土壙 (うち1基は火葬墓)	3基
時期不詳の溝	2本

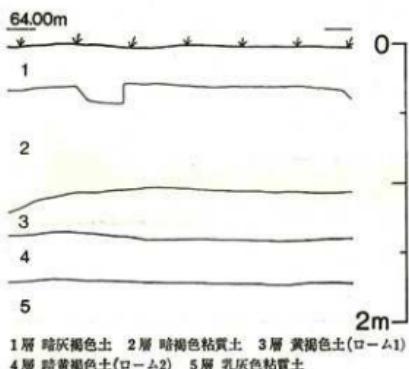
調査区域は、中央部、北側部、南側部の3区に分割して考えられる。まず、中央部には、1～5号住居が密集して構築され、その北側に2～4号掘立柱建物跡を伴う。1～5号住居跡は、他の住居跡に比較して、規模も大きく、遺物の出土量も多い。また、住居跡群と掘立柱建物跡との間に、火葬墓 (土壙1) が検出された。遺物が伴出していない為、埋葬年代は不明であるが、一応平安時代以降と考えておきたい。

調査区南側部では、6～15号住居跡、1号掘立柱建物跡、土壙2・3と溝2本が検出されたほか、12号住と15号住の間を蛇行して走る大谷木川の旧流路と考えられる砂利帯が確認されている。住居跡は、2～3軒単位のまとまりをもって散在する傾向にあるが、住居跡相互の重複は認められなかった。2本の溝は9号住の北側で交差している。溝1は、旧流路まで延びて終るが、溝2は9号住を切断し、旧流路を越えて延びている。掘削時期は不明であるが、かなり新しい時期の所産であろう。

調査区北側部は、当初調査区域外であったが、工事の際遺構の存在が確認された為、急拠調査を実施した地域である。16号住、20号住に就いては、工事及び攪乱による破壊が著しく、明確なブ

ンは把え得なかった。更に、17号住と19号住を結ぶ線と農道とに挟まれた町道予定地内に、少なくとも2軒の住居跡 (第4図スクリーン部分) が存在することを、排水溝の土層観察によって確認している。その部分に就いては、来年度町教委により調査が実施される予定であることを付言しておきたい。尚、調査区北東隅部分には、遺構は検出されなかった。

(富田和夫)



第5図 標準土層図

## 2 遺構と出土遺物

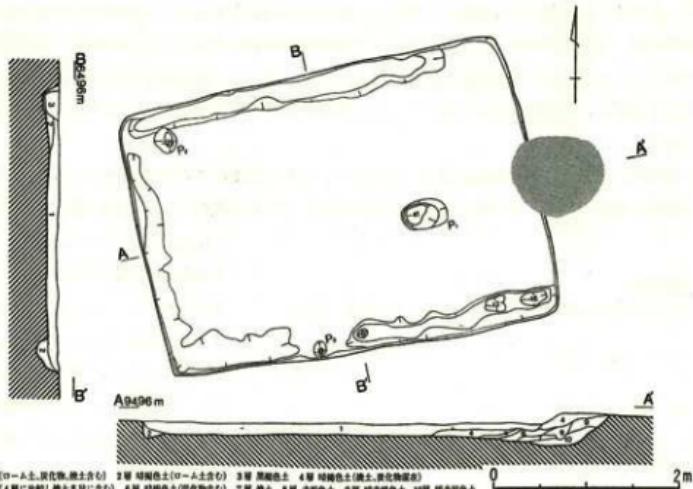
### (1) 住居跡

第1号住居跡（第6図）

調査区中央部、29、30P区で検出された。調査区中央部には、1～5号住が密集して検出され、1号住はその最も西寄りに位置する。平面プランは長方形を呈し、規模は長径4.7×短径3.2mで、主軸方向はN-78°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高20cm前後を測る。東壁を除く各壁直下には周溝が周るが、溝は幅30～70cm前後、深さ10～20cm前後と不規則で整然としていない。柱穴は、住居跡中央から東寄りと、北西コーナー部とで、2本（P1、2）が検出されたが、P2はすり鉢状を呈しつつ穿たれていない。床面は平坦で、比較的良好であるが、堅硬に踏み固められたというような状態ではなかった。

カマド（第6図）は東壁中央に構築されるが、一部攪乱されて平面形は不明確である。壁外へ70cm程掘り込み、燃焼部を深さ約5cm程皿状に掘り窪めている。煙道から燃焼部まで20cm前後の焼上の厚い堆積が認められる。

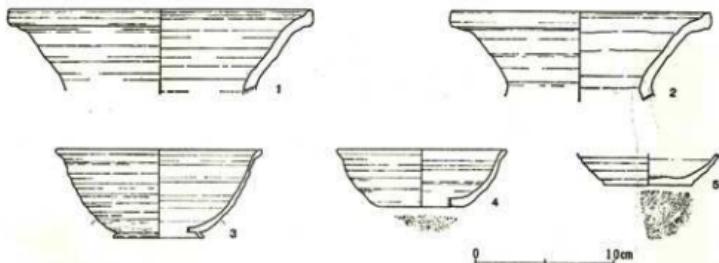
遺物は須恵器甕片と坏が覆土中より出土した。



第6図 1号住居跡実測図

1号住居跡出土土器（第7図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	推定口径 21.8	大きく外反する須恵器甕の口 縁部片。口唇下端の引き出し	ロクロ整形。砂粒多く含む。白 色針状物質含有。黒灰色、焼成	口縁1/4存。



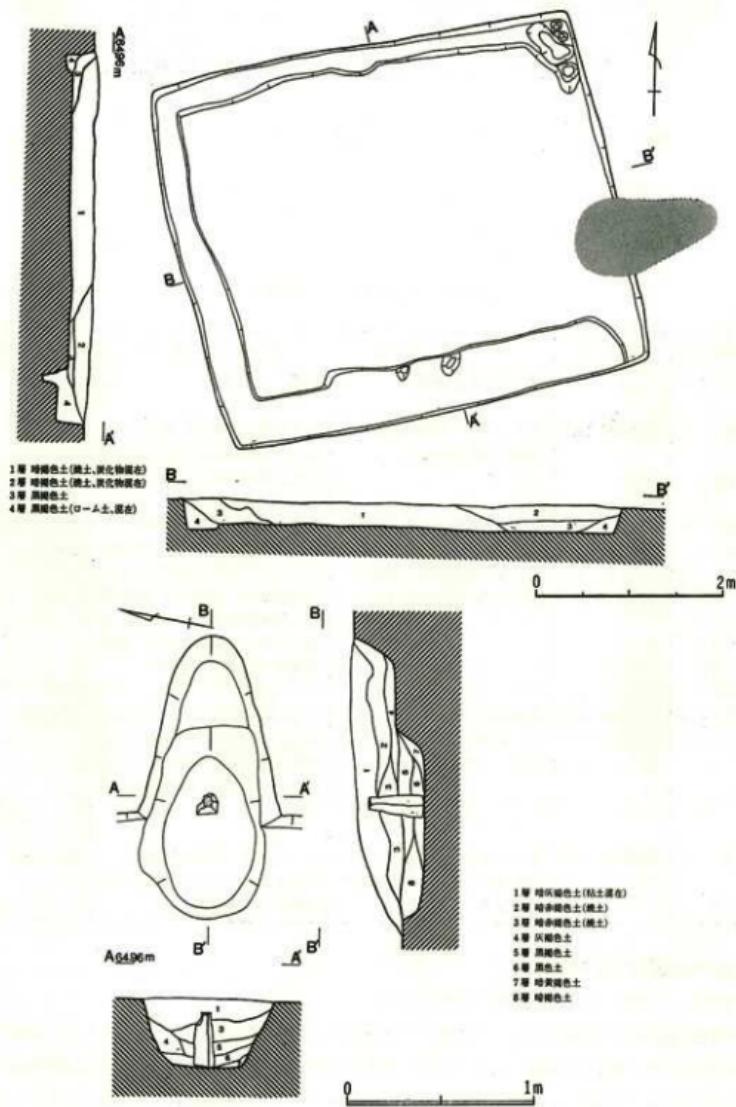
第7図 1号住居跡出土土器実測図

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甌	2	推定口径 18.6	は、ほとんどない。	良好。	
高台付 坏	3	推定口径 14.8 推定高台径 6.5 器高 6.4	大きく外反する甌口縁部。 口唇下端の突出はない。	ロクロ整形。細砂粒多量に含む。白色針状物質含有。内面黒灰色、外面青灰色、焼成良好。	口縁り存。
坏	4	推定口径 12.2 推定底径 6.0 器高 4.15	全体に器壁薄い。体部は内凹して立ち上がり、口縁部は肥厚させて外反する。高台は、低くやや貧弱な感を受ける。	ロクロ整形。ロクロ右回転。外面凹凸顯著。体部下位～底部回転ヘラケズリ調整を施す。胎土に微細砂粒、白色針状物質含有。外面体部上半、青灰色、体部下半及び内面灰色。底、器肉は褐色を呈す。焼成良好。	口縁り/、底部若干存。
坏	5	推定底径 6.3	体部は丸みを帯びて立ち上がり、中位に張りを持つ。口縁肥厚して外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒多量に含む。白色針状物質顯著。体部上半～口縁部にかけ黄褐色、他は灰色を呈す。	口縁り/存。
			底部～体部下半の破片。平坦な底部から段をもって体部に移行する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。小砾若干含む。やや褐色をおびる灰色。焼成不良。	底部り/存。

## 第2号住居跡（第8図）

280区、1号住から約7m南寄りに検出された。

規模は長径4.75×短径4 mで、長方形プランを呈し、主軸方向は N-73°-E である。壁高は30cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は東壁を除く各壁直下に周り、溝は幅25cm～60cm、深さ5～10cm前後で、比較的整然とするが、北東コーナー部ではピット状に凹凸していた。柱穴は検出されず、床面はカマド周辺及び本址中央から南東部の範囲でややレベルを高くし、踏み固めたように堅緻であった。

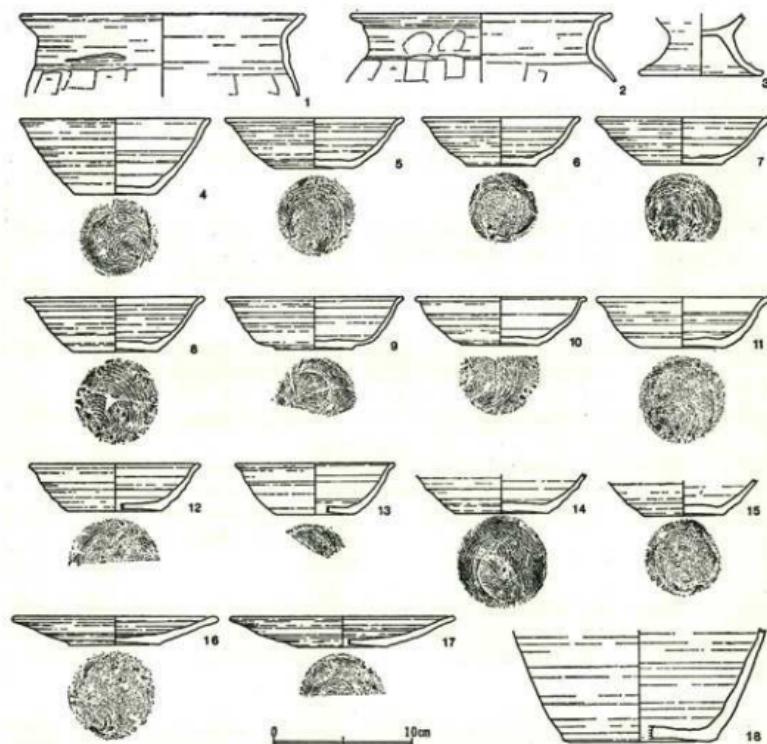


第8図 2号住居跡、カマド実測図

カマド（第8図）は東壁中央からやや南寄りに設けられ、壁外に約1m程掘り込んで煙道部が構築され、燃焼部は約10cm程の深さで楕円形に掘り窪めている。壁を結ぶ直線上には河原名を利用した支脚が直立状態で検出され、燃焼部から煙道部には厚さ10cm程に堆積した焼土が認められた。

遺物は覆土より、坏類を中心に10数点の土器類と共に、刀子2点が出土している。

## 2号住居跡出土土器（第9図）



第9図 2住居跡出土土器実測図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	推定口径 20.4	張りの弱い肩部から内傾ぎみの頸部に移行する。口縁は、やや内湾ぎみに外反する。胸部器内薄い。	口縁部横ナデ。胸部横方向へのラケズリ。頸部にヘラケズリ痕を残す。胸部内面木口状工具痕を残す。砂粒小疊含む。淡赤褐色。焼成良好。	口縁部1/4存。

器種	番号	法 量	形 態 の 特 微	手 法 の 特 微	備 考
壺	2	推定口径 18.7	コの字状口縁突・張りのある胴部から弓状に外傾する頸部に続く。口縁部は強く外反する。	口縁部ヨコナデ。胴上部横方向のヘラケズリ。外面口縁部と頸部は沈線により画されている。頸部外面指頭による凹み残る。内面胴上部木口状工具痕残る。暗赤褐色。堅紙に焼き締まる。	口縁 $\frac{1}{4}$ 存。頸部外面スス付着。
台付壺	3	脚台部径 9.0	脚台裾部に段を持ち、横方向に大きく開く。	台部内外面、横ナデ。	脚台部 $\frac{1}{4}$ 存。
須恵壺	4	推定口径 13.6 底径 5.6 器高 5.5	口径、器高共に大きい壺・平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	ロクロ整形。右回転、底部回転糸切り。胎土は小礫をやや多く含む黄灰色。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。
壺	5	推定口径 12.8 底径 5.6 器高 3.6	体部内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部は外反する。	ロクロ整形、右回転、底部回転糸切り。胎土中には、小礫、砂粒と共に白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。
壺	6	推定口径 11.3 底径 4.9 器高 3.5	やや小ぶりの壺。上げ底気味の底部から、ゆるい段を有し、内湾して立ち上がる。口縁部やや外反する。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。中央部周辺糸切り痕ナデ消される。小礫、砂粒若干含む。紫灰色、焼成堅紙。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。
壺	7	推定口径 12.2 底径 5.7 器高 3.4	体部はゆるい段を持ち、内湾気味に立ち上がり。口縁部は肥厚させて、外反する。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。砂粒の抜けたような小孔が無数に見られる。砂粒、小礫多量に含む。青灰色。焼成堅紙。	口縁若干残る。 底部 $\frac{1}{4}$ 存。
壺	8	推定口径 12.8 底径 6.0 器高 3.9	体部は内湾気味になだらかに立ち上がる。口縁部は、ゆるやかに外反する。	ロクロ整形。右回転、底部回転糸切り。粗砂粒やや多く含む。白色針状物質顯著。灰白色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{10}$ 、底部一部欠損するが、ほぼ完。
壺	9	推定口径 12.8 底径 5.6 器高 3.8	僅かに上げ底気味の底部から段を持って横に伸び大きく屈曲して立ち上がり。口縁部外反。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。底面には、軌跡に異なる二枚の糸切り痕が確認できる。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 存。内外面火埠痕残る。
壺	10	推定口径 12.1 底径 5.6 器高 3.4	体部は内湾ぎみに立ち上がり上位で張りを持つ。口縁は強く外反する。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り、細砂粒、白色針状物質含む。灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ 弱、底部 $\frac{1}{3}$ 存。
壺	11	推定口径 12.2 底径 6.1 器高 3.65	体部丸みを帯びて立ち上がる。口縁外反。全体的に器肉厚い。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。胎土やや粗。白色針状物質含む。くすんだ灰白色。焼	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯	12	推定口径 底径 器高	12.1 6.8 3.4	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部外反する。体部器肉厚い。	成良。 ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。胎土やや粗。白色針状物質含む。青灰色、灰色。焼成良。	口縁1/7、底部1/4弱存。
杯	13	推定口径 推定底径 器高	11.5 5.5 3.7	体部丸みを帯びて立ち上がり、口縁部外反する。口唇端部は尖る。	ロクロ整形、右回転。細砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良。器肉は褐色を呈す。	口縁僅か、底部1/4存。
杯	14	底径	6.8	底径の大きい杯。若干内湾気味に立ち上がる。	ロクロ整形、右回転。底部は、回転糸切りによるが、同一面に軌跡の異なる糸切り痕が2枚認められる。砂粒多量、白色針状物質含む。灰白色。焼成良好。	底部完。
杯	15	底径	5.6	上げ底気味の底部から、比較的直線的に立ち上がる。内面滑らか。	ロクロ整形。白色針状物質顯著に含む。体部外面及び底部の一部赤褐色、他は暗灰色を呈す。	底部一部欠失。
皿	16	口径 底径 器高	14.4 6.45 2.1	上げ底気味の底部から直線的に外方に伸びる。口唇肥厚する。全体に厚手である。	ロクロ整形、胎土やや粗。白色針状物質含む。青灰色、焼成良好。	口縁1/2、底部完。
皿	17	推定口径 底径 器高	16.0 6.5 2.2	体部直線的に伸びる。口縁部僅かに外反気味。	ロクロ整形、底部回転糸切り。細砂粒、白色針状物質含む。灰白色焼成良好。	口縁1/4、底部1/2存。
壺	18	推定底径	11.2	壺底部及び胴下半の破片。厚い底部から弱い段を有し立ち上がる。内面凹凸激しい。	外面横方向のナデ、内面ナメ、横方向の難なナデ調整。砂粒、白色針状物質含む、焼成良。灰色。	底部1/4存。

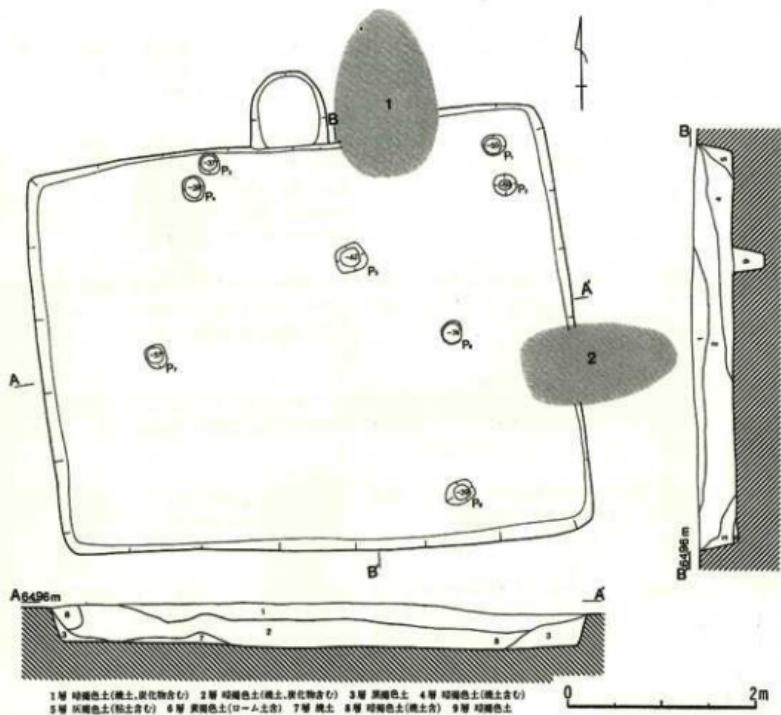
## 第3号住居跡（第10図）

28M、N区に位置し、2号住の東3m、さらにその東に位置する4号住とは接するように検出された。

規模は長径5.7×短径4.3mで、長方形プランを呈し、主軸方向 N-83°-E である。壁高は30cm前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は最終的な床面切断時に検出されたもので、しっかりと穿たれているが、その配置には一定の規則性が認められない。床面は良好で、本址中央部を中心によく踏み固められ堅敏である。

カマド（第11図）は、北壁東寄り（カマド1）と、東壁南寄り（カマド2）に、2基構築されている。カマド1は、壁外に約1.7m程舟先形に掘り込んで煙道部とし、燃焼部は約20cm前後すり鉢状に掘り窪めている。カマド1の左側に隣接する径1.6m、深さ15cmの皿状の掘り込みは、覆土

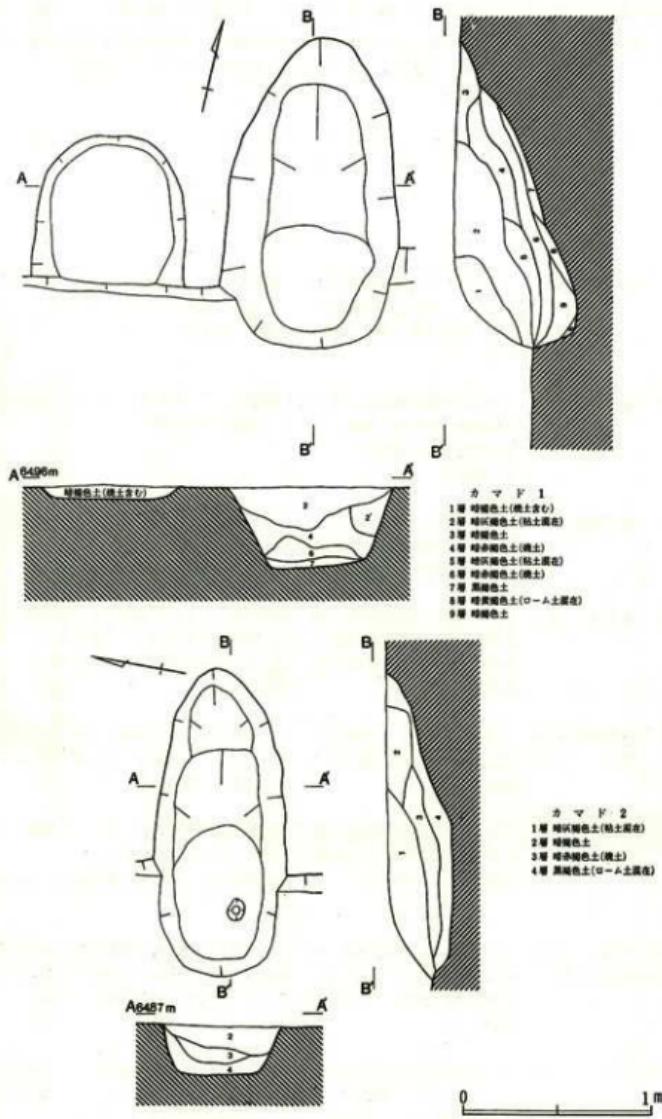
がカマド 1 層に近似し、おそらくカマド 1 構築時に関連を持った施設と考えられる。カマド 2 は、壁外に 1.1m 程舟先形に掘り込んで煙道部とし、燃焼部は深さ 10cm 程の皿状で橢円形を呈している。燃焼部の小ピットは支脚埋設用の施設であろうか。カマド 1 と 2 の新旧関係は、その遺存状態から 2 → 1 と推定される。遺物は、覆土より坏類を中心に多量の土器類が、掘り方より数点の坏が出されている。



第10図 3号住居跡実測図

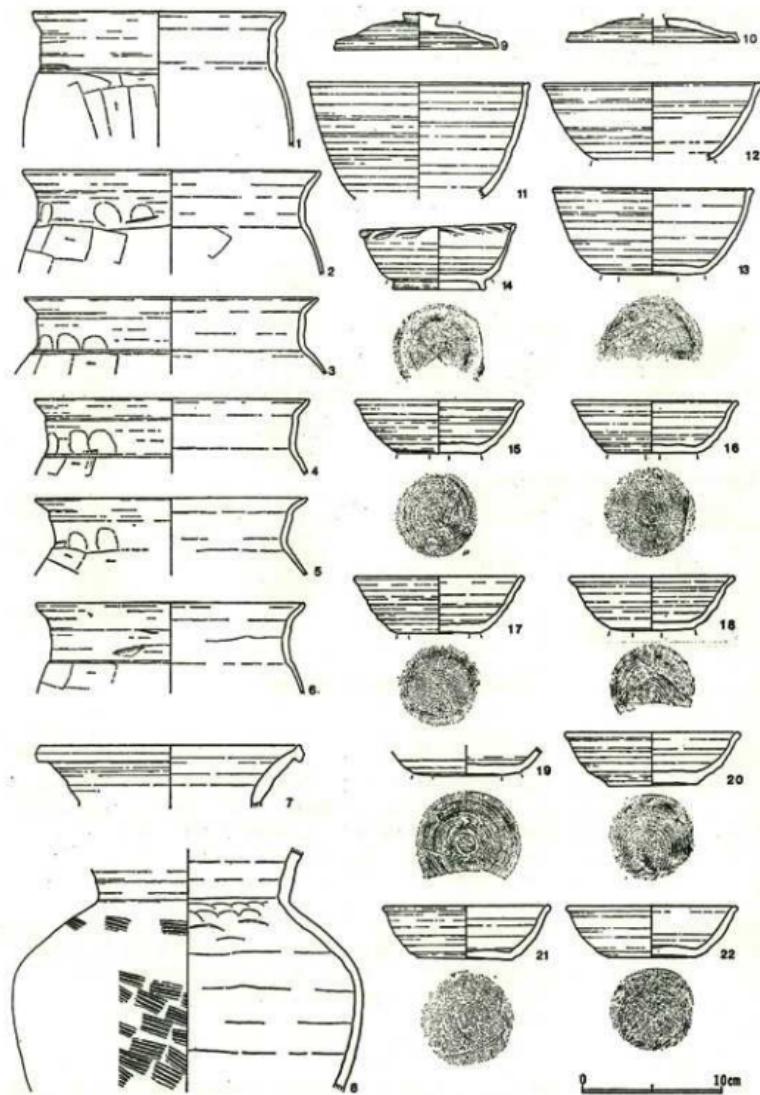
### 3号住居跡出土土器（第12、13図）

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土器	1	推定口径 18.2	コの字形状。胴部張り少ない。頸部は直立する。口唇部つまみあげ。	口頸部横ナデ。胴部上位横、斜めのヘラケズリ、以下縦ヘラケズリ。焼成良。赤褐色。	口縦 $\frac{1}{2}$ 。フク土。
甕	2	推定口径 21.2	直立気味の頸部より、口縁はゆるく外反する。	口頸部横ナデ。頸部指頭痕残す。胴部横ヘラケズリ。	口縁 $\frac{1}{2}$ 存。全体的に磨滅。

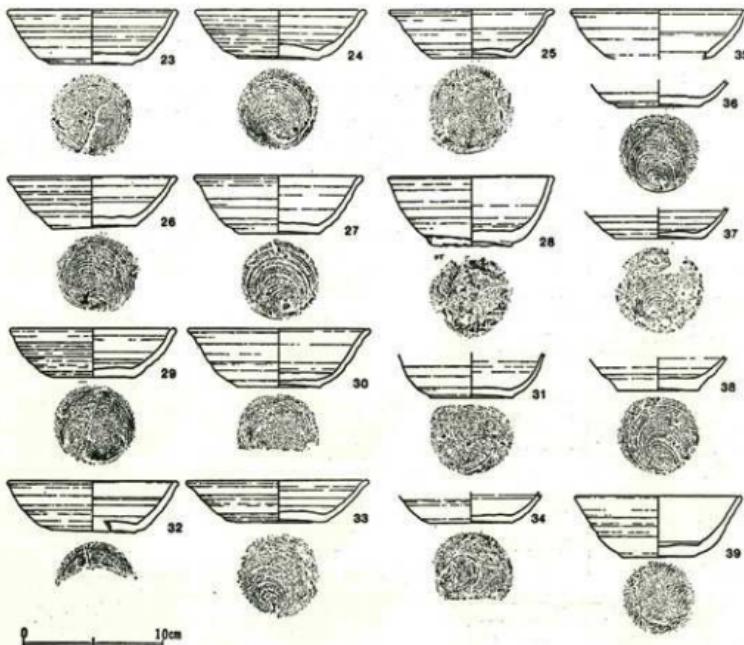


第11図 3号住居跡カマド1、2実測図

器種	番号	法 量	形 態 の 特 微	手 法 の 特 微	備 考
甕	3	推定口径 21.2	コの字状口縁。頭部外傾気味に直行し、口縁外反する。胴部強く張る。	口頭部横ナデ。頭部指頭痕残る。胴部横ヘラケズリ。黄褐色。焼成良好。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。
甕	4	推定口径 19.8	コの字状口縁。頭部外傾気味に直行する。口縁は外に折れ、端部は立ち上がる。	頭部と口縁部、頭部と胴部は、浅い沈線により、画される。口頭部横ナデ。頭部指頭による凹凸あり。胴部横ヘラケズリ。赤褐色。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。
甕	5	推定口径 19.6	コの字状口縁。頭部直行部は外傾し、口縁は強く外側に折れる。胴部は強く張ると思われる。	口頭部横ナデ。頭部指頭圧痕残る。胴部上半横ヘラケズリ。淡赤褐色。焼成良好。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。
甕	6	推定口径 19.4	コの字状口縁。頭部直行部は外傾気味に伸びる。胴部との境は段を持つ。頭部にヘラケズリ痕残す。	口頭部横ナデ。胴部横ヘラケズリ。赤褐色。焼成良好。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。
須恵器 甕	7	推定口径 19.0	甕口縁部破片。頭部外反して伸び、口唇部は上下に引き出される。端部は丸みを持つ。	クロ整形。灰黒色。焼成良好。	口縁部 <sup>1/4</sup> 存。
甕	8	最大径 25.5	胴部下半及び口縁部欠失。胴部上半で張りを持つ。頭部は外傾する。胴上半部に自然軸付着。	胴部外面タタキ目。頭部横ナデ。胴部内面上半には、指頭(?)による圧痕残る。灰黒色。焼成良好。	胴部一周する。
蓋	9	推定口径 11.8 器高 2.6	つまみは扁平で、中央部やや突出する。縁部は外傾気味に屈曲する。	クロ整形。つまみ部周辺は回転ヘラケズリ。青灰色。白色針状物質含む。焼成良好。	つまみ完。縁部 <sup>1/4</sup> 、体部 <sup>1/4</sup> 存。
蓋	10	推定口径 12.4	つまみ部欠失。扁平な蓋。据近くで水平近く広がり、縁部は強く屈曲して外傾。	天井部回転ヘラケズリ。他クロナデ。胎土に微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	縁部 <sup>1/4</sup> 存。
壺	11	口径 16.0	大ぶりで、深い塊形土器。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は、肥厚し、上端は面を持つ。	クロ整形。右回転。体部下端回転ヘラケズリ調整。小窪やや多く含む。青色、焼成堅紙。	口縁 <sup>1/2</sup> 存。床直。フタ土下部。
壺	12	推定口径 15.5	大ぶりの壺。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は、ゆるやかに外反する。端部は、肥厚する。	クロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。粗い砂粒をやや多く含む。白色針状物質含有。青灰色、灰黑色。焼成良好。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。掘りかた出土。



第12図 3号住居跡出土土器実測図1



第13図 3号住居跡出土土器実測図2

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯	13	推定口径 14.2 底径 7.4 器高 6.2	大ぶりの杯。体部は、ゆるやかに内湾して立ち上がる。口唇部は、僅かに外反気味におさめる。口縁部は、正円ではなく、やや歪む。	ロクロ整形。底部回転糸切り後外縁部へラケズリ。砂粒を多く含む。白色針状物質含有。焼成良好。灰色、青灰色。	口縁1/2弱、底部1/2存。覆土。
高台付杯	14	推定口径 11.2 高台径 6.6 器高 4.2~4.4	形態にやや歪みあり。器高も一様でない。口縁部の器肉は、内外両面に亘り、ヘラ状工具(?)によって削り取られている。何を意匠しているかは不明。口唇部は肥厚。	ロクロ整形。体部下端及び底部全面回転へラケズリ調整を施す。貼りつけ高台。微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	口縁1/4、底部3/4存。覆土、ピット。
杯	15	口径 11.9 底径 6.0 器高 3.8	体部はゆるく内湾気味に立ち上がり、口縁は、ゆるく外傾する。体部下端に粘土貼り付け痕と思われる痕跡が確認で	右回転のロクロ整形。底部回転糸切り後、外縁部回転へラケズリ。細砂粒、白色針状物質含む。灰色。焼成良好。	口縁3/4、底部完。覆土。掘りかた出土。

器種	番号	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
坏	16	口径 底径 器高	11.8 6.5 3.8	体部は丸みを帯びる。口縁部は外傾する。  きる。また内面の底部から体部の移行部には、粘土離ぎ目状の一条の凹線が観察される。	右回転のロクロ整形。底部は、中央部に僅かに糸切り痕を残すのみで、他は回転ヘラケズリ。細砂粒白色針状物質含む。青灰色、淡青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{3}$ 、底部完。掘りかた出土。
坏	17	口径 底径 器高	12.0 6.0 4.1	体部は、ゆるやかに丸みを帯びて立ち上がり。比較的直線的に口縁に至る。	右回転のロクロ整形。底部は、回転糸切り後、外縁部手持ちヘラケズリ。細、粗砂粒、白色針状物質含む。青灰色、焼成良好。	口縁 $\frac{1}{3}$ 強、底部完。掘りかた出土。
坏	18	推定口径 底径 器高	11.8 6.1 3.9	中央部に向け、ゆるく突出する。底部から、体部は内湾して立ち上がる。口縁付近で外に折れ、口唇部は肥厚する。	右回転のロクロ整形。底部は回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ調整。微細砂粒、白色針状物質含む。青みを帯びる灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部存。覆土。
坏	19	底径	7.7	大きな底部から内湾して体部に移行する。大ぶりの坏になると考えられる。	底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。底部外面中央部に、ほぼ一周する円形の沈線が認められる。微細砂粒。青灰色、焼成堅緻。	底部 $\frac{1}{2}$ 存。掘りかた出土。
坏	20	口径 底径 器高	12.4 6.2 3.9	底部厚い。体部は中位で張りを持つ。口縁部は弱く外傾する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り後無調整。砂粒多く含む。白色針状物質含有。灰白色、焼成良。	口縁 $\frac{1}{3}$ 、底部完。掘りかた出土。
坏	21	口径 底径 器高	11.8 6.8 3.9	全体的に厚めの土器。体部は、丸みを持ち、口縁の外反は弱い。底部内面中央凹む。	ロクロ右回転。底部回転糸切り。小穂若干含む。白色針状物質顯著に含む。口縁部青灰色、他は褐色を呈す。焼成やや不良。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。覆土。
坏	22	推定口径 底径 器高	12.0 6.2 3.7	形態、胎土、焼成、色調とも21に類似。口縁はやや厚さを減じて、小さく外反する。底部から体部の移行部には、一条の凹線が残る。あるいは、巻き上げの痕跡か。	ロクロ右回転。底部回転糸切り後軽いナデ調整。	口縁 $\frac{1}{3}$ 、底部完。
坏	23	口径 底径 器高	12.0 6.0 3.9	厚めの底部から、体部下方で屈曲し、内湾気味に伸びる。底部から体部下位にかけて、	ロクロ右回転。底部回転糸切り。径3~5mm大の穂を若干含む。白色針状物質顯著。青灰	ほぼ完存。覆土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
坏	24	口径 底径 器高	12.0 5.8 3.6	焼成時の亀裂が走る。 形態は、やや歪み、口縁部は稍円形を呈する。底部中央は非常に厚い。体部は内湾気味に外に開く。口唇部の外反は弱い。	色、焼成良好。	
坏	25	口径 底径 器高	11.7 6.0 3.45	底部上げ底、身込み部中央凹む。体部は内湾して立ち上がり、口縁は外反する。内面底部から体部の移行は、鋭く屈曲する。	ロクロ右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含む。灰白色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。覆土。
坏	26	口径 底径 器高	12.0 6.0 3.7	体部から口縁部にかけて、内湾気味にゆるやかに開く。口唇部は、やや肥厚する。	ロクロ右回転。底部回転糸切り。小穂、砂粒や多く含む。白色針状物質若干含む、青灰色。焼成良好。	完存。覆土。
坏	27	推定口径 底径 器高	12.0 5.7 4.2	やや深めの坏。体部は、ゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は肥厚させて、僅かに外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部ほぼ完。覆土。
坏	28	底径 器高	5.8 5.0	深い坏。厚い底部から丸みを持って立ち上がる。口縁は直行する。底部には、二枚の糸切り面が認められる。一次面と二次面は、雑なナデつけによって接合されている。	ロクロ整形、雑。底部回転糸切り。胎土粗い。白色針状物質顯著に含有。青灰色～灰色。焼成良好。	口縁一部のみ存。底部完。覆土。
坏	29	口径 底径 器高	11.8 5.8 3.5	全体的に厚手。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。内外面には、リング状に墨状物質が付着する。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。粗砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色～黄灰色。焼成良好。	完存。覆土。
坏	30	推定口径 底径 器高	13.0 6.0 4.2	やや法量の大きい坏。薄手の底部から、体部下半で丸みを持って立ち上がる。口縁部はゆるやかに外反する。	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。胎土は、砂粒、白色針状物質多量に含み、粗い。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 存。覆土。
坏	31	底径	6.0	上げ底の底部から、体部は丸味をもって立ち上がる。体部器壁薄い。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色～褐色。焼成良。	底部 $\frac{1}{4}$ 存。
坏	32	口径 推定底径 器高	12.0 6.0 3.7	全体的に厚手の形態。体部から口縁まで、内湾気味に開く。	ロクロ、右回転。底部回転糸切り、白色針状物質含む。青灰色。焼成良。	口縁 $\frac{1}{3}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 存。

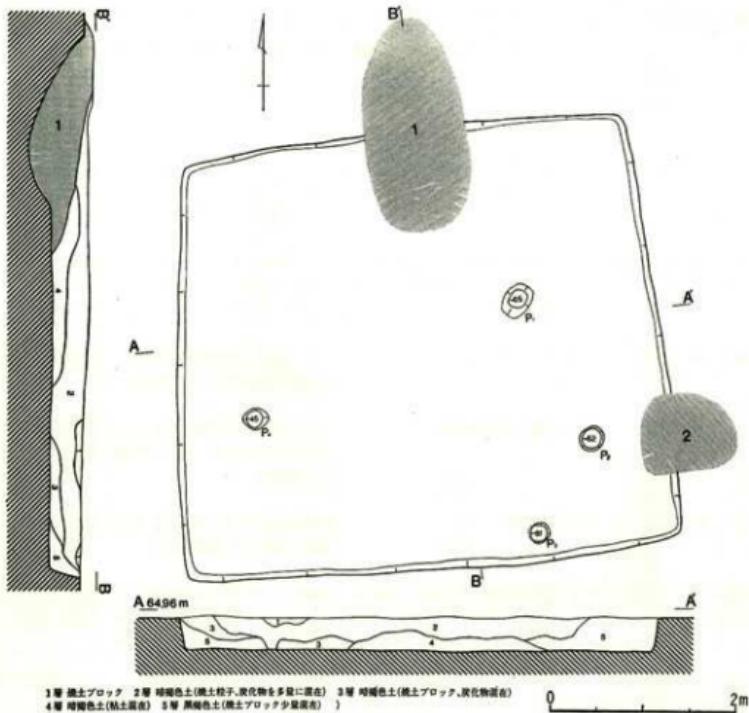
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
坏	33	口径 底径 器高	12.9 6.0 3.0	浅い皿状を呈する坏。上げ底 気味の底部から、体部は大き く広がる。口縁部は更に外に 反る。	ロクロ整形、右回転。底部回転 糸切り。粗砂粒を多く含む。や や青味を帯びる灰色。焼成やや 不良。	口縁 $\frac{1}{2}$ 存、底 部完。覆土、 ピット。
坏	34	底径	6.0	体部丸みを帯びて立ち上 がる。	ロクロ整形、右回転。底部回転 糸切り。白色針状物質顯著に含 む。灰褐色。焼成良。	底部 $\frac{1}{4}$ 、体部 下半存。
坏	35	推定口径	12.6	体部丸みを帯び、内湾気味に 立ち上がる。口縁は肥厚させ 僅かに外に反る。	ロクロ整形、雑。胎土も粗い。 白色針状物質含む。淡青灰色、 一部褐色を呈する。焼成良。	口縁。
坏	36	底径	5.8		ロクロ整形。底部回転糸切り。 白色針状物質含む。淡青灰色。	底部完。
坏	37	底径	6.2	身込み部中央凹む。	ロクロ整形。底部回転糸切り。 白色針状物質含む。灰色、灰褐 色。焼成良。	底部 $\frac{1}{2}$ 存。床 直。
坏	38	底径	5.9	底部厚い。	底部回転糸切り。白色針状物質 含む。青灰色。焼成良好。	底部完。
土師器 内黒坏	39	口径 底径 器高	11.9 5.7 4.4	所謂内黒土器。厚手の底部か ら体部下半で張りを持ち、直 線的に立ち上がる。内面平 滑。	外面ロクロ整形。内面横方向の ヘラミガキ。酸化焰焼成。底部 回転糸切り。胎土精選。外面黄 褐色、内面黒色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ 存。底 部完。覆土。

## 第4号住居跡（第14図）

調査区中央部の28-L区、3号住のカマド張り出し部に西壁が接するように位置する。

規模は長径5.2×短径4.8mで、およそ正方形プランであるが、北壁辺が短いためにやや台形を呈する大型の住居跡である。主軸方向はN-86°-Eである。壁高は35cm前後を測り、周溝は検出されなかった。柱穴(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)最終的に床面切断時に検出された。柱穴は各々深さ40~60cm前後としっかり穿たれるが、その配置に計画性がみられない。床面はよく踏み固められ良好である。

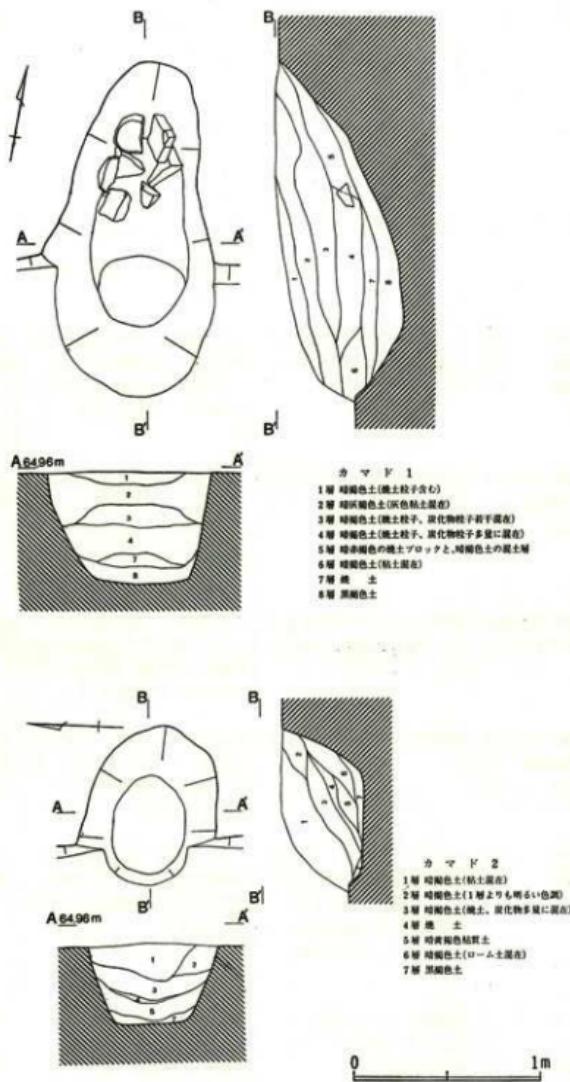
カマド（第15図）は2基構築されていた。カマド1は北壁中央、カマド2は東壁南側部に設けられている。カマド1は壁外に約1.1m程舟先形に掘り込んで煙道部とし、燃焼部は皿状に深さ25cm程掘り窪めている。煙道部には大形の河原石が7点積み重なるように出土したが、これは掘り込みの上に渡して天井部を架構した河原石の中央が陥没し倒壊した状態である。燃焼部には約8cm前後の厚さで焼土の堆積が認められた。カマド2は1に比較して小規模である。壁外に約60cm程椭円形に掘り込み、煙道は急角度で立ち上がる。燃焼部は床面を深さ約7cm程皿状に掘り窪めており、約3cm程の厚さで焼土の堆積が認められた。カマド1、2の新旧関係は、その遺存状態の比較から2→1と推定され、またカマド2が東壁南側に不自然に寄り過ぎることから、カマド1構築時に本址北側部の拡張が考えられる。遺物は、まとまって出土していて、床面附近からの出土が多かった。



第14図 4号住居跡実測図

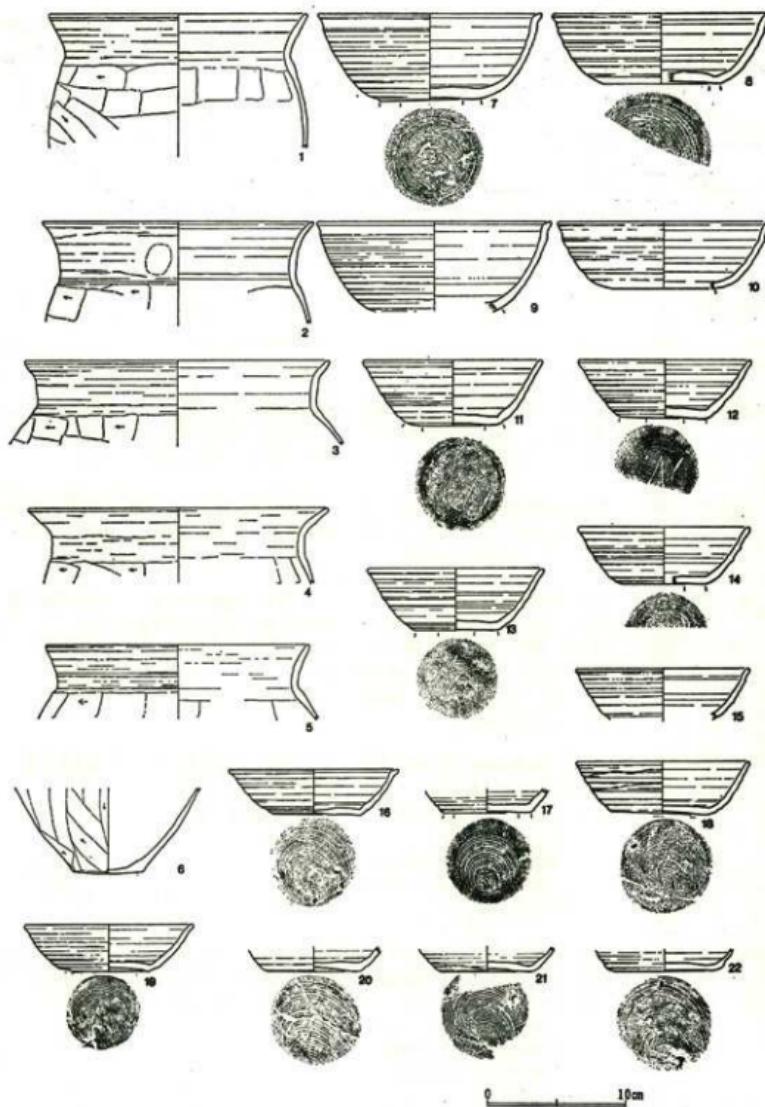
4号住居跡出土土器 (第16、17図)

器種 番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器 甕	1 推定口径 18.5	胴部は上位でゆるやかに張る。口縁は、頸部でくの字状に折れ外反する。	口頭部横ナデ。胴部外面横、斜めのヘラケズリ。内面木口状工具によるケズリ・雲母。砂粒含む。赤褐色。焼成良好。	口縁約1/4存。胴部上半1/4存。覆土。
甕	2 推定口径 19.4	口縁部弓状に外反する。指頭圧痕残る	口頭部横ナデ。胴部横ヘラケズリ。赤褐色。焼成良好。	口縁約1/4存。カマド内。
甕	3 推定口径 21.8	強く張る胴部から、頸部はやや外傾気味に直行する。口縁部は更に外傾する。	口頭部横ナデ。胴部横ヘラケズリ。赤褐色。焼成良好。	口縁約1/4存。覆土。
甕	4 推定口径 21.6	張りの弱い胴部から、頸部直	口頭部横ナデ。胴部横ヘラケズ	口縁約1/4存。

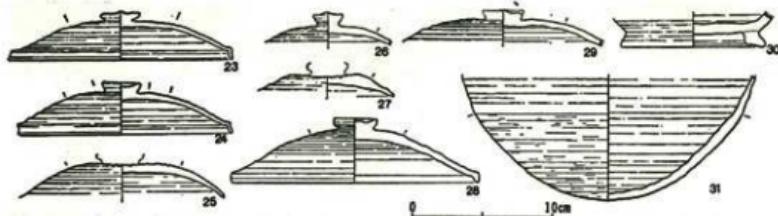


第15図 4号住居跡カマド1、2実測図

器種	番号	法 量	形 態 の 特 微	手 法 の 特 微	備 考
			立する。口縁部は大きく外に伸びる。	リ茶褐色。焼成良。	北カマド内。
甕	5	推定口径 19.0	やや張りの強い胴部から、頸部でくの字状に折れる。口縁部は直線的に外反する。	胴部横ナデ。胴部横ヘラケズリ。内面、木口状工具痕残る。黄褐色、焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 存。北カマド内。
甕	6	推定底径 5.0	甕底部及び胴下部破片。	胴部外面は、繼、斜方向のヘラケズリ。底部外面もヘラケズリ調整外面茶褐色。内面赤褐色。焼成良好。	底部 $\frac{1}{2}$ 存。覆土。
須恵器 壺	7	口径 16.0 底径 7.2 器高 6.3	大ぶりで深い甕。体部は下半で丸みをおびて立ち上がる。口縁は短く外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。砂粒多量に含む。白色針状物質顯著。青灰色、焼成やや不良。	口縁 $\frac{1}{4}$ 存、底部完。覆土。
壺	8	推定口径 15.5 推定底径 8.4 器高 7.0	全体的な形態は、7に類似するが、7に比較してやや浅い。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。微細砂粒、白色針状物質顯著に含む。灰色、灰褐色。焼成やや不良。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 存、覆土。
壺	9	推定口径 16.9 現存高 6.4	形態は、7、8に類似するが、一まわり大きい。底部欠失。	ロクロ整形。体部下端に回転ヘラケズリ痕を残す。白色針状物質含む。青灰色、灰褐色、焼成やや不良。砂粒多量に含む。	口縁 $\frac{1}{4}$ 存。掘りかた出土。
壺	10	推定口径 15.2 推定底径 7.4 器高 4.8	形態的には、8に最も類似する。	ロクロ整形。右回転。底部外縁部回転ヘラケズリ痕を残す。砂粒、白色針状物質顯著に含む。紫灰色、焼成良。	口縁約 $\frac{1}{4}$ 存。底部外縁の一部のみ存。
壺	11	口径 12.6 底径 6.9 器高 4.7	丸みをもって底部から移行する。体部は、直線的に立ち上がる。口縁部を外反せずに、素直に伸びる。底部外面には「M」状のヘラ記号が刻まれる。	ロクロ右回転。底部回転糸切り後外縁部回転ヘラケズリ調整。砂粒白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 底部。完。覆土。
壺	12	口径 12.2 底径 6.2 器高 4.2	形態的には、11に類似する。底部にも「M」状のヘラ記号が刻まれている。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。白色針状物質顯著に含む。青灰色。焼成良好。	口縁、底部 $\frac{1}{4}$ 存。床直。覆土。
壺	13	推定口径 12.5 底径 6.0	11、12に類似する。底部ヘラ記号は「W」状を呈する。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。白	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 存。覆土。



第16図 4号住居跡出土土器実測図1



第17図 4号住居跡出土土器実測図2

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		器高 4.3		色針状物質顯著に含む。青灰色。焼成良好。	
坏	14	推定口径 12.2 推定底径 6.0 器高 4.1	11~13に形態、手法とも類似する。但し、底部残存部には、ヘラ記号に刻まれていない。	底部回転糸切り後。外縁部ヘラケズリ調整。白色針状物質顯著に含む。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 弱、底部 $\frac{1}{2}$ 存。
坏	15	口径 12.5	底部欠失。体部は、ゆるく丸みを帯びて立ち上がり、口縁は、一段屈曲して外反する。	ロクロ右回転の砂粒、白色針状物質目立つ。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{2}{3}$ 、体部 $\frac{1}{3}$ 存。覆土。
坏	16	口径 12.2 底径 6.3 器高 3.4	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に移行する。口縁中程で影れ、口唇部は、強く外反させる。その結果、口唇上端は、平坦面をつくる。底部中央非常に薄い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒含む。白色針状物質若干含有。青灰色、黄灰色。焼成良好。	ほぼ完存。覆土。
坏	17	底径 6.4	口縁及び体部上半欠失するが、手法、胎土等から、11~14の杯とほぼ同様の形態をとるものと考えられる。また、底部外面には、13と類似する「W」状のヘラ記号が刻まれている。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。白色針状物質顯著に含む。青灰色。焼成良好。	底部完。覆土。
坏	18	口径 12.4 底径 6.6 器高 3.8	体部は、丸みを持ってゆるやかに立ち上がり、口縁は直線的に伸びる。体部には、ロクロ整形痕は異なる。二条の朱線が確認できる。間隔は、口縁に近づくに従い狭まる傾向にある。あるいは成形時の痕跡か。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り後無調整。白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{2}{3}$ 、底部完。覆土。
坏	19	口径 12.0	上げ底の底部から、体部は下	ロクロ整形。底部回転糸切り無	口縁約 $\frac{1}{2}$ 、底

器種	番号	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
		底径 器高	5.5 3.4	端で強く張って立ち上がる。口縁整部は、ゆるやかに外反する。	調整。白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	部完。覆土。
坏	20	底径	6.7	上げ底を呈する底部から、丸みを持って立ち上がる。	ロクロ整形。白色針状物質顯著に含む。灰褐色。焼成不良。	底部完。覆土。
坏	21	底径	6.5	底部上げ底を呈する。糸抜き時の段差がある。	底部回転糸切り。白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	底部%存。覆土。
坏	22	底径	7.2	底径大きい。口縁、体部欠失。	底部回転糸切り。白色針状物質含む。黄褐色。酸化焰焼成によると考えられる。	底部ほぼ完。覆土。
蓋	23	推定口径 器高	16.0 3.4	つまみは扁平で、中央部がやや突出する。体部はゆるやかに湾曲し、据部で横に伸びる。縁部は屈曲し、若干外傾気味。	ロクロ整形。つまみ周辺は、回転ヘラケズリ。白色針状物質含む。細砂粒若干含む。青灰色、焼成良好。	縁部%存。つまみ完。覆土、ピット。
蓋	24	口径 器高	15.2 3.7	つまみ中央部凹む。体部は湾曲する。据部で横に伸び、縁部は強く屈曲する。全体的に薄手。	ロクロ整形。つまみ部の周縁回転糸切り痕を残し、更にその周囲を回転ヘラケズリ調整を施す。小穂若干含む。白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	縁部%、つまみ完。覆土。
蓋	25			つまみ及び、縁部欠失、天井部や厚手、つまみ剥落部分に回転糸切り痕残る。	ロクロ整形。つまみ部周辺回転ヘラケズリ。砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	覆土。
蓋	26			縁部欠失。つまみ完存する。つまみは宝珠状を呈する。	ロクロ整形。つまみ部周辺回転ヘラケズリ。白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	覆土。
蓋	27	推定口径 器高	17.6 4.6	つまみは扁平。端部から中央部にかけて凹む。中央部はわずかに突出。突出部は平坦。やや厚手。	ロクロ整形。つまみ周辺回転ヘラケズリ。白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	縁部%存。覆土。
蓋	28			つまみ端部、縁部欠失。つまみ中央部やや突出。体部はゆるやかに湾曲する。全体的に薄手。	ロクロ整形。つまみ周辺回転ヘラケズリ。胎土比較的精選。白色針状物質若干含む。淡青灰色。焼成良好。	覆土。
蓋	29			つまみ、縁部欠失。天井部厚い。	ロクロ整形、つまみ周辺回転ヘラケズリ。白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	覆土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	30	高台径 10.2	壺底部破片。歪みあり、高台は貼付けによる。	胎土微細砂粒含む。青灰色、灰黒色。	高台部 $\frac{1}{2}$ 存。
鉢(?)	31		胴部上半～口縁欠失。底部丸底を呈する、須恵器鉢形土器か？	ロクロ整形。胴部下半回転ヘラケズリ。砂粒多量に含む。白色針状物質含む、青灰色、焼成良好。	覆土。

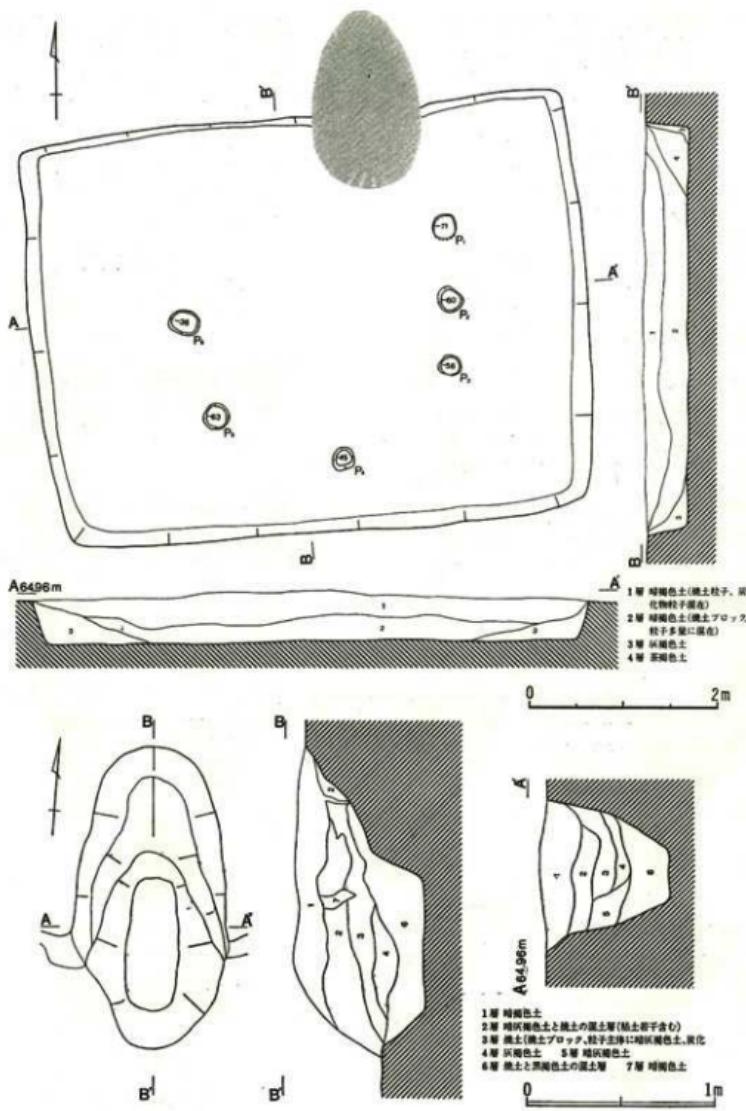
## 第5号住居跡（第18図）

調査区中央部の28—L区、4号住から北へ約3.5mに位置する。

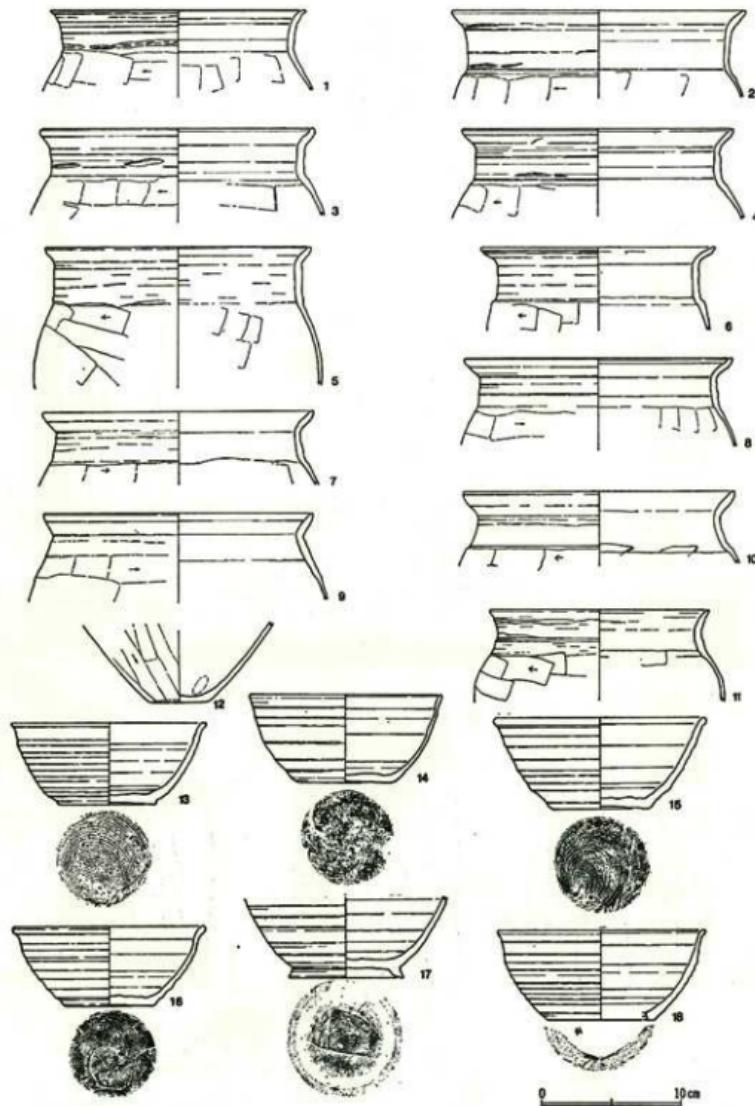
規模は長径5.95×短径4.4mで、長方形プランを呈し、今回の調査で発見された住居跡では最大規模のものである。主軸方向はN-85°Eである。壁高は約40cm前後を測り、周溝は検出されなかつた。柱穴(P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>)は床面精査時には不明で、最終作業である床面切断時に検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は本址東刷側で約70～80cmの柱間距離で南北方向に並列して配され、P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>は各々P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>に相対し本址西側に穿たれていた。床面は中央部でややレベルを高くし、よく踏み固められて良好な状態であった。カマド（第18図）は北壁中央からやや東側に構築され、壁外に約1m程舟先形に掘り込んで煙道部とし、燃焼部は床を約23cm程掘り窪めていた。燃焼部から煙道には約10cm前後の厚さで焼土の堆積が認められた。遺物は覆土1、2層から須恵器の杯類を中心に多量の出土をみたが、それは投げ捨てられたような状態であった。鉄器は、馬具が東壁ぎわ壁崩土層中から、鎌2点は床直状態で出土した。

## 5号住居跡出土土器（第19～22図）

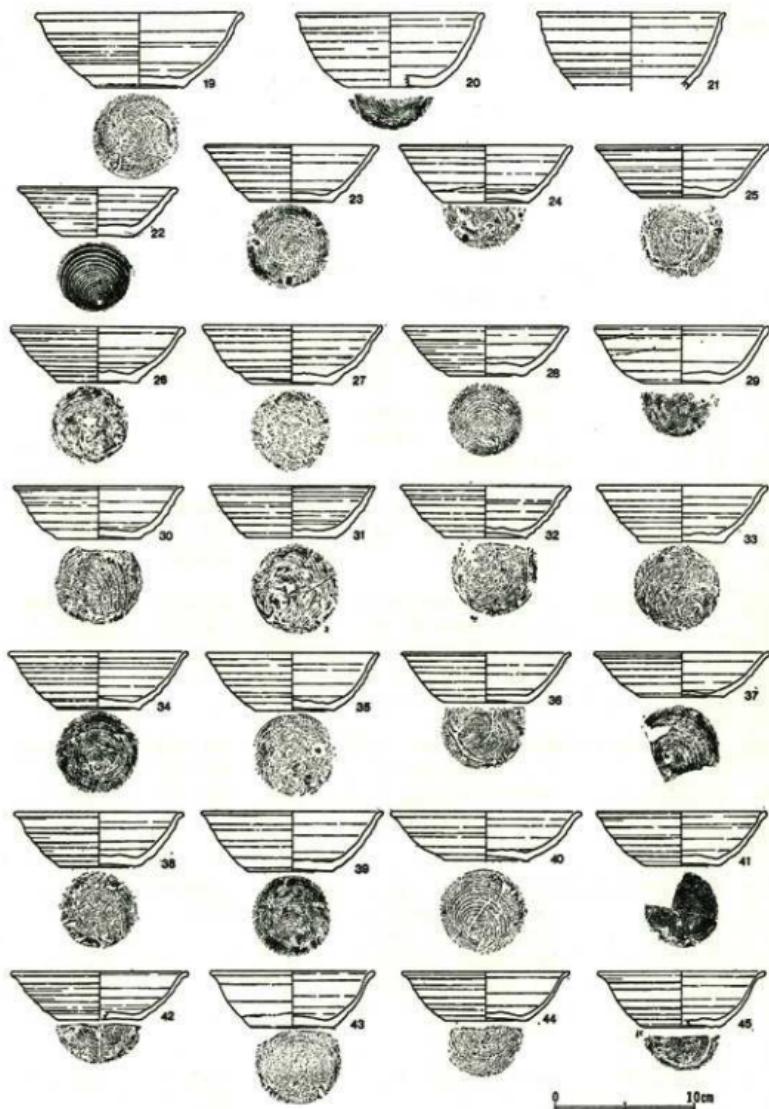
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1	推定口径 18.2	やや張りの強い胴部から、頸部は屈曲して外傾気味に直行する。口縁はゆるやかに外反する。頸部にヘラケズリの痕跡を残す。	口縁部横ナデ。胴部横ヘラケズリ。胴部内面には、木口状工具痕を残す。赤褐色。焼成良好。	口縁部 $\frac{1}{2}$ 存。 覆土。
甕	2	推定口径 21.0	コの字状口縁。頸部はやや外傾気味に直行する。胴部器肉は非常に薄く削り取られる。口縁部にヘラ状工具痕を残す。	口縁部横ナデ。胴部外面横ヘラケズリ。赤褐色。焼成。	口縁部 $\frac{1}{2}$ 存。 覆土。
甕	3	推定口径 19.4	コの字状口縁。頸部は直立する。口縁は外反し、端部は上方につまみあげられている。頸部ヘラ状工具による痕跡を残す。	口縁部横ナデ。胴部外面横ヘラケズリ。胴部内面木口状工具によるナデ。砂粒多量含有。赤褐色。焼成良好。	口縁部 $\frac{1}{2}$ 存。 覆土。
甕	4	推定口径 19.4	コの字状口縁。張りの強い胴部から、頸部は直立する。口	口縁部横ナデ。胴部外面横方向のヘラケズリ。肩部には鋭い稜	口縁部 $\frac{1}{2}$ 存。 覆土。



第18図 5号住居跡、カマド実測図



第19圖 5號住居跡出土土器實測圖1



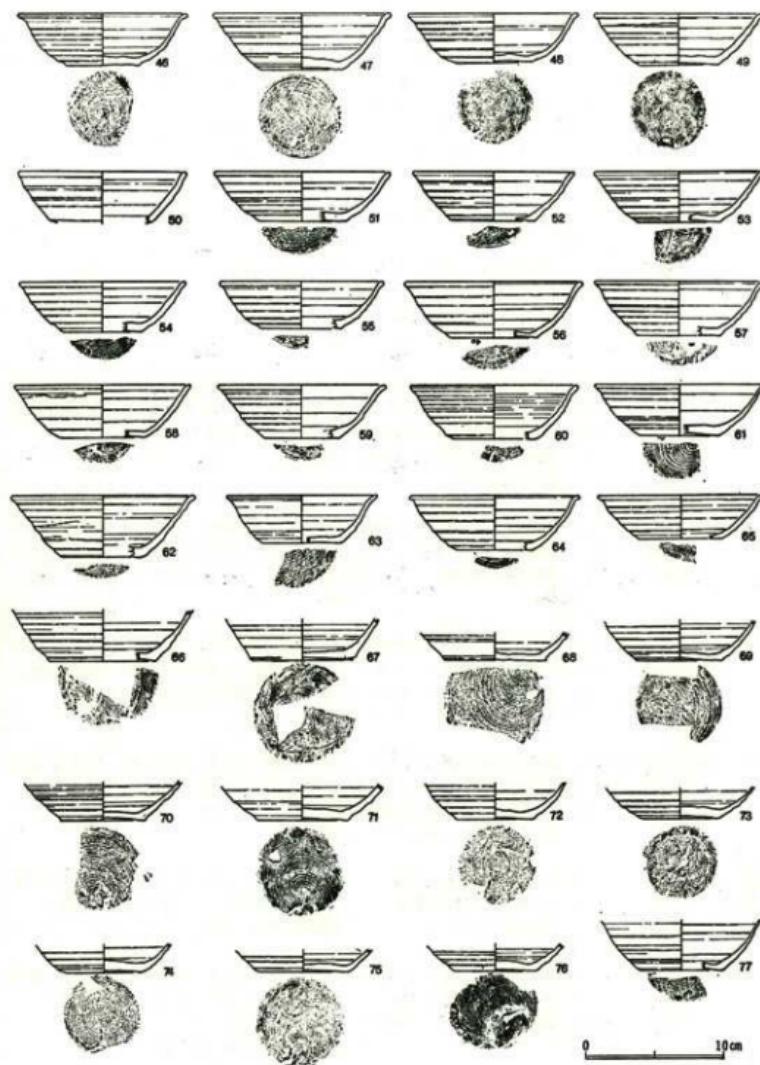
第20図 5号住居跡出土土器実測図2

器種	番号	法 量	形 態 の 特 微	手 法 の 特 微	備 考
			唇部は内湾気味に開く。頸部と口縁部は、浅い沈線によって画される。頸部にはヘラ状工具のあてられた痕跡を残す。	を持つ。砂粒、雲母含む。橙褐色。焼成良好。	
甕	5	推定口径 19.0	コの字状口縁。胴部張り弱く、頸部は直立する。口縁部は内湾気味に外反する。肩部には、ヘラケズリが強い為、段を持つ。胴部薄手。	口頸部横ナデ。胴部外面は、肩部付近で横、以下斜めのヘラケズリ。内面木口状工具によるナデ。	口縁部 <sup>1/4</sup> 存。覆土。
甕	6	推定口径 16.6	コの字状口縁。胴部の張りは非常に弱く、段を持って頸部に移行する。頸部は、わずかに内傾気味に直立し、口縁部は、大きく開く。口唇部外面に浅い沈線が巡る。	口頸部横ナデ。胴部外面横ヘラケズリ。黄褐色。焼成良好。	口縁部 <sup>1/4</sup> 存。覆土。
甕	7	推定口径 19.4	コの字状口縁に類似する。頸部は内傾して直立し、口縁は内湾気味に外反する。	口頸部横ナデ。胴部外面横ヘラケズリ。内面木口状工具の痕跡残す。赤褐色。焼成良好。	口縁部 <sup>1/4</sup> 存。覆土。
甕	8	推定口径 19.0	コの字状口縁。頸部内傾気味に直立し、口縁部は強く外反する。口唇部は上方につまみあげられる。胴部器肉は、非常に薄く削り取られている。	口頸部横ナデ。胴部外面横ヘラケズリ。内面木口状工具による調整痕残る。赤褐色。焼成良好。	口縁部 <sup>1/4</sup> 存。覆土。
甕	9	推定口径 19.3	頸部は直線的に内傾し、口縁部は、くの字状に外反する。口唇部は厚さを減じて、尖り気味につくる。最大径は胴部にある。	口頸部横ナデ。胴部外面横方向のヘラケズリ。砂粒多量に含む。赤褐色、黄褐色。焼成良好。	口縁部 <sup>1/4</sup> 弱。
甕	10	推定口径 19.4	頸部は、湾曲しつつ内傾し、口縁は、外反。口唇部はやや内湾気味におさめる。胴部と頸部は沈線によって画されている。内面肩部には、木口状工具(?)によるケズリが施されている。	口頸部横ナデ。胴部横ヘラケズリ。赤褐色。焼成良好。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。
甕	11	推定口径 15.6	胴中位以下は欠損するが、台付甕と考えられる。頸部は内傾し口縁部は、比較的ゆるやかに外反する。内面頸部下端の稜は鋭い。胴部器肉は薄く	口頸部横ナデ。胴部横方向のヘラケズリ。淡赤褐色。焼成良好。頸部及び口縁部の中位に浅い沈線が巡る。	口縁 <sup>1/4</sup> 存。

器種	番号	法 量	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕	12	底径 4.5	削られる。		
須恵器 环	13	口径 底径 器高 13.8 6.9 5.8	甕底部付近の破片。内面滑らか。 大ぶりの坏。体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。底部から体部の移行部分は、段を有する。	胴部縦ヘラケズリ。底部外面もヘラケズリされる。赤褐色。焼成良好。	底部 $\frac{1}{2}$ 弱。
坏	14	推定口径 底径 器高 13.7 6.6 6.3	大ぶりの坏。体部器肉は薄い。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は、僅かに外方に開くが、口唇部は、上方に伸びる。全体的に磨滅が著しく、体部のロクロ引き上げの凹凸は目立たない。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に小穂が目立つ。白色針状物質は含まない。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ 弱、底部ほぼ完。覆土。
坏	15	推定口径 底径 器高 15.0 6.8 6.5	大ぶりの坏。形態にやや歪みあり。上げ底を呈する底部から、体部は内湾気味に開く。口縁部は僅かに外反する。器表面やや磨滅する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒多量に含む。白色針状物質顯著に認められる。外面灰白色。内面黄灰色。焼成や不良。	口縁 $\frac{1}{2}$ 存。底部完。覆土。
坏	16	推定口径 底径 器高 13.5 6.2 5.65	体部は内湾気味に開き、上位で張りを持つ。口縁部は肥厚させて外反する。	ロクロ整形。ロクロ右回転。微細砂粒、白色針状物質含む。底部切り離しは、回転糸切りによるが、同一面上に、軌跡の異なる二枚の糸切り痕跡が認められる。青灰色。暗青灰色。焼成堅緻。	口縁一部のみ存。底部完存する。覆土、ピット出土。
高台付 坏	17	高台径 高台高 現存高 8.2 0.8 5.7	口縁消失するが、深く大ぶりの高台付坏。器表面の凹凸は少なく比較的滑らか。高台は、貼付けにより、また厚目で、しっかりとたつくり。接地面は、外縁部にある。体部は内湾気味に外方に開く。	ロクロ整形。右回転。胎土に砂を多量に含む。白色針状物質は確認できない。青灰色、紫灰色。焼成堅緻。底部回転糸切り。	高台部 $\frac{1}{4}$ 存。覆土。
坏	18	推定口径 推定底径 器高 14.8 7.6 6.4	体部は上位で張りを持つ。口縁は厚さを減じて口唇部を小さく外反させる。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土には小穂目立つ。白色針状物質確認できない。淡青灰色。焼成堅緻。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部外縁部 $\frac{1}{4}$ 弱残存。覆土、ピット出土。
坏	19	推定口径 底径 14.7 6.4	身の深い、大ぶりの坏。体部は内湾気味に大きく開く。口	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物	口縁 $\frac{1}{2}$ 。底部完。覆土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
坏		器高 推定口径 推定底径 器高	5.3 13.3 6.2 5.3	縁部は肥厚させて外反する。 体部は、底部から丸みを帯びて滑らかに移行して立ち上がる。口縁部付近で一旦内屈し、口縁部は、屈曲して外反する。全体に厚手。	質含む。灰色、灰褐色。焼成や不良。	
	20			ロクロ整形。底部回転糸切り、微細砂粒、白色針状物質含む。灰色灰褐色。焼成や不良。	口縁 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 弱存。	
坏	21	推定口径 現存高	13.4 5.4	底部欠失。体部は、内湾気味にゆるやかに開き、口縁部は小さく外反させる、大ぶりの坏。	ロクロ整形。右回転。小穂をや多く含む。白色針状物質確認できない。やや褐色を帯びる青灰色。焼成良。	口縁 $\frac{1}{2}$ 弱。覆土。
坏	22	口径 底径 器高	11.2 5.1 3.5	やや小ぶりの坏。底部、体部共に器内厚い。厚めの底部から体部は直線物に外傾して立ち上がる。口唇部は外反気味。	ロクロ整形。右回転。底部は回転糸切り。胎土は細かく、白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ 、底部完。覆土。
坏	23	推定口径 底径 器高	12.3 6.0 4.05	底部から口縁部まで、直線的に開く形態をとる。器厚もほぼ一定している。外面の凹凸は比較的顕著である。	ロクロ整形。右回転。底部は回転糸切りによる切り離し。胎土には、微細砂粒とともに白色針状物質が顕著に含まれる。灰褐色を基調に若干青味を帯びる。焼成や不良。	口縁 $\frac{1}{2}$ 、底部完存。覆土。
坏	24	口径 底径 器高	12.2 6.0 4.1	上げ底を呈する底部から、体部は比較的直線的に開く。口縁部は、僅かに外反気味。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。穂の混入が目立つ。白色針状物質含まない。青灰色、堅緻。	口縁 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 弱。覆土。
坏	25	口径 底径 器高	12.3 5.9 3.7	上げ底の底部から、体部は直線的に口縁部まで開く。口縁部は僅かに外に反り気味。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒とともに。白色針状物質顕著に含む。灰褐色、一部青灰色。焼成不良。	口縁 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 存。覆土。
坏	26	口径 底径 器高	12.3 5.9 4.0	底部から直線的に立ち上った体部は上位で張りを持ち内湾する。口縁部は、やや外傾し、口唇部を肥厚させる。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土中に穂を多量に含むが白色針状物質は含まない。青灰色。焼成良好。	口縁約 $\frac{1}{2}$ 、右部完。
坏	27	推定口径 底径 器高	12.8 5.8 4.2	体部は中位で大きく膨れ、内湾する。口縁部は外反気味に伸び、口唇端部は内反り気味におさまる。体部下端、底面直上には、もう一枚の糸切り面が確認でき、糸切り痕も残されている。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土には、小穂を多量に含む。茶褐色粒子含む。橙褐色、一部青灰色も呈する。焼成不良。軟質。	口縁 $\frac{1}{2}$ 弱。底部完存。覆土。

器種	番号	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
坏	28	口径 底径 器高	11.8 5.35 3.6	全体的に厚めで、扁平な坏。上部底気味の底部から段を持て体部に移行する。体部はやや丸みをもって開きそのまま括れずに口縁に続く。口唇部は僅かに外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質顯著に認められる。やや青みをおびる灰色。焼成良好。	ほぼ完存。覆土。
坏	29	推定口径 底径 器高	12.3 5.4 4.1	底部上部底、体部は下半で丸みを持ち、開き気味に口縁部まで伸びる。口縁部肥厚するが体部外面には、粘土難ぎ目状に2条の細い線が、ほぼ平行して認められる。	ロクロ整形。底部回転糸切り。粗砂粒を多量に含む。白色針状物質若干含む。灰白色。焼成良好。	口縁1/4、底部1/4存。掘方出土。
坏	30	推定口径 底径 器高	12.0 6.0 3.8	器形の歪み著しい。正常な部分からの復元実測。外面ロク口引き上げによる凹凸顯著。体部内湾気味に開き、口縁は緩かに外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に小穢やや多く含む。青灰色。一部灰色。焼成堅敏。	口縁1/4弱、底部1/4存。覆土。
坏	31	口径 底径 器高	11.8 6.5 3.7	体部は緩やかに、内湾気味に立ち上がり、口唇部で小さく外反する。外面の凹凸は顯著。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に径5~6mm程度の穢を若干含む。青灰色。堅敏。	口縁一部欠失するが、ほぼ完存。覆土。
坏	32	推定口径 底径 器高	12.0 6.0 3.7	底部上部底、体部は内湾気味に開く。口縁は小さく外反する。外面凹凸は比較的顯著。底部に「一」印のヘラ記号がある。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に小穢を若干含む。白色針状物質は含まない。青灰色。堅敏。	口縁1/3、底部1/3存。覆土。
坏	33	推定口径 底径 器高	12.0 6.1 4.05	体部は、内湾気味に開き、口縁部は、緩やかに外反する。外面凹凸は比較的顯著。底部に「一」印のヘラ記号あり。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に小穢が目立つ。白色針状物質は含まない。青灰色、堅敏。	口縁1/3、底部完。覆土。
坏	34	推定口径 底径 器高	12.7 6.1 4.1	体部は緩やかに内湾気味に大きく開き、口縁部は肥厚させて僅かに外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質顯著に含む。灰色。焼成良好。	口縁1/10、底部完。覆土。
坏	35	口径 底径 器高	12.4 5.8 4.15	体部は緩やかに丸みを帯びて外方に開く。口縁部は僅かに外反する。外面凹凸比較的顯著。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に穢が目立つ。白色針状物質は含まれない。灰白色、青灰色。焼成比較的良好。	口縁2/3、底部完。覆土。
坏	36	口径 底径 器高	12.0 6.0 3.6	体部は僅かに内湾気味に立ち上がり、口縁部で緩やかに外反する。口唇部は比較的強く外方に引き出される。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	口縁2/3、底部1/3存。



第21図 5住居跡出土土器実測図3

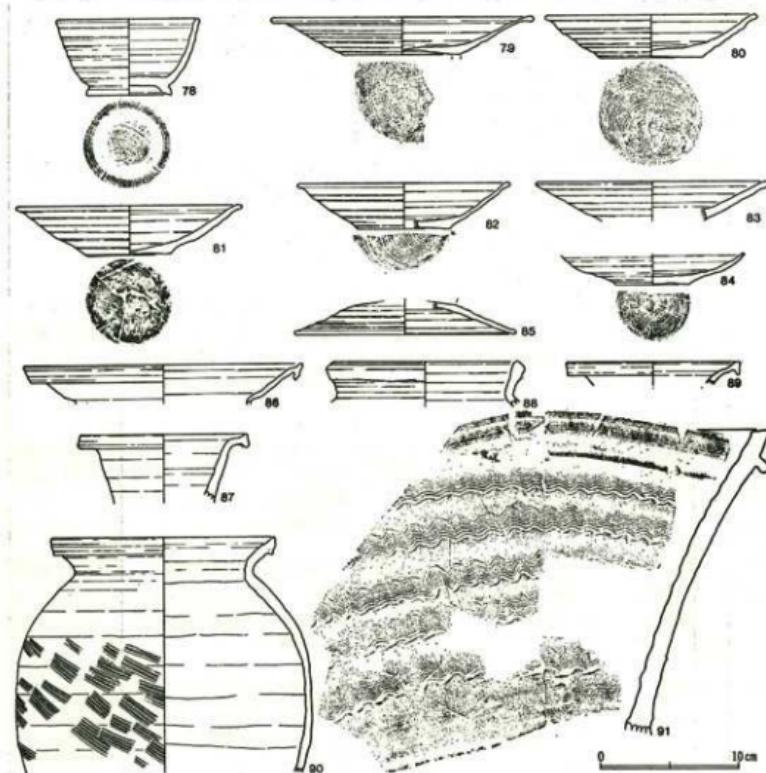
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	37	推定口径 12.4 推定底径 6.0 器高 3.7	薄い底部から、体部は内湾気味に大きく開く。口縁部は外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部 $\frac{1}{2}$ s存。覆土。
坏	38	口径 12.0 底径 5.5 器高 3.95	上げ底を呈する厚めの底部から、体部はやや内湾気味に開く。口縁部は外反する。外面のロクロ凹凸は比較的顕著。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。粗砂粒を多量に含有。白色針状物質含む。青灰色、淡青灰色。焼成堅敏。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部完。覆土。
坏	39	口径 13.0 底径 6.0 器高 4.3	厚めの底部から、体部は内湾気味に開く。口縁部は外反する。口縁部の形態はやや歪みあり。	ロクロ整形。底部回転糸切り痕は不明瞭。粗砂粒を多量に含む。白色針状物質含む。灰白色。黄褐色。焼成不良。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部完。覆土。
坏	40	口径 13.4 底径 6.0 器高 3.55	扁平な坏。上げ底を呈する底部から、体部は丸みを持って大きく開く。口縁部は外反する。底部には「一」印のヘラ記号あり。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、小礫若干含む。白色針状物質含まない。青灰色、焼成堅敏。	口縁 $\frac{1}{2}$ s強、底部完。覆土。
坏	41	推定口径 12.0 底径 5.2 器高 3.9	やや上げ底気味の底部から、内湾気味に開く。口縁部は肥厚させて外反気味。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含有。暗青灰色、焼成堅敏。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部 $\frac{1}{2}$ s存。覆土。
坏	42	推定口径 12.5 推定底径 6.0 器高 3.5	体部はやや内湾気味に外方に開き、口縁部は大きく外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質多量に含む。くすんだ青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部 $\frac{1}{2}$ s弱存。
坏	43	推定口径 11.8 底径 6.0 器高 4.05	内外面、凹凸少なく滑らか。厚めの底部から、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥溝厚させて外反する。体部下半には、ロクロ調整痕とは明らかに異なる一条の線が観察される。その一部分には、空隙が認められる。粘土巻き上げの痕跡か。	ロクロ整形。底部回転糸切り。白色針状物質顯著。灰色、灰白色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部 $\frac{1}{2}$ s存。覆土。
坏	44	推定口径 12.0 推定底径 6.0 器高 3.5	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。全体的に薄手。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色、焼成良好。	口縁 $\frac{1}{2}$ s、底部 $\frac{1}{2}$ s弱、覆土。
坏	45	推定口径 12.0 推定底径 5.4 器高 4.0	体部器壁は薄い。内湾して立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口唇部肥厚させ、端部は尖り気味。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	口縁一部のみ存。底部 $\frac{1}{2}$ s存。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	46	推定口径 底径 器高	12.2 5.3 3.75  底部厚い。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。体部中位で強く張る。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質顕著に含む。青灰色、淡青灰色。焼成良好。	口縁1/4、底部1/4存。覆土。
坏	47	推定口径 底径 器高	12.6 6.0 4.1  全体的に厚めでしっかりした作り。体部は僅かに内湾気味に開き、口縁部は短く外反させる。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質多量に含む。ややくすんだ青灰色を呈する。焼成堅敏。	口縁1/4、底部完。
坏	48	推定口径 底径 器高	12.2 5.5 3.6  体部は下半に丸みをもって大きく開く。口縁部は短く外反。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。疊を若干混えるが、白色針状物質は含まない。暗青灰色。焼成堅敏。	口縁1/2弱、底部1/4存。
坏	49	口径 底径 器高	12.0 5.7 3.75  全体的に厚手の器形。体部は緩やかに内湾気味に開き、口縁は口唇で強く屈曲して、短く外反する。口縁下方には、一条の凹線が認められる。成形時の痕跡か(?)。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含む。青灰色、焼成良好。	完形。覆土。
坏	50	推定口径	12.0  体部内湾気味に立ち上がる。口縁はそのまま伸びる。体部厚手、底部欠失。	ロクロ整形。砂粒、小疊若干、白色針状物質顕著に含む。淡青灰色、灰色。焼成良好。	口縁1/2弱。覆土。
坏	51	推定口径 推定底径 器高	12.6 6.0 3.6  体部は丸みをおびて開き、口縁部は緩やかに外反気味に伸びる。	ロクロ整形。砂粒、白色針状物質含有。底部回転糸切り。淡青灰色。焼成良好。	口縁1/4、底部1/4存。
坏	52	推定口径 推定底径 器高	11.6 6.0 3.55  体部中位で、やや張りを有する。口縁部は、緩やかに外反する。全体的に磨滅。	ロクロ整形。底部回転糸切り。粗砂粒含む。白色針状物質含まない。黄灰色、一部青灰色。焼成不良。軟質。	口縁1/5、底部一部存。覆土。
坏	53	推定口径 推定底径 器高	12.1 6.0 3.7  外面ロクロ凹凸顯著。口縁部は直線的に伸び、口唇端部を僅かに外反させる。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土には疊が目立つ。白色針状物質は含まない。口縁、底部青灰色、他の部分は褐色を呈する。焼成良好。	口縁1/4、底部1/4存。覆土。
坏	54	口径 推定底径 器高	11.8 5.6 3.6  底部厚い。体部は緩やかに内湾して開き口唇部で僅かに外反する。	ロクロ整形。胎土は砂粒を多量に含み粗い。白色針状物質含む。淡青灰色、灰色。焼成良。	口縁3/4、底部1/4。掘りかた。
坏	55	推定口径 推定底径 器高	11.8 5.9 3.4  体部丸みをおびて立ち上がり、口縁部は肥厚気味に外反する。	ロクロ整形。底部糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色。焼成堅敏。	口縁1/4、底部一部のみ存。覆土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	56	推定口径 12.6 推定底径 6.3 器高 4.05	体部丸みをおびて立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部肥厚する。	酸化焰焼成。ロクロ整形。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含む。黄褐色。焼成良好。	口縁1/3、底部1/4存。覆土。
坏	57	推定口径 12.1 推定底径 6.0 器高 3.95	体部は上位でやや張りを持つ。口縁部はゆるやかに外反。	ロクロ整形。底部回転糸切り。小縫目立つ。白色針状物質は含まれない。青灰色。焼成堅歛、ロクロ右回転。	口縁1/3、底部1/4存。
坏	58	推定口径 12.6 推定底径 6.0 器高 3.8	体部は、やや丸みを持ちながら外方へ開き、口唇部僅かに外反気味に仕上げる。内外面は比較的滑らか。	ロクロ整形、底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含む。灰色。焼成良好。	口縁1/3、底部1/4存。掘りかた。
坏	59	推定口径 12.0 推定底径 5.4 器高 3.85	体部中程で張りを持ち、口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁部は大きく外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り、疎を若干含む。白色針状物質含む。灰色。焼成良好。	口縁1/3、底部若干存。
坏	60	推定口径 12.0 推定底径 6.0 器高 3.9	体部は内青気味に立ち上がり、口縁部は肥厚させて緩やかに外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。小縫をやや多く混える。白色針状物質含まない。青灰色。焼成良好。	口縁1/3、底部若干存。
坏	61	推定口径 12.2 推定底径 5.6 器高 3.9	体部器肉薄い。体部湾内して大きく開き、口縁部は外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土精選。白色針状物質含まない。紫灰色。堅歛。	口縁1/3、底部1/4存。覆土。
坏	62	推定口径 13.1 推定底径 5.8 器高 4.4	体部直線的に開く。口縁部外反する。粘土雜ぎ目状の痕跡を残す。	ロクロ整形。底部回転糸切り。ロクロ右回転。微細砂粒、白色針状物質含む。灰白色。焼成良好。	口縁1/3、底部若干存。
坏	63	推定口径 10.7 推定底径 5.8 器高 3.95	口縁部はゆるやかに外反して開く。やや小ぶりの坏。	ロクロ整形。底部回転糸切り。白色針状物質含む。ロクロ右回転。青灰色。淡青灰色。焼成良好。	口縁1/3、底部1/4弱。覆土。
坏	64	推定口径 12.0 推定底径 5.4	体部は緩やかに丸みをもって立ち上がり、口縁は、強く外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。白色針状物質含む。淡青灰色、灰色。焼成良好。	口縁1/3弱。底部若干存。覆土。
坏	65	推定口径 12.0 推定底径 6.0 器高 3.15	身の浅い扁平な坏。口縁は強く外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質顯著、内面灰黒色、外面青灰色。焼成良好。	口縁1/3。底部若干存。覆土。
坏	66	底径 7.6	底径大きい。大ぶりの焼成土器になると考えられる。	淡青灰色。疎目立つ。堅歛。白色針状物質は含まない。底部糸切り。	底部外周1/3。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	67	底径	7.3 体部直線的に立ち上がる。体部下端に一次糸切り面と思われる空隙が認められる。	疎を若干含む。白色針状物質含まない。堅敏。くすんだ青灰色。底部回転糸切り。	底部%存。覆土。
坏	68	底径	7.3 底部平底。	疎を若干含む。白色針状物質含まない。底部回転糸切り。灰色。底部やや褐色を帯びる。堅敏。	底部%存。掘りかた。
坏	69	底径	6.2 体部丸みをもって立ち上がる。	底部回転糸切り。胎土に疎が目立つ。青灰色、堅敏。	底部%存。覆土、ピット。
坏	70	底径	6.0 底部上げ底。	疎が目立つ。白色針状物質含まない。底部回転糸切り。青灰色。堅敏。	底部%存。覆土。
坏	71	底径	6.6 底部器肉厚い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。粗砂粒、小疎含む。内面橙褐色。外面黄褐色、一部灰色。焼成良好。	底部%存。覆土。
坏	72	底径	5.6 体部丸みを帶びて開く。	底部回転糸切り。白色針状物質含む。灰色。淡青灰色。焼成良好。	底部%存。覆土。
坏	73	底径	5.0 体部は大きく開く。底部器肉厚い。	底部切り離しは回転糸切りによるが、その後難なナデにより、糸切り痕は殆ど残らない。白色針状物質含む。灰色、淡青灰色。一部褐色を呈する。焼成良好。	底部完。覆土。
坏	74	底径	5.4 底部は上げ底を呈し、器肉厚い。	底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質含む。やや褐色を帯びる青灰色。焼成良好。	底部%存。覆土、ピット。
坏	75	底径	6.5 身込み部中央凹む。	ロクロ整形。底部回転糸切り。白色針状物質顯著。底部及び体外表面スス状物質付着し、黒褐色を呈する。内面灰褐色。焼成不良。	覆土。
坏	76	底径	6.0 底部瘤状に突出する部分がある。	底部回転糸切り。白色針状物質含む。暗青灰色。焼成堅敏。	覆土。
坏	77	推定底径	6.0 口縁部欠失。体部緩やかに内湾して立ち上がる。	底部回転糸切り。砂粒白色針状物質含む。淡青灰色、黄褐色。焼成やや不良。	カマド。
高台付 坏	78	口径 高台底径	10.25 6.1 全体に厚めで、しっかりした作り。形態整う。体部は下半	ロクロ整形。右回転。砂粒、小疎含む。青灰色。堅敏。底部中	口縁%程欠失するが、他は

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		器高	5.5 で丸みを持ち、比較的直線的に口縁まで伸びる。口唇端部は尖り気味。高台部は厚く、接地面は外側端にある。	央に回転糸切り痕を残す。	完存。
皿	79	推定口径 底径 器高	18.8 8.4 2.7 底部は中央部が板く薄く、上げ底を呈する。体部は直線的に大きく開き、口縁部は肥厚して、外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ調整を施す小疊若干含む。白色針状物質顯著。灰黒色、青灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{3}$ 存。
皿	80	口径 底径 器高	15.0 7.4 3.1 全体に厚く、しっかりした作り。体部は直線的に外傾し、口縁部は外反して伸びる。	ロクロ整形。底部回転糸切り無調整。胎土中に、小疊が目立つ。白色針状物質は含まない。暗灰色。焼成良好。ロクロ右回転。	口縁 $\frac{1}{4}$ 存。底部完存。覆土。
皿	81	口径 底径 器高	16.1 6.0 3.6 底部中央の器内は薄い。体部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。全体に磨滅する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。小疊や多く含む。白色針状物質は含まれない。灰色～黄褐色。焼成不良。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部ほぼ完。覆土。
皿	82	推定口径 推定底径 器高	15.4 6.7 3.3 厚めの底部から、体部は直線的に外傾し、口縁部は外反させる。	ロクロ整形。底部回転糸切り。小疊や多く含むが白色針状物質は含まれない。青灰色。暗灰色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{3}$ 存。覆土。
皿	83	口径	16.6 底部欠失。器肉厚い。体部は直線的に外方に伸び、口縁部は、僅かに外反気味におさめる。	ロクロ整形。胎土に疊をやや多く混える。白色針状物質は含まない。灰色、淡青灰色。焼成良。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部欠。覆土。
皿	84	底径	5.4 口縁部欠失。体部は、やや内湾して大きく開く。体部器肉は薄い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。白色針状物質を顯著に含む。暗青灰色。焼成良好。	底部 $\frac{1}{3}$ 強。覆土。
蓋	85	推定口径	16.0 天井部中央欠失。天井部から段をもって移行する体部は、口縁部迄直線的に伸びる。	ロクロ整形。残存する天井部は回転ヘラケズリ調整が施されている。砂粒、白色針状物質多く含有。灰白色。焼成良好。	口縁部 $\frac{1}{4}$ 存。
甕	86	推定口径	20.2 須恵器甕の口縁部片。頸部は強く外傾し、口唇下端は引き出されている。	ロクロ整形。胎土には砂粒が目立つ。白色針状物質含まれる。青灰色、灰黒色。焼成良好。	口縁部 $\frac{1}{4}$ 存。
瓶	87	推定口径	12.0 頸部は、口縁部に向いや広くなる。口縁部は強く外方に折れ口唇端部は上下に引き出されている。	頸部には緑色を帯びる釉が付着する、胎土は疊を含み。灰褐色を呈する。外面灰色、内面灰黑色。	口縁一部、頸部外周 $\frac{1}{4}$ 存。覆土。



第22図 5号住居跡出土土器実測図4

器種	番号	法 量	形 態 の 特 微	手 法 の 特 微	備 考
灰釉瓶	88	推定口径 13.3	短頸壺の口縁部破片か。頸部立ち上がりは鋭く外傾し、口縁部は肥厚する。	胎土に粗砂粒やや多く含む。灰黒色。	口縁部少存。覆土。
	89	推定口径 12.5	灰釉瓶口縁部。小片より復元実測、口径も不明とした方が良いかも知れない。	胎土は微細砂粒を多量に含み。灰色を呈する。口縁部外側に黄緑色に発色するガラス質の釉が付着する。釉は残存部分全面に及ぶ。	口縁部小片。覆土。
甕	90	口径 16.2	胴部下半と底部欠失。肩部の張りは弱く、なだらかに内屈	胴部中位以下には平行叩き目。胴内外面形成時の粘土帯積み	口縁部少存。

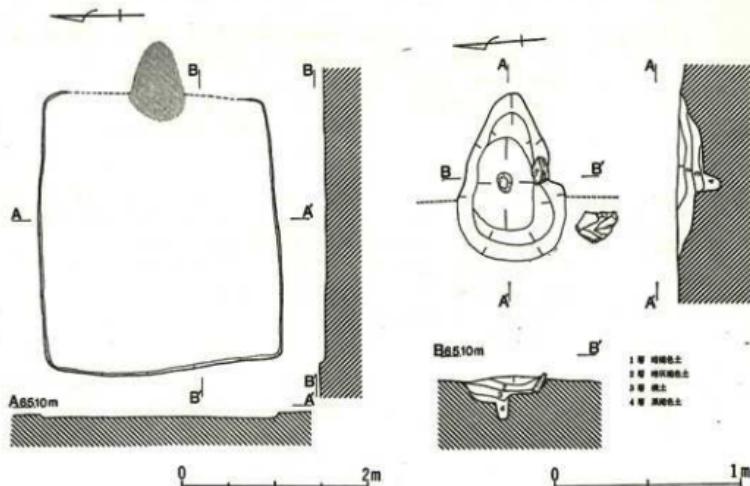
器種	番号	法 量	形 态 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
	91		<p>する。口頭部はくの字状に折れて外反する。口縁及び肩部には、緑黄色の自然釉が付着する。最大径は胴部中位にある。</p> <p>須恵器大甌の口頭部、もしくは鉢形土器片か。全体に厚手でかかり大型になるとと思われる。外反気味に伸び、口縁部で僅かに屈曲する。口縁直下には、だれ気味の突帯が一条巡る。また突帯下には、5単位の櫛指波状文が施文されている。口縁上端は平坦。</p>	<p>上げの痕跡残る。砂粒、白色針状物質含む。灰黒色。焼成良好。</p> <p>口クロ整形。突帯は貼付けによる。櫛歯は8本1単位。胎土は砂粒を多量に含有する。白色針状物質含まれる。青灰色、焼成良好。</p>	覆土。

第6号住居跡（第23図）

調査区中央部からやや南寄り、19L区に検出された。6～8号住は、各々3m前後距離を置いて南北方向に隣接して発見され、6号住はその最も北側に位置する。

規模は長径3.0×短径2.5mで、長方形プランを呈し、主軸方向は N-89°-E である。壁高は5cm前後と非常に掘り込みが浅く、東壁はカマド周辺部で立ち上がりを確認できなかった。柱穴は検出されず、床面は平坦で比較的良好であった。

カマド（第23図）は東壁中央に構築され、煙道部は壁外に55cm程舟先形に掘り込み、燃焼部は10



第23図 6号住居跡、カマド実測図

cm程皿状に掘り窪めている。燃焼部中央、壁を結ぶ線上よりやや外側に外れて、支脚を埋設した小ピットが検出され、袖部に使用したものと考えられる河原石が、カマド内壁に密着状態で出土した。遺物は土師器窓洞部小片、須恵器坏小片が少量出土したが、実測が可能な遺物は無かった。

#### 第7号住居跡（第24図）

17、18L区、6号と8号住の中間に位置する。

規模は長径4.4m×短径3mで、長方形プランであるが、東壁辺と西壁辺の長さが異なるためにやや台形を呈し、また北東コーナーは角度を強くもたない曲線である。主軸方向はN-89°-Eである。壁高は20cm前後、周溝、柱穴は検出されなかった。床面は中央に向けてやや高まり、カマド周辺から中央部はよく踏み固められていた。

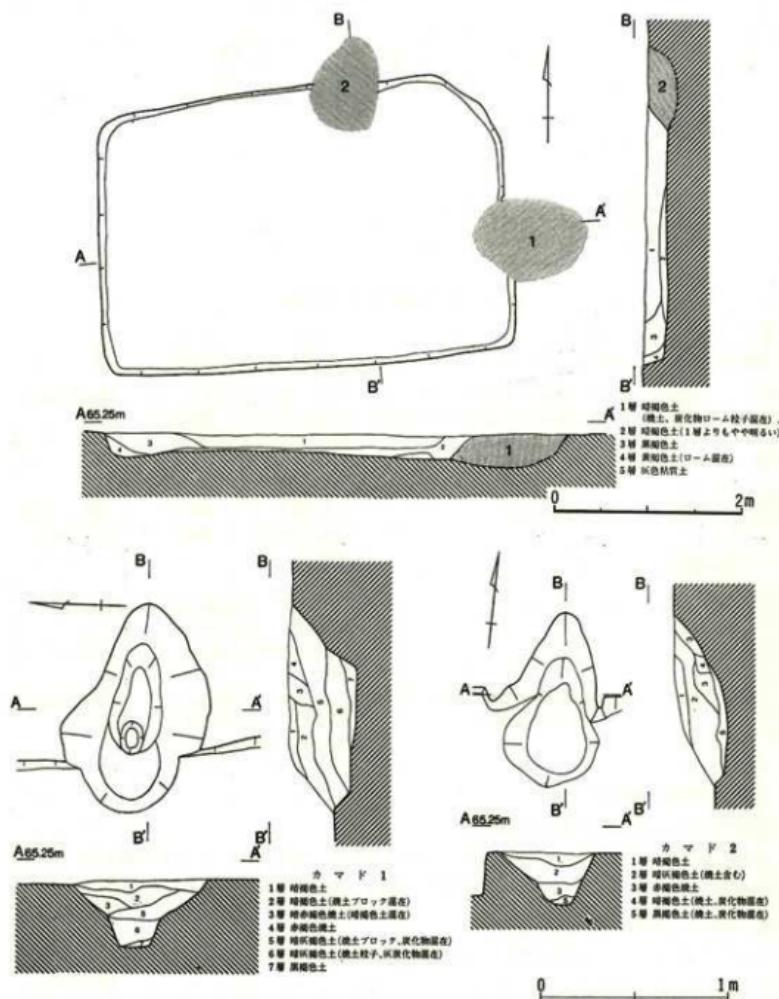
カマド（第24図）は、東壁中央部と（カマド1）、北壁東寄り（カマド2）の箇所に、2基構築されていた。カマド1は2に比較して規模の大きなものであるが、その遺存状態は両カマドとも崩壊が激しく大差ない。

カマド1は、煙道部を壁外に約80cm程舟先形に、燃焼部は皿状に深さ約10cm程掘り込んでいる。壁外約5cm程の位置に、支脚を埋設したと考えられる小ピットが検出された。カマド2は、壁外に約40cm程舟先形に掘り込んで煙道部として、燃焼部は深さ約5cmの楕円形、皿状を呈している。燃焼部から煙道部にかけて厚さ10cm前後の焼土の堆積が認められる。両カマドの新旧関係は1→2と推定され、上記した平面プランの不整な形態は、カマド2構築時の拡張に因るものと考えられる。

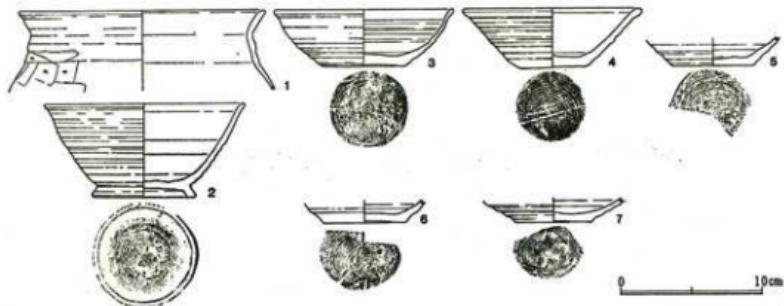
遺物は、覆土中より出土したものであるが、鉄錠はカマド2の前面の床面より出土した。

#### 7号住居跡出土土器（第25図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1	推定口径 17.4	頸部は内傾し、くの字状に折れて口縁部に統く。口縁部は外傾して伸び、端部でわずかに外反する。胴部器肉は、薄く削り取られる。	口縁及び頸部は横ナデ。胴部は横位及びやや斜方向のヘラケズリ。頸部ヘラケズリは、一部頸部にまで及ぶ。砂粒、赤色粒子含む。内面赤褐色。外面はやや黒ずむ。焼成良好。	口縁1/6存。覆土。
須恵器 高台付 塊	2	推定口径 14.1 高台底径 7.0 器高 6.7	身の深い塊形土器。体部は下に緩やかに丸みを持って大きく上方に開く。口縁部は緩やかに外反する。高台は貼付けによるが、幅広で、しっかりとした作り。高台接地面は、中央部が凹む。	ロクロ整形。ロクロ右回転。胎土に小穂をやや多く含む。白色針状物質は含まない。淡青灰色、灰色。焼成やや不良。底部回転糸切り痕を残す。	口縁4/5存。底部完。覆土。
塊	3	推定口径 12.6 底径 5.6 器高 4.05	体部器肉薄い。体部は丸みを持って大きく開き、口縁部は緩やかに外反する。	ロクロ整形。ロクロ右回転。底部回転糸切り。胎土に小穂が目立つ。灰色。灰褐色。焼成不良。軟質。	口縁1/6、底部完存。覆土。
塊	4	口径 12.4	全体に厚手で、小さな底部か	ロクロ整形。右回転。底部回転	口縁7/8、底部



第24図 7号住居跡、カマド1、2実測図



第25図 7号住居跡出土土器実測図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		底径 器高	4.6 4.3 ら体部は直線的に外傾する。 口縁部は、肥厚させて外反気味におさめる。底部には「一」状のヘラ記号が残される。	糸切り。微細砂粒含む。白色針状物質は含まない。青灰色～灰白色。焼成は堅締な部分と、やや軟質の部位がある。	完。覆土。
坏	5	底径	5.6 底部平底。	ロクロ整形。胎土に微細砂粒、白色針状物質含む。黄灰色。焼成良好。	口縁欠。底部 $\frac{2}{3}$ 存。覆土。
坏	6	底径	5.7 やや上底を呈する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。くすんだ青灰色。焼成良。	底部 $\frac{2}{3}$ 存。
坏	7	底径	5.4 体部残存部は、底部から大きく外方に開く。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	底部約 $\frac{1}{2}$ 存。覆土。

## 第8号住居跡（第26図）

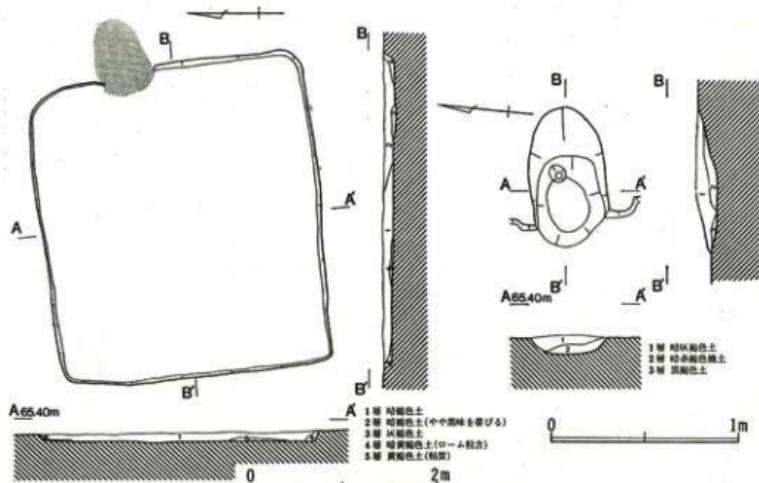
16L区、6、7号住の南側に位置する。

規模は長径3.35m×短径3mで、方形プランを呈するが、北東コーナーはやや曲線を描く。主軸方向はN-86°-Eである。壁高は約10cm前後、周溝、柱穴は検出されなかった。床面は全体的に平坦であるが、軟弱である。

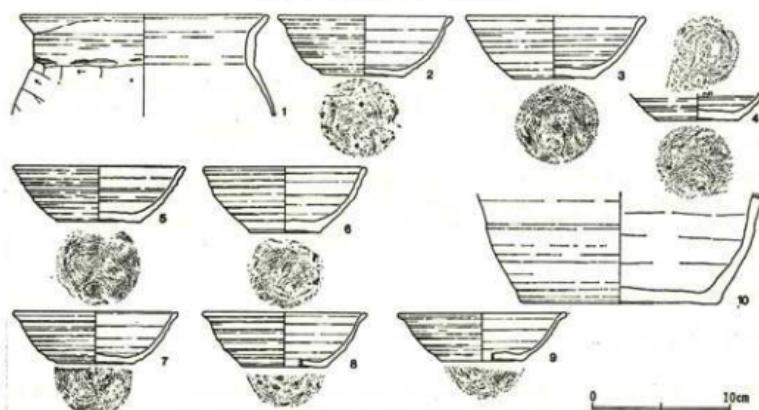
カマド（第26図）は、東壁北側寄りに構築され、壁外に約60cm程掘り込んで浅い皿状を呈している。壁外約25cm程の位置に小ピットが検出された。遺物は、カマド前面を中心に若干量出土した。

## 8号住居跡出土土器（第27図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1	推定口径 18.0	所謂コの字状口縁変、頸部は厚くほぼ直立し、口縁部は屈	口縁、頸部は横ナガ調整。胴部は横位及び斜方向へのラケズリ	口縁 $\frac{1}{2}$ 存。床直、覆土。



第26図 8号住居跡、カマド実測図



第27図 8号住居跡出土土器実測図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			曲して外傾する。口厚端部はやや内湾気味におさめられている。外面口縁と頸部は、幅広の浅い沈線で画される。胴部の器肉は薄く削り取られている。	が施される。ヘラケズリは一部頸部に及んでいる。赤褐色。焼成良好。	

器種	番号	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 坏	2	口径 底径 器高	12.6 5.8 4.4  全体的に薄手の形態。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部で外反させる。口唇部は肥厚する。外面凹凸は比較的強い。	ロクロ整形。右回転。胎土は比較的細かく、微細砂粒、白色針状物質を含む。底部回転糸切り。灰白色。焼成はやや甘い。	ほぼ完存する。 覆土。
	3	口径 底径 器高	13.0 5.9 4.6  やや身の深い坏。体部は内湾気味に開き、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は、僅かに肥厚する。外面凹凸は少なく、比較的滑らかである。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土は小礫をやや多く含む。白色針状物質は含まれない。灰色、黄褐色。焼成不良。	口縁1/4、底部完。 覆土。
	4	底径	5.8  体部上半及び口縁部欠失。内面の底部から体部下端にかけて、「C」状に一條の撻糸の圧痕が残されている。伸ばした状態で約7cmの長さになる。幅は1~2mmである。撻糸は、単節のLRで整形後に押されている。恐らく底部切り離しに使用されたものと考えられよう。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に小礫をやや多く混える。白色針状物質は含まれない。青灰色。焼成良好。	底部一部欠失。 覆土。
坏	5	推定口径 底径 器高	12.4 6.2 4.0  体部は、緩やかに丸みを持って開き、口縁部は僅かに外反気味。外面の凹凸は顯著。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。胎土に小礫が目立つ。白色針状物質含まない。灰色。一部青灰色。焼成良好。	口縁1/4、底部 ほぼ完。
	6	推定口径 底径 器高	11.8 5.3 4.8  厚めの底部から、体部は直線的に立ち上がり、体部上位で張りを持つ。口縁は直行する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土には礫を多量に含む。白色針状物質は含まない。青灰色。焼成堅歯。	口縁1/4、底部 完。
	7	推定口径 底径 器高	11.8 5.8 3.8  体部は丸みを持って開き、口縁部は緩やかに外反気味。口唇部は肥厚する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。青灰色、黄灰色。焼成良。	口縁1/4、底部 1/4強。
坏	8	推定口径 推定底径 器高	11.8 6.0 4.0  体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は、肥厚させて外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。微細砂粒、白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良。	口縁1/4、底部 1/4存。
	9	推定口径 推定底径 器高	12.0 6.0 3.5  体部は、緩やかに丸みを持って開き、口縁は肥厚させて大きく外反する。体部器肉薄い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土には、微細砂粒、白色針状物質含む。灰白色。焼成良。	口縁1/4、底部 1/4存。
	10	底径 現存高	14.4 8.0  整形難。内面の凹凸激しい。粘土積上げの痕跡を残す。	胎土に微細砂粒、白色針状物質含む。灰白色、黄灰色。焼成やや不良。やや軟質。	底部1/4強。

## 第9号住居跡（第28図）

10、11P区、調査区の南側部に位置し、溝2と重複する。

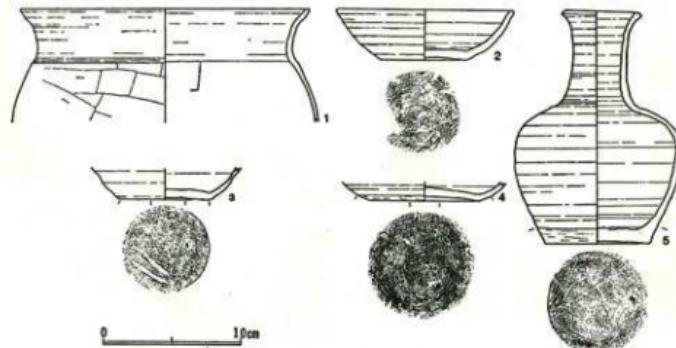
規模は長径4.4m×短径4.05mで、長方形プランを呈し、主軸方向はN—79°—Eである。壁高は約15~20cm前後を測り、周溝は全周するものと思われるが、南東コーナー部とカマド2の周辺部については、溝2により破壊されているために確認できなかった。壁高は幅30cm前後、深さ15~20cm程の整然とした溝であった。柱穴は3本( $P_1 \sim P_3$ )検出されたが、よく穿たれたものとはいえず計画性がない。床面は良好な状態を示し、平坦で、中央部を中心によく踏み固められ堅緻であった。

カマドは（第28図）、東壁北側寄り（カマド1）と、南側寄り（カマド2）とで、2基構築されていた。カマド1は、壁外に約80cm程舟先形に掘り込んで煙道部とし、燃焼部は約10cm程皿状に掘り窪めるが、壁溝を暗褐色土とローム土で埋め戻し整形している。壁外約26cmの位置に面とりされた硬質砂岩の支脚が直立状態で、また袖部として使用したと考えられる片岩系の河原石がカマド内壁に密着して出土した。

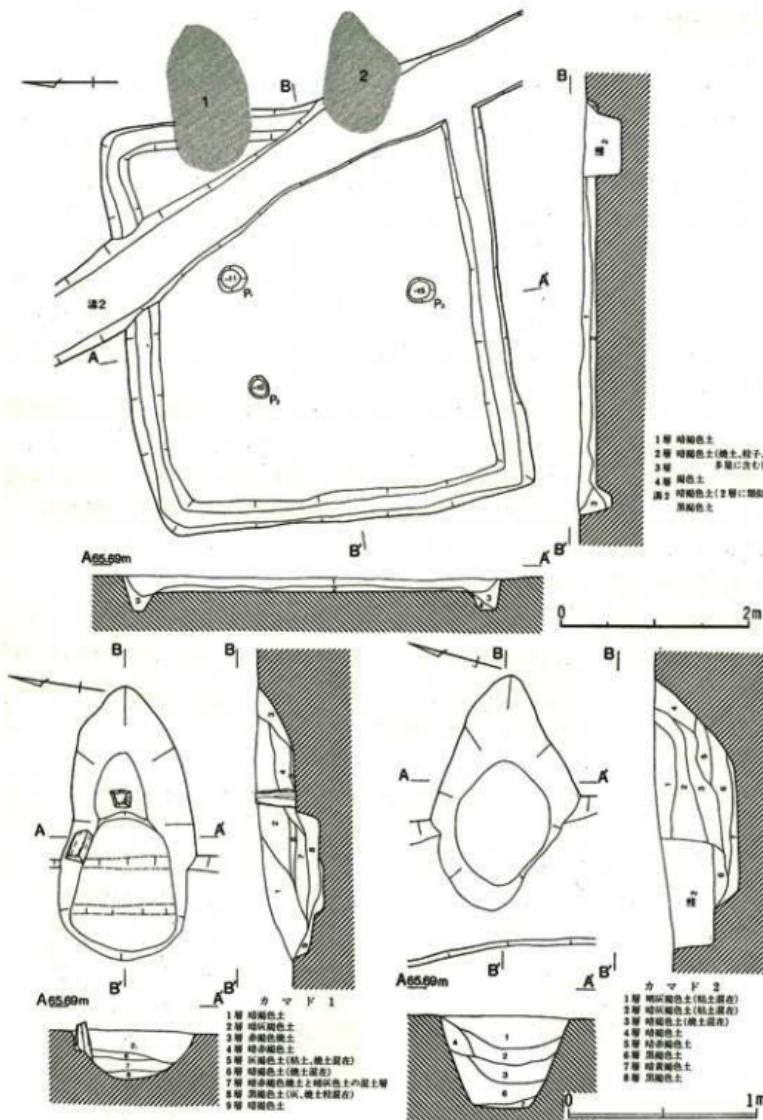
カマド2は、煙道部を壁外に約65cm程舟先形に掘り込んで設け、溝2に破壊されているが燃焼部は約35cm程の深さでタライ状に比較的深く掘り窪めたものと考えられる。カマド1、2ともその規模に大差はない。しかし遺存状態は、カマド2が溝2と重複することもあって、カマド1が良好である。またカマド1が周溝を埋め戻して構築されたこと等を考えると、その新旧関係は2→1と推定される。須恵器長頸瓶は、床面から潰れたような状態で出土した。

## 9号住居跡出土土器（第29図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土器 甕	1	推定口径 21.0	なだらかに内湾する胴部から は頸部は緩やかに屈曲して 外傾し口縁部は外に折れて開 き、外反する。頸部と胴部は、	口縁、頸部横ナデ。胴部は、横 位斜位のヘラケズリ。内面木口 状工具痕残。赤褐色。焼成良 好。	口縁1/4存。覆 土。



第29図 9号住居跡出土土器実測図



第28図 9号住居跡、カマド1、2実測図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	2	口径 底径 器高	12.6 6.1 3.7	浅い沈線によって画される。全体に器内は薄手だが、特に胴部は薄く削り取られる。口の字状口縁に近い形態。	
杯	3	底径	4.8	全体的に厚手、上げ底を呈する。底部から、体部は内湾して開く。口縁部は僅かに外口を開き気味におさめる。	ロクロ整形。右回転。胎土は粗く白色針状物質顯著に含む。底部回転糸切り。青灰色。焼成やや甘い。
杯	4	底径	8.0	小さな底部から、体部は直線的に開く。全体的に薄手。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土稍退、灰白色。堅緻。
長頸瓶	5	口径 底径 器高	5.05 7.6 16.85	底部上げ底、底径非常に大きい。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、外縁部及び、体部下端回転ヘラケズリ。白色針状物質を含む。青灰色。焼成良好。
				ロクロ整形。底部及び胴部下端は手持ちのヘラケズリ調整。砂粒、白色針状物質含む。灰黒色。底部青灰色。	ほぼ完存。覆土、床直。

## 第10号住居跡（第30図）

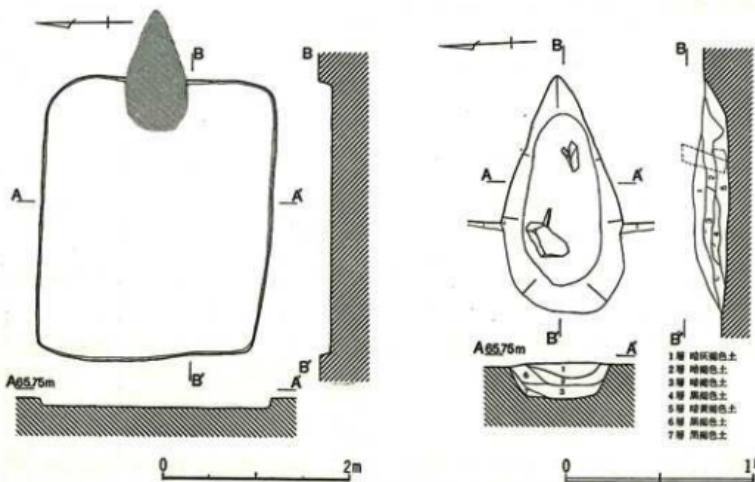
調査区の南側7-1-Q区、9号住の約15m南に位置する。

規模は長径2.9×短径2.45mで、長方形プランを呈し、小型の住居跡である。主軸方向はN-91°-Eである。壁高は約10cm前後で、周溝、柱穴は検出されなかった。床面は全体的に平坦であるが、軟弱で状態は不良であった。

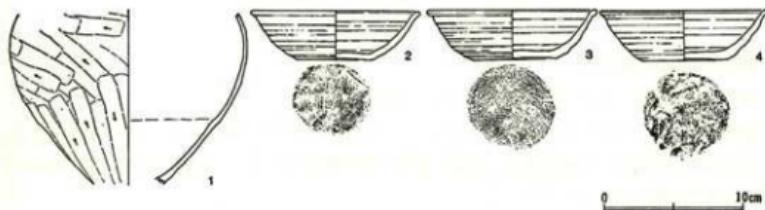
カマド（第30図）は、東壁中央に構築され、壁外に約80cm程舟先形に掘り込んで、浅い皿状を呈していた。カマド内からは、壁を結ぶ線から約30cm外側の位置に、三角柱状に整形された河原石の支脚が直立状態で、また袖部に使用したと思われる大形の河原石が、燃焼部に倒壊したような状態で出土した。遺物は量的には少ない。いずれも床面より若干浮いた状態で出土している。

## 10号住居跡出土土器（第31図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1		甕胴部片。器内薄い。	胴部外面ヘラケズリ。上部から横斜め、縦方向。茶褐色。砂粒、雲母含む。	
須恵器	2	口径 底径 器高	12.0 5.5 3.5	体部は丸みを持って大きく開く。口縁部は緩やかに外反する。形態にやや歪みあり、口縁はやや橢円形を呈する。底	ロクロ整形。底部全面手持ちのヘラケズリ。凹部に僅かに回転糸切り痕が残されている。白色針状物質顯著。青灰色、淡青灰



第30図 10号住居跡、カマド実測図



第31図 10号住居跡出土土器実測図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			部に「=」状のヘラ描沈線が残る。	色。焼成良。	
杯	3	口径 底径 器高	12.0 6.0 3.65	体部器肉厚い。体部は丸みをもって開く。口縁部は肥厚させて短く強く外反する。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。砂粒、白色針状物質。淡青灰色、黄灰色。焼成良。
杯	4	口径 底径 器高	12.0 6.0 3.6	体部は緩やかに丸みをもって開く。体部器肉厚い。口縁部は外反する。	ロクロ整形。右回転。砂粒、白色針状物質含む。灰褐色～淡黄褐色、焼成不良、軟質。

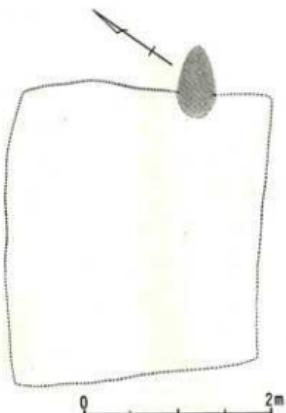
### 第11号住居跡（第32図）

10号住の南東約12mの距離、4-P区に位置する。

本址は掘り込みが浅いため、壁の確認ができず、また周溝、柱穴等も検出できなかった。従って調査は、床面の精査からその範囲を大まかに把握するだけにとどまり、下記する数字等は推定である。規模は長径3.1×短径2.7m、小型で長方形プランを呈し、主軸方向は N-55°-E である。

カマドは、東壁中央から南寄りに構築されたものと思われるが、遺存状態は不良で、カマド基底部がわずかに残存するのみであった。

遺物は、須恵器瓶胴部破片が出土したのみであった。



第32図 11号住居跡、カマド実測図

### 11号住居跡出土土器（第33図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 瓶	1		瓶胴部破片と考えられる。	ロクロ整形。砂粒、小礫や多く含む。紫灰色、暗褐色。焼成良。	白色針状物質は含まない。



第33図 11号住居跡出土土器実測図

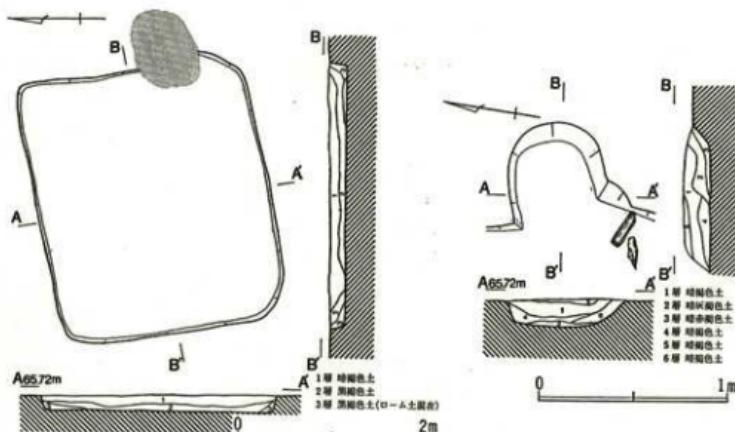
## 第12号住居跡（第34図）

調査区南側の台地が東側に張り出した部分、5、6—I区に位置する。

規模は長径2.8m×短径2.5mで、方形プランを呈し小型の住居跡である。南東と南西の両コーナーは、角度を強くもたず丸味を帯びる。主軸方向はN-80°-Eである。壁高は約15cm前後を測り、周溝、柱穴は検出されなかった。床面は全体的に平坦で軟弱であった。

カマド（第34図）は東壁南側に構築され、壁外に約50cm程円形に掘り込んでいた。燃焼部付近には、支脚として利用したと思われる柱状に整形された河原石や、扁平な河原石等が散乱して出土した。

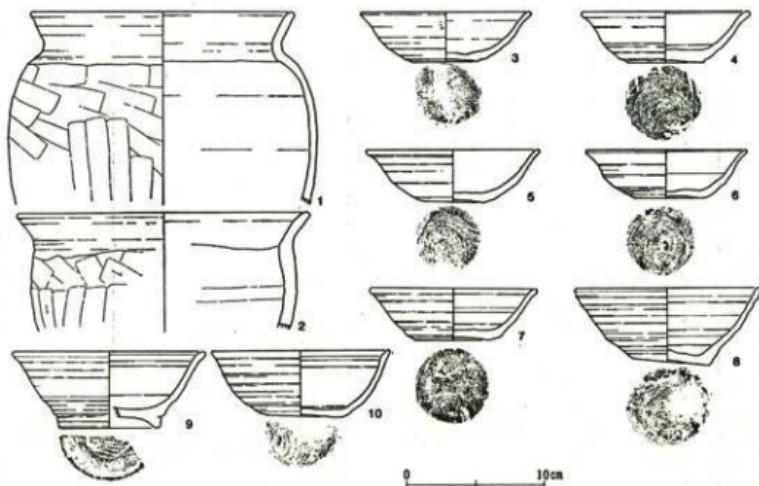
遺物は壺と甕が1、2層より出土した。



第34図 12号住居跡、カマド実測図

## 12号住居跡出土土器（第35図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	推定口径 18.8	胴下半部及び底部欠失する。最大幅は胴部にある。口縁部器厚6mm、胴部約5mmを測る。口縁部は外反する。肩部で張りを持つが、胴部の張りみは弱い。	土師質。口縁部横ナデ、胴部は、肩部付近で横、以下斜め、縦方向へのラケヅリを施す。胎土に砂粒、小礫を多量に含む。灰褐色、黄褐色。焼成良好、やや硬質。	口縁1/4弱。覆土。
甕	2	推定口径 20.8	器身は厚く、口縁部で約7mm、胴部で10mmを測る。口縁は外反する。胴部は殆ど張りを持たない。	土師質。口縁部横ナデ、胴部は口縁部近くで斜め、以下縦方向へのラケヅリ。胎土は粗く、砂粒、礫を多量に含む。白色針状物質も明瞭に認められる。黄灰色、灰褐色硬質。	口縁1/4存。覆土。



第35図 12号住居跡出土土器実測図

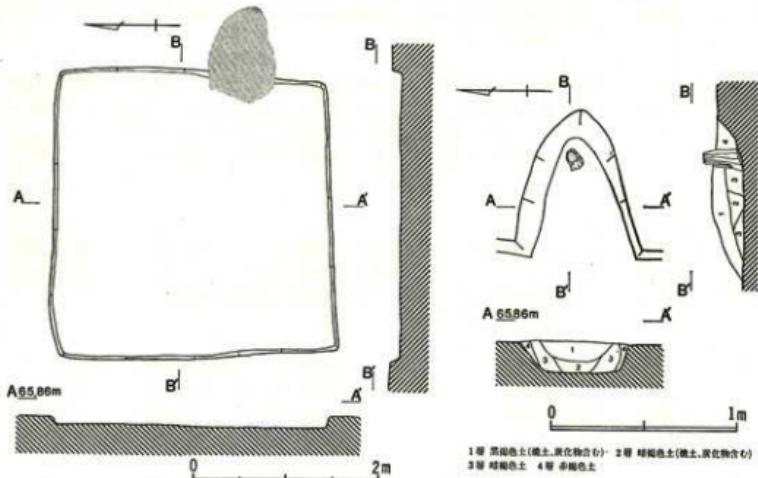
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	3	推定口径 12.2 底径 4.0~5.0 器高 3.6	底部梢円形を呈する。長径 5.0cm短径4.0cm。体部は丸みを持って大きく開き、口縁部は緩やかに外反する。	酸化焰焼成。ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土は、砂粒を多量に含み、粗い。黄褐色、焼成不良。	口縁1/3、底部ほぼ完。覆土。
杯	4	口径 12.0 底径 5.5 器高 3.7	全体に厚手の形態。ぶ厚な底部から体部は丸みをもって開く。口縁部は緩やかに外反して伸びる。体部下端に、もう一枚の糸切り面が、明瞭に認められる。	酸化焰焼成。土師質。底部切り離しは回転糸切りによる。胎土には粗砂粒を多量に含む。淡赤褐色。底部黒ずむ。焼成やや不良。	口縁1/3、底部完。覆土。
杯	5	推定口径 12.4 底径 4.3 器高 3.8	小さな底部から、体部は丸みを帯びて大きく開く、口縁部は緩やかに外方に伸び、口唇部を小さく外反させる。	酸化焰焼成。底部回転糸切り。胎土には砂粒が多く含まれる。灰褐色、橙褐色。焼成やや不良。	口縁1/3、底部ほぼ完。カマド。
杯	6	口径 11.5 底径 5.0 器高 3.5	体部は中位で大きく張り、口縁部にかけて、外反気味に大きく開く。	酸化焰焼成。底部回転糸切り。胎土に砂粒を多く含む。白色針状物質も若干含む。淡黄褐色。焼成不良。ロクロ整形。	口縁1/3、底部完存。覆土。
杯	7	口径 11.8 底径 5.6	上げ底を呈する底部から、体部は下端に段を持ち外方に開	還元焰焼成。底部回転糸切り。胎土に微細砂粒を多く含む。白	完存。覆土。

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯	8	器高 3.8 推定口径 13.1 底径 5.5 器高 5.6	く。口縁部にゆるやかに外反させる。全体に磨滅。	酸化焰焼成。ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土に砂粒を多く含む。赤褐色、一部黒褐色。焼成良。	口縁、底部 $\frac{1}{2}$ 存。覆土。
高台付杯	9	推定口径 13.6 推定高台径 7.0 器高 5.5	形態に歪みあり、器高には偏差がある。やや大ぶりで身深の器形を呈する。体部は大きく開き全体的に内湾気味である。	酸化焰焼成。ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台を貼付け、周辺を撫でつけている。胎土は砂粒を含むが、比較的細かい。赤褐色、黄褐色。	
杯	10	口径 12.9 底径 5.5 器高 4.8	体部は直線的に伸び、口縁部でゆるやかに外反する。高台は、貼付けで、厚くぼったりしたつくり。	酸化焰焼成。ロクロ整形。胎土に微細砂粒を含む。内面平滑。赤褐色、内面の半分は黒褐色。焼成良。	口縁完存。底部 $\frac{1}{2}$ 弱。覆土。

## 第13号住居跡（第36図）

12号住の東側約4m、5、6-H、G区に位置する。

規模は長径3.1×短径3mで、ほぼ正方形プランを呈し、小型の住居跡である。主軸方向はN—



第36図 13号住居跡、カマド実測図

90°—E である。壁高は約10cm前後で、柱穴、周溝は検出されなかった。床面は、カマド周辺から本址南側半分でレベルを低くし、よく踏み固められている。

カマド（第36図）は東壁南側に構築され、壁外に約70cm程舟先形に掘り込んでいた。カマド内からは、壁を結ぶ線から約40cm外側、煙道立ち上がりに近い位置に、河原石の支脚が直立状態で出土した。煙道部には焼土の厚い堆積が認められた。

遺物はカマド覆土より、須恵器甕の口縁部片が出土したのみであった。



第37図 13号住居跡出土土器実測図

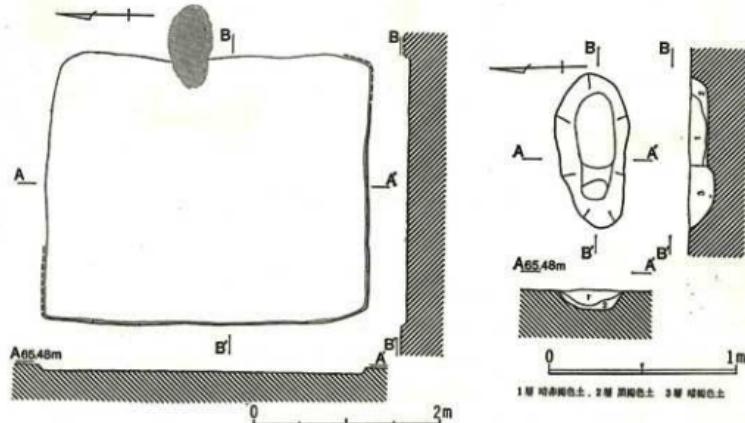
## 13号住居跡出土土器（第37図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器甕	1	推定口径 28.0	甕口縁部片。外傾する頸部から口縁は一段折れて外方に伸びる口縁部は端部を上下に引き出している。	ロクロ調整。胎土には微細砂粒を含むが比較的細かい。淡青灰色。焼成やや不良。	口縁部 <sup>1/2</sup> 存。

## 第14号住居跡（第38図）

13号住の北東約14m、8、9—E区に位置する。

規模は長径3.45×短径2.85mで、長方形プランを呈するものと推測されるが、壁高約6cm前後と



第38図 14号住居跡、カマド実測図

掘り込みが浅いため、東、北壁や南東コーナーの壁は確認できなかった。主軸方向はN-90°-Eで周溝、柱穴は検出できなかった。床面は全体的に平坦であるが、状態は不良で軟弱である。

カマド（第38図）は東壁中央に構築されていた。壁外に約50cm程椭円形で皿状の掘り込みを煙道部とし、燃焼部は深さ約10cm程のすり鉢状である。煙道部には厚さ10cm程の焼土の堆積が認められた。

遺物は全く出土しなかった。

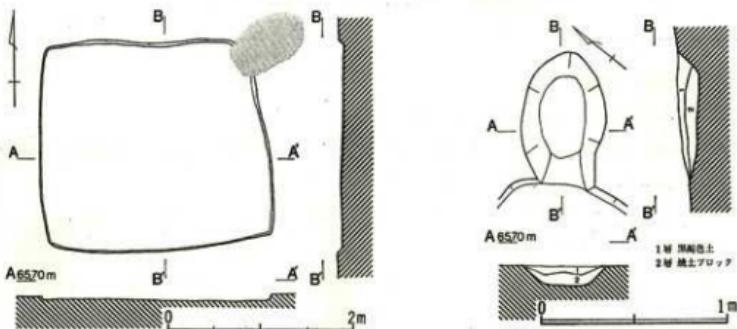
#### 第15号住居跡（第39図）

調査区南側中央部、7、8-L区に位置する。

規模は長径2.45×短径2.2mで、方形プランを呈するが、北東コーナー部分にカマドが構築されるために、東壁辺が短く、形態に多少の歪みが認められる。壁高は約5cm前後と掘り込みが浅く、柱穴、周溝は検出されなかった。床面は平坦であるが、状態は不良で軟弱である。主軸方向はN-90°-Eと考えられる。

カマド（第39図）は北東コーナー部に構築され、壁外に約70cm程椭円形で皿状に掘り込まれていた。基底部には約5cm前後の焼土の堆積が認められた。

遺物は全く出土していない。



第39図 15号住居跡、カマド実測図

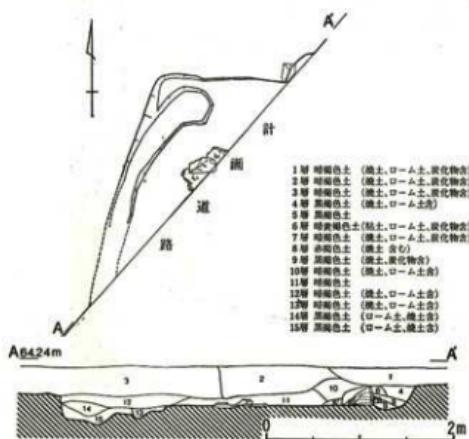
#### 第16号住居跡（第40図）

調査区北側部で最も西寄り、43-W区に位置する。

16号住は、計画道路工事中に発見されたものですがその大半は破壊されて、西側コーナーと北西壁の一部が検出されただけである。規模は径3m前後で、方形プランを呈するものと推定される。壁高は15cm前後で、西壁直下には周溝が設けられていた。溝は幅30cm前後、深さ10cm前後で、底部は凹凸し、整然としたものではない。床面は平坦で、よく踏み固められ良好な状態であった。道路にかかるて大形の河原石が3個程積み重なるように床直状態で出土したが、火熱を受け脆くな

っていた。カマドは北壁部にその一部が僅かに残存しており、袖部として使用した扁平で大形の河原石が、カマド内壁に立て掛けるようにして出土した。

遺物は須恵器長頸瓶の他、底部回転糸切りの小片、土師甕小片等が出土している。



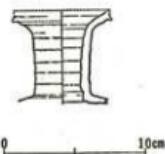
第40図 16号住居跡実測図

#### 16号住居跡出土土器（第41図）

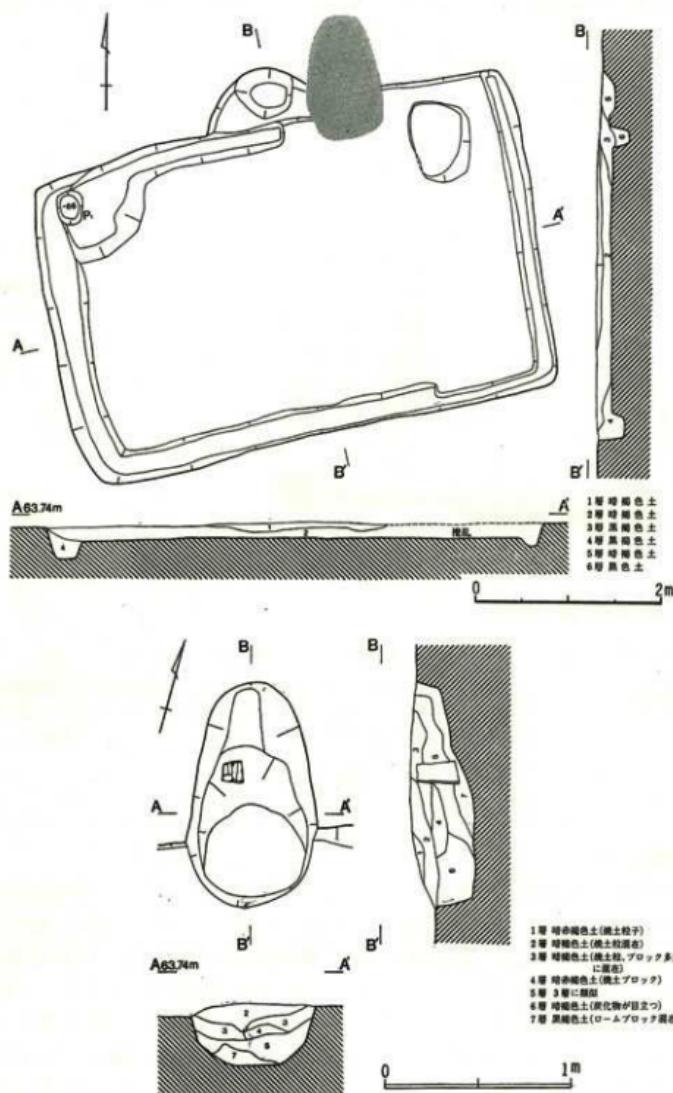
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓶	1		須恵器長頸瓶の口頭部片。肩部は若干残存するが、口唇端部は欠損。大きく張ると思われる肩部から頸部は屈曲して直線的に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。	ロクロ整形の胎土は比較的精選されている。黒灰色。焼成堅微。	口縁部は一部のみ残存する。覆土。

#### 17号住居跡（第42図）

調査を北側部で16号住から東へ約12mの地点、42、43-S、T区に位置する。規模は長径5.35×短径3.4mで、長方形プランを呈し、主軸方向はN-78°-Eである。大型の住居跡で、壁高は約15cm前後、東、南、西壁と北壁の一部には周溝が周る。溝は幅20~40cm前後、深さ10~20cm前後で、壁直下に整然と配されるが、北西コーナー部ではピット状に張り出していた。柱穴(P<sub>1</sub>)は北西コーナー隅に1本検出され、北東コーナー付近、カマドの東側には、楕円形タライ状の貯蔵穴(90×65×21cm)が設けられていた。床面は中央に向けてややレベルを高くし、よく踏み固められて良好な状態であった。カマド（第42図）は、北壁やや東寄りに構築され、壁外に約80cm程舟先形に掘り込んで煙道部とし、燃焼部は深さ約20cm程のタライ状であった。カマド内には、壁を結ぶ線から約25cm外側の位置に、硬質砂岩を四角柱状に整形した支脚が直立状態で出土した。燃焼部には

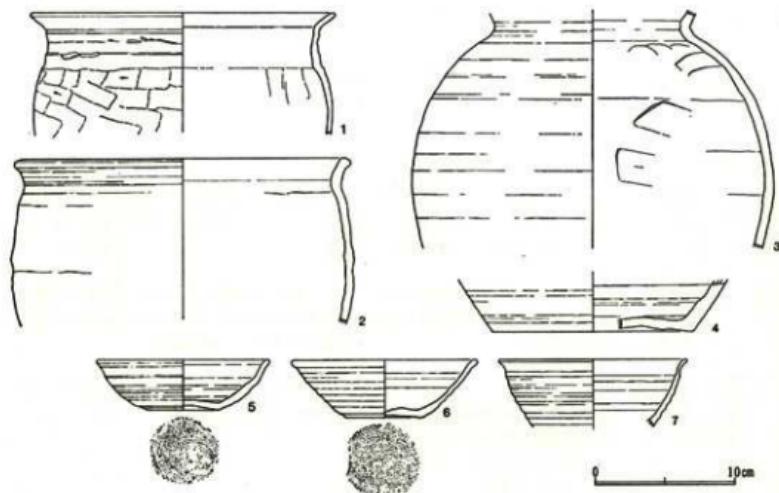


第41図 16号住居跡出土  
土器実測図



第42図 17号住居跡, カマド実測図

厚さ約10cm程の焼土の堆積が認められた。カマド西側に隣接した半円形の張り出しが、中央部に深さ5cm程の小ピットが穿たれ、カマドに関連した施設とは思われるが、覆土の堆積状態からして、直接カマドとしての利用は考えられない。遺物は、掘り方及び覆土より出土した。第43図1はカマド、5は掘り方出土である。



第43図 17号住居跡出土土器実測図

## 17号住居跡出土土器（第43図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土器 甕	1	推定口径 21.6	口の字状口縁を呈するが、胴部器肉は比較的厚めである。頸部は外反り気味に直立し、口縁部は強く外傾する。頸部に成形時の積み上げの痕跡を残す。	口径、頸部横ナデ。胴部は、頸部近くで横方向、以下斜めのヘラケズリ。頸部に一部ヘラ状工具により引かれた痕跡を残す。暗赤褐色。焼成極めて良好。	口縁リテ、頸部 1/4存。カマド。
甕	2	推定口径 23.2	胴下半及び底部欠失。所謂口の字状口縁の甕とは全く異なる。胴部の張りは殆どなく、口縁部は弱く折れて外反する。口縁及び胴部の器肉は薄い。	酸化焰焼成か。外面口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリは施されず、雑なナデ調整が行なわれる。内面は、口縁部及び胴上部に横ナデ調整が施される。胎土は粗く、礫を多量に含む。また白色針状物質も含まれている。黄褐色、淡赤褐色。焼成は良好で、堅く焼きしまる。	口縁リテ存。覆土。

器種	番号	法 量	形 索 の 特 徵	手 法 の 特 徵	備 考
須恵器 甕	3		甕頭部及び頸部の一部残存。頭部は球形を呈する。頸部外反。頸部外反上半部には、黄灰色の自然釉が付着する。外面にタタキ目は認められない。	頸部横ナデ。頭部内部へラ状工具による削りの痕跡が残されている。微細砂粒を多量に含む。灰黑色。青灰色、焼成堅紙。	覆土。
甕	4	推定底径 14.6	須恵器甕の底部。残存部の頭部は直線的に外傾する。底部上げ底気味。	胎土に砂粒、小礫若干含む。灰 色、青灰色。焼成良好。堅敏。	覆土。
杯	5	口径 12.2 底径 5.0 器高 3.6	上げ底を呈する底部から、体部は丸みを持って大きく開き立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。全体的に厚手。	ロクロ整形。右回転。胎土に小礫を若干含む。白色針状物質顯著に認められる。青灰色。焼成堅敏。	口縁一部欠失するが、ほぼ完存。掘りかた出土。
杯	6	推定口径 13.0 底径 5.5 器高 4.1	体部は比較的直線的に大きく開き、口縁部は緩やかに外反する。	ロクロ整形。右回転。微細砂粒に小礫を若干含む。青灰色（若干綠色を帯びる）。焼成堅敏。	口縁1/4、底部ほぼ完。覆土。
杯	7	推定口径 13.4 現存高 4.8	底部欠失。やや大ぶりの碗形土器になると考えられる。体部は緩やかに立ち上がり。口縁部は外反する。外面のロクロ凹凸は顯著。	ロクロ整形。右回転。胎土に隙が目立つ。灰色。焼成良好。	口縁1/4存。覆土。

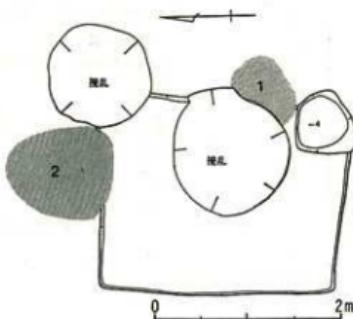
## 第18号住居跡（第44図）

調査区北側部、17号住居から北東方向へ約35mの49-P区に位置する。

本址中央部からカマド1の一部及び北東コーナーは、擾乱を受け破壊されていた。長径2.6×短径2.1mと小規模の住居跡で、方形プランを呈し、主軸方向はN-5°-Eである。本址の掘り込みは非常に浅く、壁高は5cm前後で、周溝、柱穴は検出されなかった。カマド1の南側、南東コーナーには、円形で皿状に掘り込まれた貯蔵穴が設けられていた。

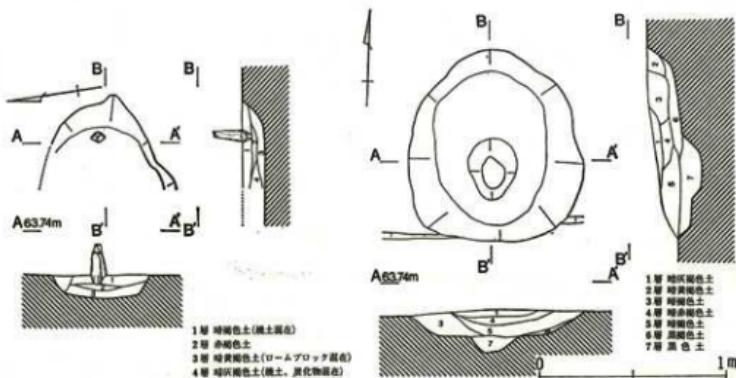
カマド（第45図）は、東壁南側（カマド1）と北壁中央部（カマド2）の2基が構築されていた。

カマド1は一部擾乱されているが、壁外に約25cm程楕円形に掘り込まれていた。煙道の立ち上がりから約5cm内側に、支脚として利用された柱状の河原石が直立状態で出土した。カマド2は、ほとんど壁外に構築されており、楕円形

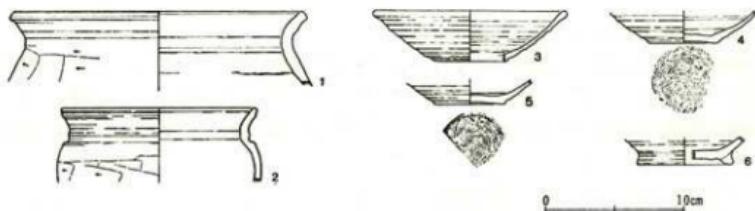


第44図 18号住居跡実測図

で皿状に深さ15cm程掘り込まれていた。床は煙道から燃焼部に向けて低く傾斜しており、燃焼部中央からやや壁寄りに小ピットが穿たれていた。遺物は図示したものの他、壺小片、甕胴部片が出土している。



第45図 18号住居跡、カマド1、2実測図



第46図 18号住居跡出土土器実測図

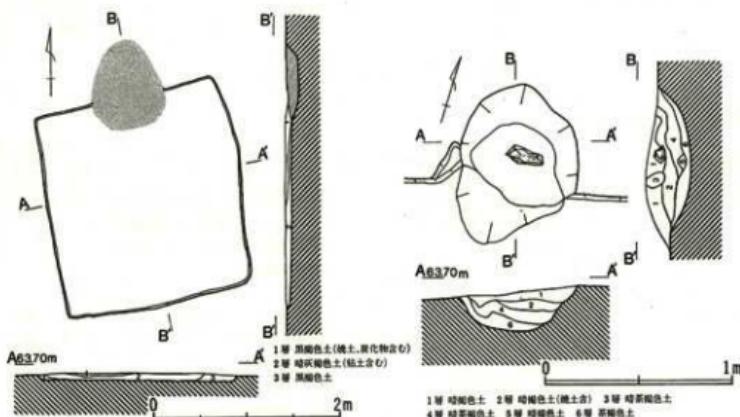
## 18号住居跡出土土器（第46図）

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕	1	推定口径 20.8	厚手の甕。口縁はくの字状に外反する。器肉の厚さ約8mm。	口縁部は横ナデ。胴部は横方向のヘラケズリ。胎土は比較的細かい微細砂粒を含む。黄灰褐色。焼成堅致、硬質。	口縁1/6存。覆土。
甕	2	推定口径 13.8	小型。恐らく台付甕と考えられる。肩部に張りを持ち、頸部は屈曲して短く立ち上がる。口縁部は内湾気味に外反する。頸部と胴部は、先端の丸い棒状工具による沈線で画	酸化焰焼成。口頭部横ナデ。胴上部横方向のヘラケズリ。但し肩部付近には、ヘラケズリは及ばず、地肌をそのまま残す。胎土には粗砂粒を多量に含む。白色針状物質も含まれる。赤褐色	口縁1/10、胴上部1/4存。覆土。

器種	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯	3	推定口径 13.6 推定底径 5.0 器高 3.6	され、強い段を有する。器肉は厚く胴部で約 5 mm。	焼成堅敏。	
杯	4	底径 4.9	底部から口縁部まで直線的に大きく開く。口縁部は肥厚する。やや扁平。	ロクロ整形。胎土に粗砂粒を多量に含む。白色針状物質含む。青灰色、灰褐色。焼成不良。歯質。	口縁 1/3存。覆土。
杯	5	底径 4.9	上げ底を呈する底部から体部は大きく外方に開く。	ロクロ整形。右回転。胎土は隙を若干含むが、比較的細かい。白色針状物質を含む。淡青灰色、褐色。焼成良好。底部回転糸切り。	底部 1/3存。カマド 1。
高台付 杯	6	高台底径 6.8	底部は上げ底気味。体部は大きく開く。	ロクロ整形。胎土は比較的細かい。白色針状物質含む。橙褐色。器内は青灰色。焼成良好。	底部 1/3存。土壇内覆土。
			高台は貼付けによる。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土に微細砂粒含む。赤褐色。焼成良好。	底部 1/3存。覆土。

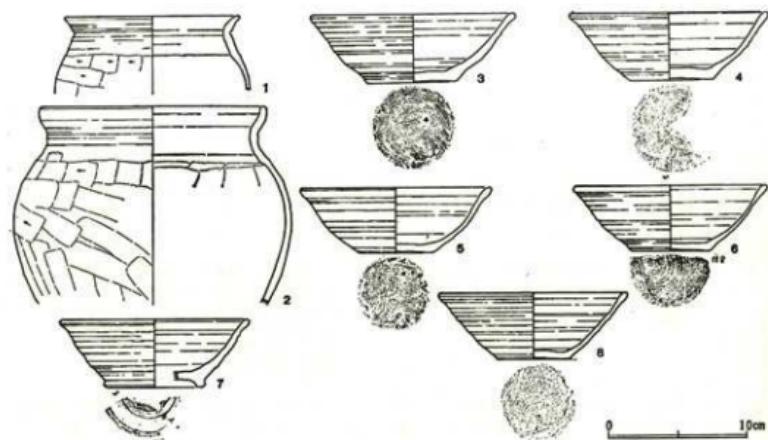
## 第19号住居跡（第47図）

調査区北側部55-K区、18号住から北東方向へ約30mの距離に位置する。規模は長径2.25×短径2.1mで、およそ正方形プランを呈し、主軸方向はN-11°-Wである。床の掘り込みは浅く、壁高は約6cm前後で、周溝、柱穴は検出されなかった。床面は中央部でややレベルを高くし、よく踏み



第47図 19号住居跡、カマド実測図

固められて良好である。カマド（第47図）は北壁中央に構築され、壁外に約55cm程掘り込まれ、燃焼部は深さ7cm程の皿状を呈している。燃焼部中央からは、支脚として利用した柱状の河原石が出土した。住居址規模に比べて、遺物はまとまって出土している。U字形鉗（鍼）先の出土が注目される。



第48図 19号住居跡出土土器実測図

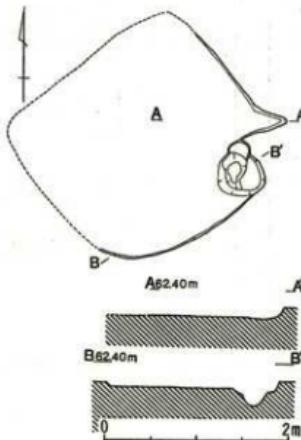
## 19号住居跡出土土器（第48図）

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	推定口径 12.6	小型甕。胴部から頸部にかけてゆるやかに内傾する。口縁は強く外反する。全体にしっかりした作り。口縁と頸部は沈線によって画される。	口縁、頸部は横ナデ。胴部は横方向のヘラケズリ。胎土は砂粒を若干含む。暗褐色。器肉は、黄灰色青灰色を呈する。焼成堅敏、硬質。	口縁部少存。覆土。
甕	2	推定口径 16.0	胴部は上位で最大径を持ち、頸部は緩やかに立ち上がり、口縁部は内湾して直立する。全体に器肉は厚い。	口縁、頸部は横ナデ。胴部は頸部近くで横方向、以下斜め。縱方向のヘラケズリ。胎土に砂粒を多く含む。暗褐色、灰褐色、外面胴部にスス付着。焼成良好。硬質。	口縁少羽。覆土。
壺	3	口径 14.6 底径 6.5 器高 5.0	やや小ぶりの壺。器肉厚め。体部は中位でやや張りを持つが、口縁部迄、比較的直線的に開く口唇部は僅かに外反する。	クロ整形。底部回転未切り。胎土は微細砂粒、若干の礫を含むが比較的精選されている。色調は部位により異なり、灰白色、黄褐色、赤褐色、黒褐色を呈する。焼成良好。	ほぼ完。覆土。

器種	番号	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
坏	4	口径 底径 器高	14.2 6.0 4.9	やや大ぶりの坏で、形態は3に類似する。体部中位から口縁まで直線的に大きく開く。口縁部は肥厚気味。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土は精選される。黄褐色、淡赤褐色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{4}$ 存。覆土。
坏	5	推定口径 底径 器高	13.6 5.2 4.7	体部は丸みを帯びて立ち上がり口縁部は外反させる。口唇部はやや肥厚する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。繊細砂粒に若干の小疎を含む。白色針状物質顯著。外面及び内面の口縁青灰色、他は赤褐色、橙褐色。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。ピット2出土。
坏	6	推定口径 底径 器高	13.8 5.6 4.7	器肉は全体的に薄い。体部は、内湾気味に開き、口縁部は極端に肥厚させて僅かに外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土に砂粒を多量に含む。淡黄褐色焼成やや不良。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{4}$ 強。カマド出土。
坏	7	口径 高台底径 器高	13.5 6.8 4.9	全体に厚手。体部は直線的に開き、口縁部は外反させる。高台幅広で低い。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り痕を中央部に僅かに残す。胎土に小疎をやや多く含む。青灰色、焼成良好。白色針状物質は含まない。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{4}$ 存。覆土。
坏	8	推定口径 底径 器高	13.6 5.3 4.8	体部は直線的に大きく開き、口縁部は肥厚させる。器肉は全体に薄い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土は粗砂を若干含むが、比較的精選。口縁部黄灰色、他は橙褐色。器肉は一部青灰色を呈す。焼成良好。	口縁 $\frac{1}{4}$ 、底部完。覆土。

## 第20号住居跡（第49図）

調査区北側部60—R区、18号住から北方向約50mの距離に位置し、今回の調査で最も北側に発見された。遺構の北西半分は擾乱され、南、東壁と南東コーナー部が確認できたのみである。因って下記する数字等も推定である。規模は長径2.4×短径2.25mで、およそ正方形プランを呈し、主軸方向はN-54°-Eである。壁高は約10cm前後で、周溝、柱穴は検出されなかつた。床面は中央に向けてややレベルを低くし、軟弱で状態は不良であった。南東コーナー部には深さ20cmの小ピットが穿たれ貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴北側の三角形状の張り出しが、カマド施設と推定されるが、覆土の堆積状態からは、そのような施設としての状況は確認できなかった。遺物は出土しなかつた。



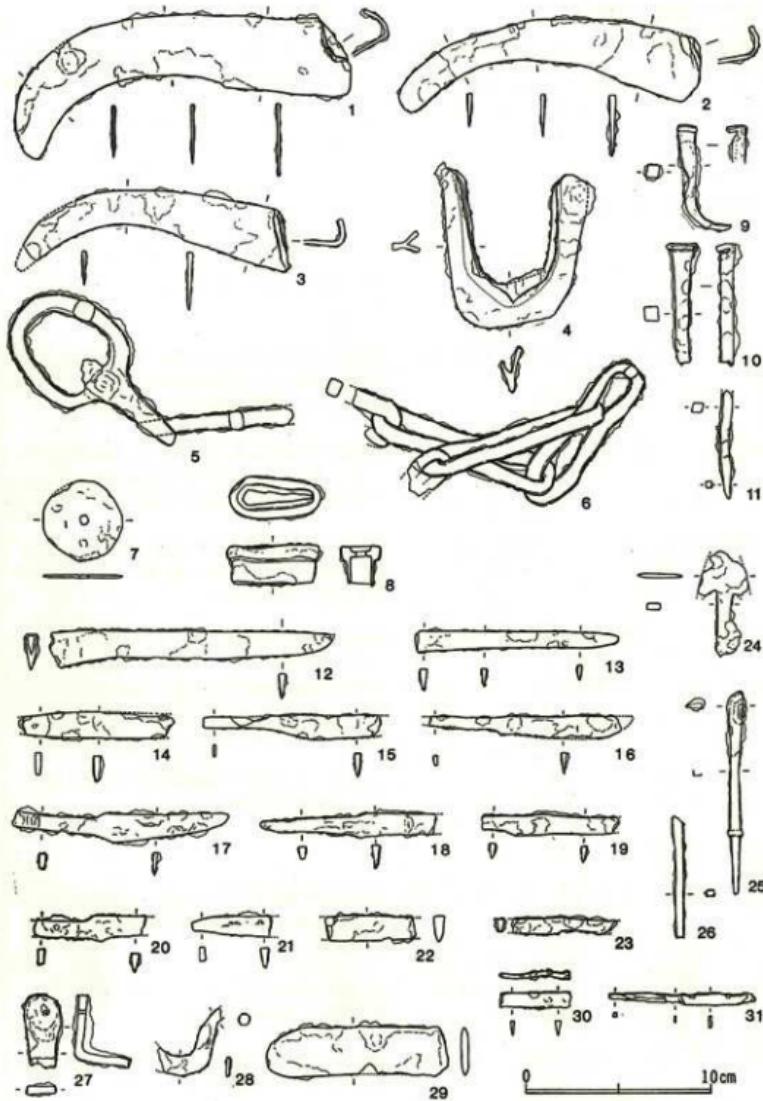
第49図 20号住居跡実測図

## (2) 鉄器、銅製品

図示した鉄製品は、いづれも住居跡より出土したものである。就中、5号住出土例が、その大半を占めている。形態別にみると、刀子が最も多く12例を数え、鎌(3)、釘(3)、馬具、U字形鎌(鍔)先、刀装具、鈎鎌車、不明鉄器(4)となるが、その他に銅製品が1例検出された。鎌3点は、いづれも床面出土である。またU字形鎌(鍔)先、馬具の住居跡出土例は少なく注目されるところである。

鉄器、銅製品観察表

遺構	種類	図版番号	長さ(cm)	幅	厚さ	特徴(備考)
2号住居址	刀子	19	5.7	1.1	0.3	柄部、刃部先端欠損。刃部側のみ闊を有する片開式。闊は鋸角をなす。柄部幅約7mm。覆土下部。
2 住	刀子	20	6.0	1.5	0.4	柄部から刃部にかけての半欠品。両開式と考えられるが刃部側の闊は弱い。柄部幅8mm、断面矩形、刃部幅1~1.5cm、断面複形を呈する。
3号住居址	鎌(?)	24	5.6	2.7	0.5	有茎脇抜式に属する鎌と考えられる。先端部及び逆刺先端は欠損する。身は扁平で、鍔は認められない。基部は断面矩形を呈する。覆土下部出土。
5号住居址	鎌	2	16.5	4.5	0.35	曲刃鎌の完形品。刃部と基部は弱い闊によって区別される。幅は刃部先端に行くに順に細くなる。基部上端を折り返す。床直出土。
5 住	鎌	3	14.5	3.3	0.3	曲刃鎌。刃部先端及び棟部の一部を欠失するが、比較的良好に原形をとどめている。基部と刃部は闊によって区別される。基部の短辺は折り返されている。但し棟部に近づく程、強く屈曲する傾向にある。2に比較して細身である。床直出土。
5 住	馬具	5・6				5・6共一連のもので、同時に出土した。轡と考えられる。6は鎖状に5連結されている。
5 住	刀装具	8				
5 住	釘	9	7.7	1.0	0.75	先端部が折れ曲がる。角釘。頭部は、扁平に打ち伸ばして折り曲げられ、平面形態は方形を呈する。茎部断面矩形。覆土。
5 住	釘	11	5.8	0.5	0.5	鉄釘基部の可能性もあるが、一応角釘と考えておく。先端部尖る。断面矩形。頭部欠損する。覆土。
5 住	刀子	12	15.3	2.0	0.65	刃部先端と柄部を欠損するが、刀子としては大型である。柄部近くでやや内彎する。
5 住	刀子	14	8.5	1.4	0.35	柄部から刃部にかけて半欠品。刃部から柄部への移行は、明瞭な闊を持たない。柄部断面は長方形を呈する。



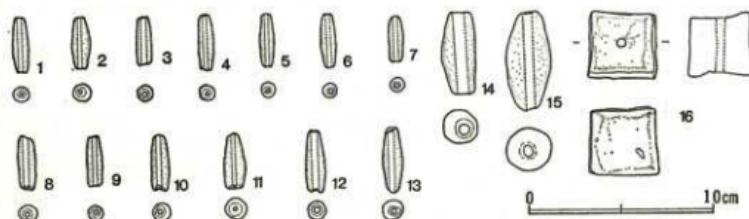
第50図 住居跡出土鐵器、銅製品実測図

遺構	種類	図版番号	長さ(cm)	幅	厚さ	特徴(備考)
5 住	刀子	15	9.7	1.3	0.3	片開造り。幅狭の柄部から、緩やかカーブして刃部に至る。刀身部先端欠損。
5 住	刀子	18	9.6	1.2	0.45	刀身部先端消失。両開造りと考えられるが、開は弱い。柄部は完存。
5 住	刀子	21	4.4	1.1	0.4	刀子柄部片。端部は断面長方形を呈する。木質が僅かながら認められる。
5 住	刀子	22	4.8	1.4	0.6	刀子の刀身部残欠と考えられる。銹化が著しいこともあり、全体的に厚手である。
5 住	鎌	25	11.0	鋒部 0.9		鋒部附近は銹化が著しく正確な形状は不明であるが、片刃式に属する鎌と推定される。
5 住	不明鉄製品	27				銹化著しく、詳細は不明である。全体に板状をなし、中程ではば直角に屈曲する。また端部近くの中央部には一孔が穿たれている。用途は不明。覆土。
5 住	不明鉄製品	28				釣り針状に屈曲する。残存部の一端は断面円形を呈し、他の部分は扁平な板状を呈する。
5 住	不明鉄製品	29	10.0	2.7	0.4	平面形態、長さから見るならば、摘謙と考えることも可能であるが、断面上下端が丸みを帯びて尖ることや、目釘孔が設けられた痕跡も認められない為、一応不明製品としておく。
5 住	不明銅製品	31	8.0	0.6	0.2	残欠品。表面に緑青が吹き出る。一端は断面正方形に近いが、他の部分は長方形に近い断面形態を呈する。用途は不明であるが、銅製品である点を考慮して、一応装身具と考えておきたい。
7号住居址	鎌	1	18.5	4.2	0.2	完形品。基部の一端は折り返される。刃部と基部は明瞭に区別される。全体的に大型で幅広。厚さも非常に薄い。床直出土。
7 住	角釘	10	6.6	1.7	0.7	先端部消失。頭部は扁平に打ち伸ばし、折り曲げられている。茎部断面は方形を呈す。覆土。
7 住	刀子	13	11.0	1.1	0.4	柄部消失。平様で厚みがある。覆土。
7 住	鎌	26	6.5	0.4	0.3	鉄鎌の茎部片。断面長方形。覆土。
9号住居址	不明鉄製品	30	3.9	0.8	0.3	断面楔形を呈し、一見刀子状であるが、一短辺が僅かに折れ曲がる。
17号住居址	紡錘車	7	直径 4.3		0.2	中心の孔を通る棒は出土せず、盤部分のみカマドの袖より検出された。

遺構	種類	図版番号	長さ(cm)	幅	厚さ	特徴(備考)
18号住居址	刀子	16	10.5	1.2	0.3	刀身部及び柄部先端欠失。片開造り。柄部長方形を呈する。
19号住居址	U字形鋸(鉄)先	4	8.8	7.8		非常に小型のU字形鋸(鉄)。刃部は錆が張れています。木柄。着装部は叉状に造り出される。裏面は、凹面をなしています。
19 住	刀子	23	5.7	0.9	0.35	錆化著しく正確な形状は不明であるが、刀子残欠と考えられる。

## (3) 土製品

当遺跡より出土した土製品は、土鍤と、立方体形を呈し孔が貫通する不明土製品である。土鍤は3、4号住より出土しているが、最も大型の1例を除き3号住出土である。小形のもの(1~13)と大形品(14、15)の2種に分けられる。立方体形土製品は5号住南壁際より出土している。



第51図 3、4号住居跡出土土鍤、5号住居跡出土土製品実測図

## 土鍤、土製品観察表

遺構	種類	図版番号	長さ(cm)	最大径	重量(g)	特徴(備考)
3 住	土鍤	1	2.9	0.8	2.5	孔径2mm。焼成良好。淡黄褐色。覆土。
〃	土鍤	2	2.8	0.95	2.5	孔径2mm。焼成良好。黃褐色、橙褐色。覆土。
〃	土鍤	3	2.5	0.8	2	孔径約3mm。焼成良好。黃灰色。覆土。
〃	土鍤	4	3.0	0.9	1.5	孔径約2mm。焼成良好。淡黄褐色。一部。
〃	土鍤	5	2.85	0.8	2	孔径2mm。焼成良好。淡赤褐色。覆土。
〃	土鍤	6	2.9	0.8	2.5	孔径約2mm。焼成良好。淡赤褐色。覆土。
〃	土鍤	7	2.4	0.8	1.5	孔径2.5mm。焼成良好。淡茶褐色。一部欠損。覆土。
〃	土鍤	8	2.9	1.0	2.5	孔径約3mm。焼成良好。黃灰色。覆土。

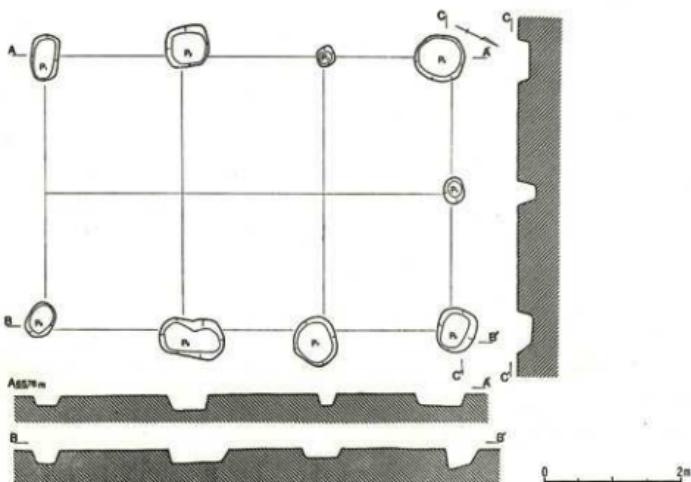
遺構	種類	図版番号	長さ(cm)	最大径	重量(g)	特徴(備考)
3 住	土 錘	9	2.85	0.8	2	孔径約2mm。焼成良好。黄灰色。覆土。
タ	土 錘	10	3.0	1.2	2.5	孔径約2mm。焼成良好。黄灰色。覆土。一部欠損。
タ	土 錘	11	3.0	1.2	3	孔径約2mm。焼成良好。黄灰色。覆土。
タ	土 錘	12	3.3	1.1	3.5	孔径約3mm。焼成良好。黒褐色、黄灰色。覆土。
タ	土 錘	13	3.4	1.1	4	孔径約3mm。焼成良好。灰褐色。覆土。
タ	土 錘	14	4.4	1.9	14	孔径6mm。焼成良好。黒褐色。覆土。
4 住	土 錘	15	5.2	1.5	25	孔径5mm。焼成良好。黄褐色。
5 住	不明土製品	16				1辺3.2~3.5cmの不整立方体を呈する。中央に径約4mmの孔が貫通する。軽鉄車かとも思われるが、類例を知らない。

## (4) 掘立柱建物跡

## 第1号掘立柱建物跡(第52図)

調査区南側部の7-S区、10号住の西約5mに位置する。3間(5.9m)×2間(3.95m)の南北棟建物跡で、主軸方向はN-24°-Wである。桁行南側はP<sub>5</sub>に相対する柱穴が検出されなかった。柱間寸法は桁行、梁行とも2m前後である。柱穴の掘り方は円形及び梢円形を呈し、径、深さも各々異なり特にP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は小規模である。

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
1	66×39	19		6	62×57	23	
2	64×60	22		7	69×64	14	
3	27×28	17	小形	8	95×51	21	
4	74×66	16		9	53×37	19	
5	37×30	27	小形				



第52図 1号掘立柱建物跡

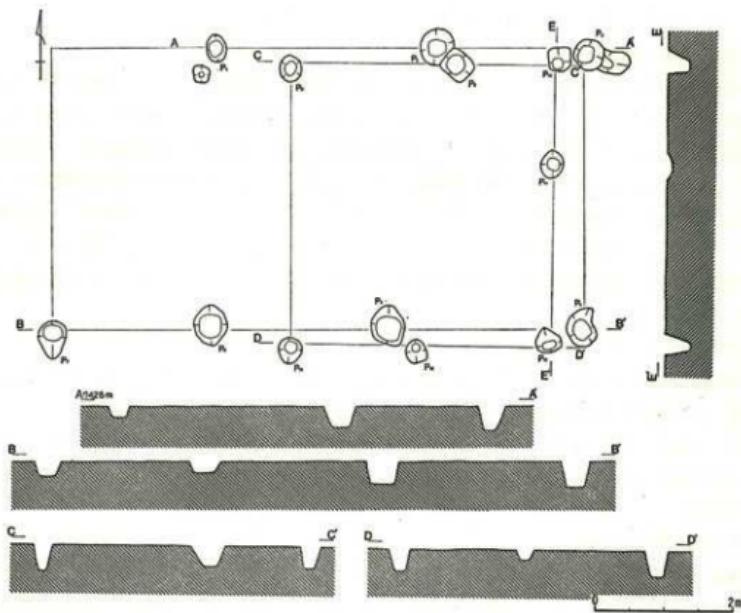
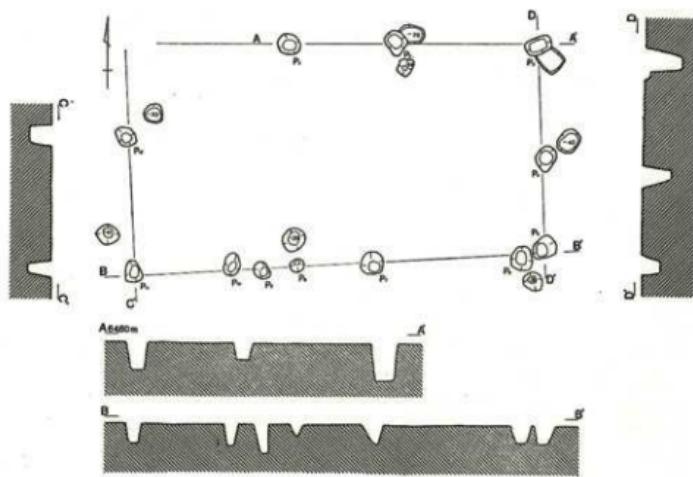
第2号掘立柱建物跡（第53図）

調査区中央部の34—0区、1号住の北約20mに位置する。3間（3m）×2間（1.6m）の東西棟建物跡で主軸方向はN-86°-Eである。梁行北側はP<sub>11</sub>に相対する柱穴が検出されなかった。柱間寸法は1.4~2.5mと各柱間で寸法が異なり不規則である。柱穴の掘り方は円形及び梢円形を呈し、径、深さが各々異なる。各柱穴の周囲には同様のピットが穿たれ、これは束柱か、建てかえの可能性もある。

No.	径 (cm)	深さ (cm)	備 考	No.	径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	19×15	40		7	17×15	27	
2	22×17	25	小ピットと重複	8	9×6	17	
3	27×16	53	小ピットと重複	9	11×15	42	
4	19×20	41		10	10×12	30	
5	16×19	26		11	12×18	28	
6	15×20	25		12	14×14	34	

第3号掘立柱建物跡（第53図）

調査区中央部の36—M、N区、1号掘立の約10mに位置し、4号址と重複する。3間（7.8m）×2間（4.1m）の東西棟建物跡で主軸方向はN-90°-Eである。梁行北側のP<sub>7</sub>に相対する柱穴と、桁行中央部の柱穴が検出されなかった。柱間寸法は梁行で2.3~3m前後と不規則である。柱穴の掘り方は円形を呈し、径、深さは各々の柱穴で異なる。2号掘立も同様であるが、1号掘立に比較して、その規模も、柱穴の掘り方等まで小規模である。



第53圖 2~4號獨立柱建物跡

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
1	21×24	16		5	37×35	32	
2	26×24	31		6	33×34	17	
3	23×27	35	小ピットと重複	7	28×22	21	
4	28×29	37					

#### 第4号掘立建物跡（第53図）

3号掘立と重複する。2間(4.1m)×2間(3.8m)の建物跡で南北方向にやや長く、正方形プランを呈していない。 $P_{11}$ に相対する西側の柱穴は検出されなかった。柱間寸法1.5m~2.6m各柱間で寸法が異り、不規則である。柱穴の掘り方は円形を呈し、径、深さも各々異なるが、全体的に小形である。

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
8	17×22	39		12	20×11	31	
9	26×26	15	$P_2$ と重複	13	11×11	15	
10	15×16	37		14	18×17	32	
11	18×17	7					

#### (5) 土壙、溝、グリッド出土遺物

##### 第1号土壙（第54図）

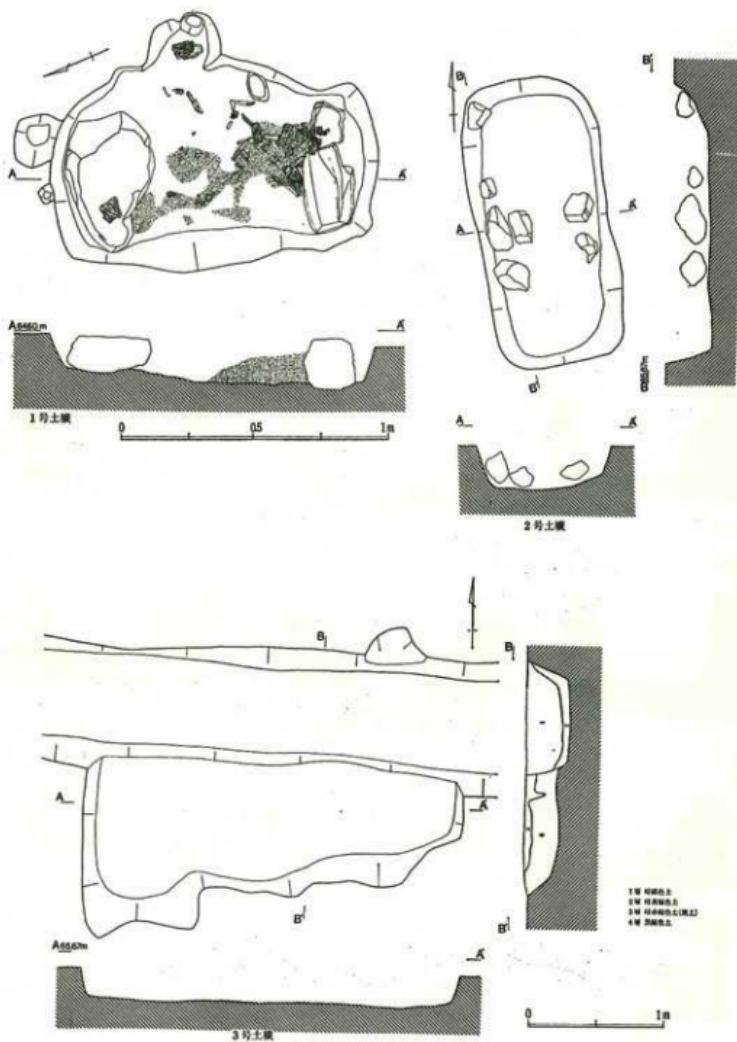
調査区中央部の32-N区、1号住の北東方約15mに位置する。規模は長径1.2×短径0.75mで、主軸方向はN-18°-Eである。梢円形プランを呈し、壁高は80cm前後、やや傾斜して立ち上がる。床面は凹凸して、中央部が皿状に深くなり、軟弱な状態である。壁ぎわには計4個の小ピットが穿たれ、すり鉢状を呈している。主軸方向両端にはひと抱えもある大形の河原石が3個埋設されていた。覆土中からは多量の焼土、炭化材に混って人骨が出土した。人骨はその一部を除く大半が骨片、骨粉化し、状態は不良であったが、おそらく一体分であることが推定される。河原石を台にして火葬に伏された後、直接埋葬されたものである。他に出土遺物はないが、時期は中世以降に遡るものと考えられる。

##### 第2号土壙（第54図）

調査区南側部の8-M区、15号住の北西方約4mに位置する。規模は長径2.1×短径1mで、長方形プランを呈し、主軸方向はN-7°-Wである。深さは約30cm前後、壁はやや傾斜して立ち上がり、北壁部は傾斜が緩やかである。床面は北から南方へ傾斜して、凹凸している。計7個の大形でチャート質の河原石がほぼ床直で、壁ぎわに並んで出土した。墓壙施設と推定されるが、時期は不明である。

##### 第3号土壙（第54図）

調査区南側部の12-Q、R区で、溝1と重複して検出された。当初住居跡と考えられたが、完掘した段階で土壙と判断された。規模は長径3×短径(1.8)×深さ0.2mで、不整梢円形プランを呈するものと推定されるが、北側半分は溝1に因り破壊されている。主軸方向はN-82°-Eである。

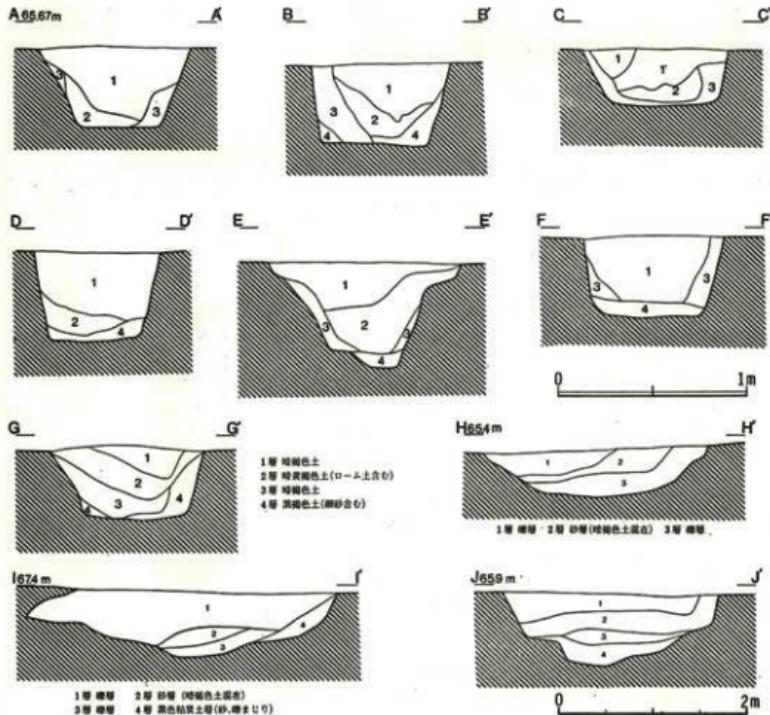


第54图 1、2、3号土壤实测图

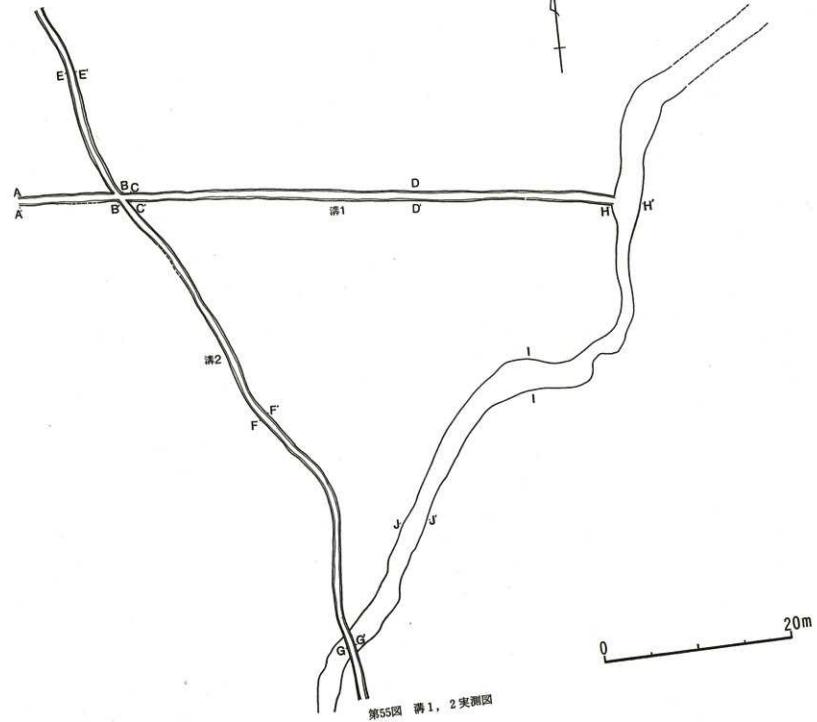
壁はやや傾斜して立ち上がり、床面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。

### 溝1、2（第55、56図）

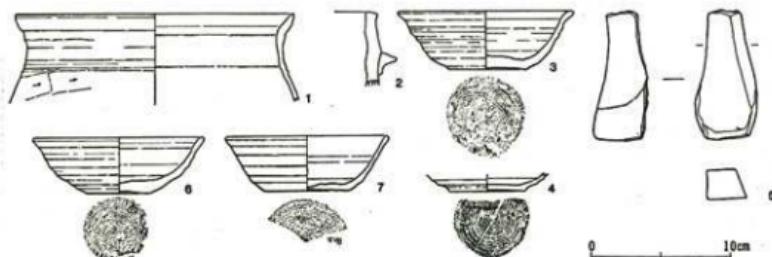
溝1、2は調査区南側部で発見された。溝1は調査区を東西方向に横切り、大谷木川旧流路に接続する。旧流路は台地の突出部を南西から北東方向に蛇行して流れしており、これは明治時代の地籍図によって確認されている。溝2は北西から南東方向に伸びて、溝1と連結し、さらに旧流路を横断する。溝1、2とも幅1.5～2m前後、深さ80cm前後でU字状を有し、溝底は部分的に凹凸し、溝1は東から西に、溝2は南から北に向けて溝底レベルをやや低くする。覆土の堆積状態も同様で、酸化した鉄分を全体的に含み、川砂の堆積が部分的に認められる。溝1が大谷木川旧流路に接続して検出されたことについては、その重複する土層状態からは直接的な旧流路からの水利用に疑問が残る。何れにせよ溝1、2に大きな年代差は求められず、両溝とも明治以降の用水路である。



第56図 溝1、2、大谷木川旧河川土層実測図



第55図 溝1, 2実測図



第57図 溝1、2、試掘、グリッド出土土器、石器実測図

## 溝、グリッド、不明遺物（第57図）

器種	番号	法 量	形 狽 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器 甕	1	推定口径 19.8	頸部は内傾気味に伸び、口縁部は内彎気味に外反する。外面口縁部と頸部は沈線により区画される。	口縁、頸部横ナデ。胴部はやや斜位のヘラケズリ。淡赤褐色。焼成良好。	溝1出土。口縁部1/4。
羽釜	2	口径不明	土師質の羽釜口縁部小片。口唇端部は平坦で、口縁部は直立気味になると思われる。鉢はややダレ気味。	ロクロ整形。鉢は貼り付けによる砂粒を多量に含む。黄褐色、茶褐色。焼成良好。	溝2出土。口縁部小片。
須恵器 杯	3	口径 12.4 底径 5.6 器高 4.2	底部厚め。体部は下半で丸みを持って立ち上がり、口縁は比較的大きく外反する。	ロクロ右回転、胎土に小蹠が目立つ。白色針状物質は含まれない。青灰色。焼成良好。整形はやや難。底部回転糸切り。	試掘時の出土。口縁1/2、底部完。
杯	4	底径 5.4	底部及び体部下端片。底面には「一」状のヘラ記号あり。	ロクロ整形。底部回転糸切り。胎土に白色針状物質含む。淡青灰色。焼成良好。	底部1/4存。
砥石	5	全長 9.3 最大幅 4.4 最大厚 4.7	4面共砥面として利用されているが、主使用面は上面で、弓状に磨り減る。	石質は凝灰岩。	35K区出土。
杯	6	推定口径 12.0 底径 4.5 器高 4.0	小さな底部から体部は丸みを帯びて大きく開く。口縁部は直線的に外傾する。底部内外面及び体部下半に墨状物質塗布される。	ロクロ整形。底部回転糸切り。小蹠若干含む。橙褐色。焼成良好。堅緻。酸化焰焼成。	出土地点不明。
杯	7	推定口径 11.6 推定底径 6.0 器高 3.9	底部中央の器内は薄い。体部は下半で丸みを持ち、直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚気味。	ロクロ整形。底部回転糸切り。細砂粒、白色針状物質含む。青灰色。焼成良好。	出土地点不明。

住居址一覧表

番号	形態	規模(m)	主軸方位	カマド	周溝	柱穴	施設	備考
1	長方形	4.7×3.2	N-78°-E	東壁中央	有	2本		
2	長方形	4.75×4.0	N-73°-E	東壁右寄り	有	無		
3	長方形	5.7×4.3	N-83°-E	東壁右→北壁右寄り	無	8	回状張り出しビット	
4	不整方形	5.2×4.8	N-86°-E	東壁右→北壁中央	無	4		カマドの造り替えに伴う拡張の可能性有り。
5	長方形	5.95×4.4	N-85°-E	北壁右寄り	無	6		
6	長方形	3.0×2.5	N-89°-E	東壁中央	無	無		
7	不整長方形	4.4×3.0	N-89°-E	東壁中央→北壁右寄り	無	無		カマドの造り替えに伴う拡張の可能性有り。
8	方形	3.35×3	N-86°-E	東壁左寄り	無	無		
9	長方形	4.4×4.05	N-79°-E	東壁右→東壁左寄り	有	3		調2によって切られる。
10	長方形	2.9×2.45	N-91°-E	東壁中央	無	無		
11	長方形	3.1×2.7	N-55°-E	東壁右寄り	無	無		壁の立ち上がりなし。規模も推定値。
12	方形	2.8×2.5	N-80°-E	東壁右寄り	無	無		
13	正方形	3.1×3.0	N-90°-E	東壁右寄り	無	無		
14	長方形	3.45×2.85	N-90°-E	東壁中央	無	無		規模一部推定。
15	方形	2.45×2.2	N-90°-E	北東コーナー				カマドはコーナー部に設置。
16	方形(?)	3m前後か	?	北壁	有	?		大半が破壊。詳細不明。
17	長方形	5.35×3.4	N-78°-E	北壁右寄り	有	1	貯蔵穴	
18	方形	2.6×2.1	N-5°-E	北壁中央→東壁右寄り	無	無		カマドの変遷は、支脚の残存より推定。
19	正方形	2.25×2.1	N-11°-W	北壁中央	無	無		
20	正方形	2.4×2.25	N-54°-E	?	無	無	貯蔵穴	擾乱著しく詳細不明。規模も推定値。

## IV 結 語

### 1. 遺構について

併六遺跡で発見された平安時代の遺構は、住居跡20軒、建物跡4棟であった。またその集落が営まれた期間は、出土遺物等から9世紀代から10世紀前半と比較的限定された時期が与えられた。ここでは土器編年を基軸として、住居跡の集落内における変遷をたどり、本遺跡の性格についてふれてみたいと思う。

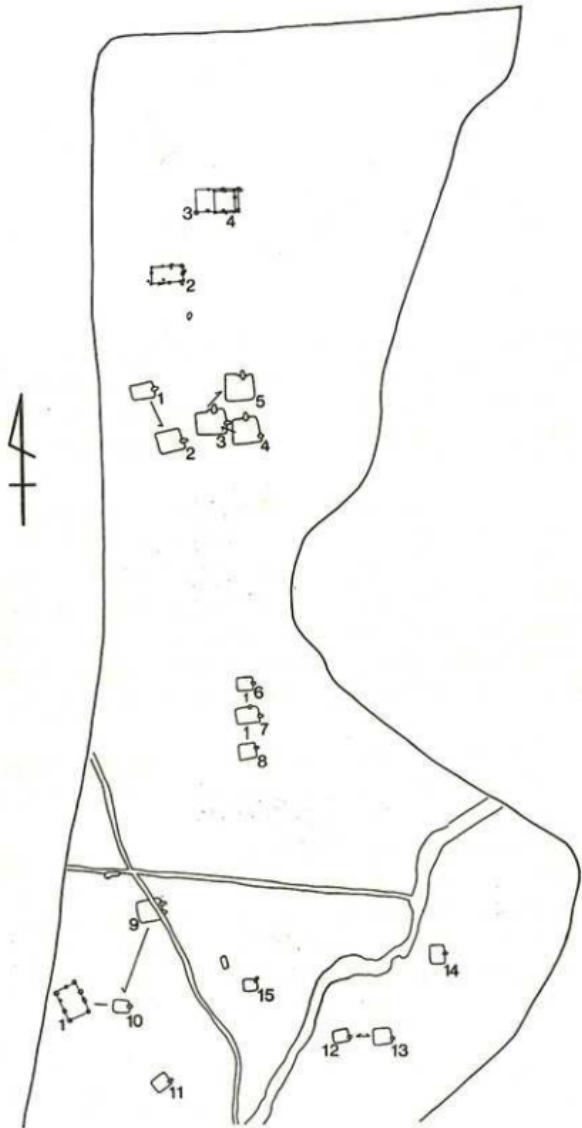
本遺跡は毛呂台地やや内東部標高約65mにあって、遺跡の直ぐ東側を大谷木川が北流する。河川は扇状地状堆積物で台地を破壊して微高地化、その西側には後背湿地を生成している。

集落は河川に沿った微高地を占地して南北方向に展開し、20号住以北では遺構の発見がなかったことから、20号住をもって集落の北限とすることができます。また集落の西側に広がる低湿地を耕地として、水田經營に従事した農業集落であることは、その地理的景観から容易に推測されることである。

集落内における住居の分布をみると、調査区全域に渡って広範に散在する傾向をみることができると、それでもその分布状態から、A～E群のグループ分けが可能である(第58図)。A群は調査区中央部に密集する1～5号住の一群、B群はA群の南側で南北方向に隣接して位置する6～8号住、C群は調査区南側部で旧河川西側の9～11、15号住、旧河川東側の12～14号住をD群、さらに計画道路北側部の16～20号住を取り敢えず一括してE群とする。これは住居の分布状況、主軸方向、カマドの位置等を考慮した群別で、恣意的側面を多く残すが、本遺跡出土の土器編年による時期細分に照らして各群の変遷過程を辿ることが可能であれば、より明確に各群を把握できるものと考える。

本遺跡はすでに述べたように9世紀代から10世紀前半に営まれた集落遺跡で、須恵器坏を中心とした分類で、Ⅰ期～Ⅶ期に時期細分できる。つまりⅠ期は9世紀第2四半期、Ⅱ期は9世紀第3四半期、Ⅲ期は9世紀第4四半期、Ⅳ期は10世紀前半に各々相当する。

A群の住居は1辺が5m前後の規模で、主軸は東西方向にある。カマドが東壁に設備され、複数のカマドを有する3、4号住も、東壁に設備されたものが旧カマドである(北壁の新カマド構築時に住居の拡張、改築が行われた可能性が高い)。3、5号住は須恵器坏類を中心に多量の遺物が出土したが、特に5号住は坏類だけでも70余の個体数に及び、また鉄製馬具の出土は注目されるところである。3～5号住は同時存在が不可能な接近した分布状態で、4期の時期細分では、各々4号住はⅠ期、3号住はⅡ期、5号住はⅢ期に属すことから、4号住→3号住→5号住の連続した変遷を指摘できる。また1号住はⅡ期、2号住はⅢ期に属し、1号住→2号住への変遷を辿るものと考えられる。この4期時期細分は集落の動態をそのまま示すものではなく、ある一定の時間的幅として把えるべきものであることは考慮されねばならないが、本集落の極めて単純な様相から、A群の場合継続して営まれた住居の前後の連続性を、4期の時期細分によってうまく区分するという結果



第58図 遺構配置図

を得られた。A群の北側に位置する2～4号建物跡も、その分布状態から判断すればA群を構成する一部と言える。ただ時期比定できる出土遺物がなく、1～5号に相対してひとつの単位を構成したものか、A群のⅣ期以降の変遷過程となるものであるか、つまりA群にどのような形で介在したものか問題がある。

B群の住居はA群に比較し、1辺が4m前後とその規模はやや小形化する。主軸が東西方向にあり、カマドは東壁に設置され、7号住についても東壁のものが旧カマドである。7、8号住はⅢ期、6号住はⅣ期に属し、B群は8号住→7号住→6号住と変遷する。これは6号住が単独で存在することから、7、8号住について時間的前後関係を持って把えるべきものと考える。

C群は、9号住がⅠ期に、10号住がⅡ期に各々営まれ、11、15号住は出土遺物が少なくその所属時期は不明である。9号住→10号住への変遷が推定される。1号建物跡はその位置関係から10号住と関連して1単位を構成し、C群に組み込まれるものと考えられる。

D群は、長軸方向を同様にして、東西に隣接する12、13号住はⅣ期に属するが、相前後して形成されたB群同様、時間的前後関係を持った1単位とすることが妥当と思われる。

未調査の町道予定地内では19号住付近で2軒の住居跡が確認されており、まだ数軒の遺構の存在が予想される。従ってE群については、その全体を把握していないものと考え一群にまとめたが、群としての領域面積を考慮するとさらに2群に分かれる可能性がある。ひとつはⅢ期に営まれた17号住を中心とし16号住を含む一群で、他の一群はⅣ期に営まれた18、19号住、さらに町道内に確認された2軒を含めて構成されるものと想定される。

このように各群の変遷過程をみてくると、未調査区域を残すE群は除外して、本集落が展開していく姿を、ある程度具体的に想い描くことが可能である。9世紀前半本集落が初めて営まれた段階で存在したのは、A群に属する4号住と、C群の9号住である。しかしA群とC群を比較した場合、相対的な住居規模や出土遺物の質、量的な差違は明確にA群の優位性を示しており、A群は本集落の母集団として性格づけられるものと考える。つまりC群はA群から分離した集団とすることができる。9世紀代を通してA、C群が形成されるなかから、9世紀後半にはB群が、また10世紀に入ってD群が、各々分離して定着化するのであるが、この集落の変遷は、A群内においてはⅡ期以降2軒を単位として群が構成され、またC群では建物跡をその構成に組込み、そしてA群とB群の関係についてはA群が存在する段階でB群の形成が進行する等々、それは一元的に解釈することができない連続性を有している。また各住居群がその領域を相互に規制しても、集落全体として規制を行わず、互いに領域を主張して疎遠に群在するのは、その空間に各群の専有する耕地を介在するためかとも思われる。

古墳時代後半期の集落は8世紀段階まで、中核的住居の存在を中心にして領域設定された住居群を形成して構成され、家父長制世帯共同体機構のもとに集落の經營が行われたとされている。しかしこれ以後こうした集落形態は、住居群の拡散化、群少化という現象を経て解体する。こうした過程は律令制社会体制内の共同体機構の崩壊過程として把えられ、その結果經營単位は縮少して自立農民層の手に委ねられる。農具や役畜等の充実に支えられた生産力の向上を背景として彼らは、耕地の拡大、安定化に努め、開発を押し進めてゆく。現象としては集落の拡散化や遺跡数の増大とし

て認識されることである。本集落は、そうした歴史背景を持って形成された新村落であり、次代の中世村落形成へのひとつの橋渡しを担ったものと考えられる。

(鈴木秀雄)

#### 参考文献

- 和島誠一「集落と共同体」(日本の考古学V) 河出書房 1966年  
服部敬史「古代集落の形と特徴」(日本考古学を学ぶ(3)) 有斐閣選書 1979年  
國平健三「相模国の奈良・平安時代集落構造(上)」神奈川考古学第12号 1981年  
入間田宣夫「平安時代の村落と民衆の運動」(岩波講座日本歴史4古代4) 岩波書店 1976年

## 2. 出土土器について

今回の調査は大谷木川の左岸に沿った約18,000m<sup>2</sup>を対象に実施され、20軒の竪穴住居跡が検出された。出土土器の様相から、それらは全て国分期(平安時代)に営まれた単一集落を構成した住居群であると考えられる。ここでは集落の変遷を理解する為の前提として、住居跡出土土器の編年について触れておきたい。

国分期土器の編年に就いては、70年代前半期に報告の相ついだ窯跡、集落跡の調査によって得られた知見を基にした高橋(高橋1975)、谷井(谷井1973)両氏による編年案の発表を契機として、以後も該期の調査例の増加を背景に多くの論考が提示されている(市川1977、駒宮1980、早大本庄校地文化財調査室1980、浅野1980、松本1981、中島1981等)。編年の基準は一般的に須恵器杯に置かれ、その底部二次整形技法と、口径に対する底径の法量変化等から相互の相対編年を導くという方法論に拠ってきた。ここでも従来の方法論に従い須恵器杯類の分類を行い、土器器窓の伴出関係等も考慮しつつ、編年的位置付けに触れてみたい。

本遺跡出土の杯類は、窯跡群に比較的近い為か須恵器杯が大多数を占め、少數のロクロ使用による酸化焰焼成杯、内黒杯を伴うが、体部ヘラケズリを特徴とする土器器窓は認められない。底部調整技法について観察すると、二次整形を施すものと、回転糸切り無調整のものの二者が存在する。

I群 底部回転糸切り後、ヘラによる二次整形を施すもの。

A類 底部全面に亘り、手持ちのヘラケズリ調整を施すもの(10住2)

B類 底部外縁部ヘラケズリ調整を施すもの。体部はゆるやかに内彎気味に立ち上がる。口縁部形態によって二分される。

B<sub>1</sub> 口縁部は、体部からそのまま素直に伸びるもの(4住11~14)。

B<sub>2</sub> 口縁部全体が強く外傾するもの(3住15・16・18)。

C類 底部調整技法はB類と同一だが、法量が大きく塊形を呈するもの。

C<sub>1</sub> 口唇部を小さく外反させるもの(4住7~10)。

C<sub>2</sub> 口唇部を肥厚させ、断面三角に近い形状を呈するもの(3住11~13)。

II群 底部回転糸切後、二次整形を施さないもの。形態、法量比等から分類した。

A類 口径に対する底径比が $1/2$ を大きく越えるもの。口縁部が素直に伸びるもの(4住18)と、口唇部を僅かに外反させるもの(3住21、5住31)がある。

B類 口径に対する底径比 $1/2$ 前後のもの、口径12cm、底径約6cmのものが中心となる。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部の外反は総じて弱いものが多い。

B<sub>1</sub> 器肉が厚く、口縁部は体部から素直に伸びるものと、僅かに外反気味におさめるもの（3住23・24・26・29・32）がある。ぼったりした印象を受ける。

B<sub>2</sub> 体部器肉が厚く、口唇部を短く外反させるもの（10住3・4）。

B<sub>3</sub> ロクロ凹凸が顕著で、口縁部がゆるやかに外反するもの（5住30・32・33・36）

B<sub>4</sub> 薄手のつくりで、口縁部全体を強く外反させるもの（3住25、5住43・44）

C類 口径に対する底径比が $1/4$ 以下のもの。形態からいくつかのタイプに分かれる。B類に比較して、やや口径が大きく、底径が小型化するため、体部の開きが大きくなっている。

C<sub>1</sub> 体部は内彎気味に開き口縁部は緩やかに小さく外反するもの（2住6～8、3住30、5住34・35・38・39・41、7住3、8住2、12住7）

C<sub>2</sub> C<sub>1</sub>に類似するが、口唇部が小さく強く外反するもの（2住5・10、5住42、46～49）

C<sub>3</sub> 口唇部を内反り気味におさめるもの（5住27）

C<sub>4</sub> 体部は内彎して開くもので、口縁部が肥厚して素直に伸びるもの（5住26、8住3・6）

C<sub>5</sub> 体部が直線的に伸びるもの（5住22～25、7住4）

C<sub>6</sub> 本部中位で張りを持ち、口縁部は外反するやや扁平なもの（5住37・40、17住5）

D類 法量の大きな坏を一括する（2住4、5住13～21）。I群のものに比べ、体部の開きが大きくなり、碗形というよりも杯形に近い形態のものも現れている。

E類 19号住居跡出土3～6、8を一括する。大ぶりの坏で口径13.6～14.6cm。体部は直線的、または僅かに内彎して大きく開き、口唇部を肥厚させる。焼成は完全な還元焰焼成によるとは言えず、青灰色～赤褐色迄色調も部分的に異なる一群である。

F類 酸化焰焼成によるものを一括する（12住3～8・10）。3～6は体部中位で張りをもち、口径部にゆるやかに大きく外反する。

G類 内黒土器。3住より1点のみ出土している（3住39）。

#### 高台付坏

高台付坏の出土数は少ないが、底部にヘラケズリ痕を残すもの（I群）と糸切り痕を残すもの（II群）がある。

#### I群

A類 小型の高台付坏。3住14が該当する。これは、体部下端にもヘラケズリが及ぶもので体部が直線的に上方に伸びる。口縁部内外面に刻み風の意匠がみられる特異な形態である。

B類 大ぶりのもので、1住3が該当する。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が肥厚して外反する。体部下位までヘラケズリが及ぶ。

#### II群

A類 小ぶりのもの。5住78が挙げられる。体部は深く、内彎気味に立ち上がる。

B類 大ぶりのもの（5住17、7住2、12住9、18住6、19住7）。7住2、19住7は、体部の開きが大きく、口縁部をゆるやかに外反させるタイプである。12住9は、酸化焰焼成品である。

さて、以上分類した坏の変化を中心に、住居跡出土土器の変遷を考えてみたい。現在、須恵器坏は、底部調整の簡略化という方向から全面ヘラケズリ→外縁部ヘラケズリ→糸切り無調整という変

化が、一部重複しつつも辿られ、それはそのまま時間的な先後関係に置き換えられることが明らかに、されている（高橋1975）。

そこで当遺跡出土土器についてみると、最も古い底部全面ヘラケズリ技法を有するものに坏ⅠA類、高台付坏Ⅰ類、ⅠB類がある。このうち高台付坏ⅠA、ⅠB類は、体部下端にまで、ヘラケズリが及んでいる。同様の底部調整技法を残す前内出窯跡1、2号窯出土の坏類と比較すると、まず坏ⅠA類（10住2）は、底部全面ヘラケズリを施す点で、1号窯跡出土坏と同巧であるが、形態的には大きく異なり、また口径に対する底径比も $1/2$ 以下であること等から、かなり新しい段階のものに例外的に古い技法が残存したものと考えられる。高台付坏ⅠB類（1住3）も形態上、1号窯出土坏と異なり、これも新しい時期の所産であろう。小ぶりの高台付坏ⅠA類（3住14）は、口縁部に特異なモチーフを有するもので他に類例を知らない。前内出窯跡の高台付坏は1号窯から1点のみ検出されている。口径において本例と大きく異なるが、新久窯跡A—1号窯出土例等につながる小ぶりの高台付杯として、前内1号窯に近い時期に比定しておきたい。但し、糸切り後無調整の杯類に混じって検出されたもので、直接住居跡に伴うことは考えられない。

次の段階のものとして、底部外線にヘラケズリを施す一群の土器がある（ⅠB、ⅠC類）。3号住床面下（掘りかた）、4号住覆土中よりまとまって出土している。やや身が深く、口縁は素直に伸びるもの（ⅠB<sub>1</sub>）と口縁部が外傾するもの（ⅠB<sub>2</sub>）の2つのタイプがあるが、前内出窯跡出土のものと比較すると、口径、底径とも小型化しており、口径に対する底径比も約 $1/2$ 近くにまとまる点、更に口縁部が外傾するものが現れる等、明らかに新しい要素が発見され、二次調整を施す杯をしては、最も新しい段階に位置付けられよう。八坂前4号窯では、外縁部ヘラケズリ調整を施す杯に、糸切りのままで二次調整を行わない杯が共存する現象が確認されている（小林1982）。このあり方からすれば、ⅡA類の糸切りのままで、口径に対する底径比の大きい杯は、ⅠB、ⅠC類と共存すると考えられるだろう。

また、ⅠB類に伴出す土師器甕をみると、所謂「コ」の字状口縁甕の直前段階のものを含んでいる。「コ」の字状口縁甕は、坏底部が糸きりのまま残る段階にはほぼ併行して出現するとされており（谷井1976）、この点も矛盾はない。花影遺跡歴史時代2号住居跡出土土器が大略同期に位置づけられよう。

後続する段階として、坏ⅡB類が挙げられる。この段階になると、底部二次整形を施す杯は消滅し、底部は糸切り痕をそのまま残すようになる。口径に対する底径の比率は約 $1/2$ 前後、即ち、口径約12cm、底径約6cm前後で、体部は内彎するものが主体を占める。口縁部の外反は、さほど顕著でないものが多い。3号、5号、10号住等から出土している。

ほぼ同様な形態、法量を示す資料を提供する遺跡に新久窯跡がある。言うまでもなく、同窯跡は武藏国分僧寺の再建瓦を供給した窯跡として著名であり、瓦・須恵器併焼窯であるA地点1、2、E地点1号窯と、須恵器窯であるC地点1、D地点1～3号窯に大別される。そして統日本後期承和12年3月条に記載のみえる前男衾郡大領による塔再建願記に拠って、現在、前者の瓦・須恵器併焼窯を9世紀 $\frac{1}{4}$ 期に比定する場合が多い。後者の須恵器窯について谷井氏は9世紀 $\frac{1}{4}$ 期に位置付けている（谷井（1976）。（註1）

杯ⅡB類は、新久A地点1号窯の杯に形態、法量ともよく一致し、ほぼ同時期の9世紀<sup>3/4</sup>期に位置づけが可能である。伴出する土師甕は完全に「コ」の字状口縁になっている。

新久窯跡の第Ⅱ期であるC、D地点窯跡出土資料にはほぼ相当するものとしてⅡ C類がある。口径に対する底径比は $1/2$ 以下で、 $1/3$ までには達しない。一般に体部の開きが大きく、口縁部も外反するものが多い。器形には、かなりのバラエティがみられ、C類に含めた中にも後続する時期かと考えられるものもあるが、明確には分離できない為、一応一括しておいた。5号住を中心に2号、7、8号住等から出土している。伴出する土師甕は胴部を薄く削る手法を有する「コ」の字状口縁甕である。Ⅱ D類の大ぶりの杯も、C類同様に体部の開きが大きくなり、新久窯跡D地点1号窯出土例等に類似する大型の杯型土器とすべき形態のもの（2住4）も出現する。

杯Ⅱ E類は、Ⅱ C類までの杯に比較して様相が大きく異なる。19号住居跡出土杯を一括した。法量の大きなもので、大きく開く体部と、それに続く肥厚して伸びる口縁部を有する。不完全な還元焰焼成による為に、部分的に色調、焼きが異なる。伴出する甕には2種類あり、小型のもの（19住1）は「コ」の字状口縁台付甕の系譜を引くものである。形態、手法にその伝統を残しているが、暗褐色を呈し、極めて堅緻な焼き締りで、器肉は黄灰色、一部表面剥離部分では青灰色を呈する等、所謂「コ」の字状口縁甕とは異なる点が多い。もう一つの大型の甕（19住2）は、「コ」の字甕からはずれる形態である。灰褐色を呈し、硬質である。

同様の甕は18号住でも検出されている。18住2は、小型の甕で「コ」の字甕の形態を保つが、胴部器肉は厚く、外面ヘラケズリは胴部上端には及ばず地肌をそのまま残す等退化的様相が窺える。18住1は「く」の字状に外反する口縁部をもち、厚手で硬く焼きしまる。出土杯（18住3）は、19住の杯よりも器高は低いが、体部が大きく開き、口縁部を肥厚させる点は共通する。杯Ⅱ E類の類似資料は、新開遺跡Pb区窯跡より出土した杯類に求められる、両者は、形態、法量共に近いものである。しかし、新開遺跡Pb区の窯跡に付隨する工房跡より検出された甕は全く異なる。口縁部は「く」の字状に外反するものが殆どで、底部には糸切り痕を残すものも認められる。明らかに18、19号住の甕よりも後出する要素を含み、新久窯跡E地点住居跡出土例に近い形態と考えられる。

また地域は異なるが、武藏国分寺SⅠ176、SⅠ190住居跡より、Ⅱ E類に近い杯と共に18住2、19住1に近い形態の甕が確認できる。

酸化焰焼成による杯Ⅱ F類（12住出土杯）に伴う甕も「コ」の字状口縁消滅後の厚手で硬質のもので2例認められる。12住1は張りをもつ胴部から口縁部は「く」の字状に外反するものである。胴部ヘラケズリにのみ「コ」の字状口縁甕の伝統を残し、胴部上半に横、以下斜め、縦方向に施される。12住2は、ぶ厚な張りの弱い胴部から口縁部は「く」の字状に外反するものである。胴部上半に斜方向、以下縦のヘラケズリが施される。18、19号住よりも、形態的により新しい様相を示していると言えよう。但し、新久窯跡E地点住居跡、多摩ニュータウンN87遺跡出土例とは、形態的に直接関連性は見出せない。

以上、出土土器について段階を追って述べてきた。最後にそれをまとめつつ、年代を考えてみたい。

I期、最も古い底部調整技法をもつ高台付坏ⅠA類が該当する。前内出1号窯に近接する時期と考え、一応9世紀を前後する時期と把えておきたい。

II期 底部外縁ヘラケズリ調整を施す坏ⅠB、ⅠC類を特徴とする段階。3、4号住出土土器を典型とする。9号住もほぼ同一時期としておきたい。後続するIII期へ連続的につながることは3号住における出土状況からも想定される。9世紀<sup>1/4</sup>期としておく。

III期 新久窯跡A地点1号に該当する。統日本後期の記載から9世紀<sup>1/4</sup>期に位置付けられる。坏ⅡB類に代表される土器群である。

IV期 新久窯跡D地点1号窯にはほぼ相当するもので、坏ⅡC類があてられよう。一応9世紀<sup>1/4</sup>期を中心とする時期としておく。

V期 12、18、19号住の土器群を一括しておく。VI期とV期では、土師器甕の形態上相違が大きい。熊野3号住（中島、野部1973）や枇杷橋1住（菅谷、駒宮1973）で出土しているような「コ」の字状口縁を保ち、胴部器肉が厚目で焼成の堅敏な土器群が間に介在することも考えられる。12号住出土土器群が、18、19号住よりも、1段階後に出る可能性もあるが、一括して一応10世紀<sup>1/4</sup>期と考えておきたい。新久窯跡E地点住居跡等は、10世紀<sup>1/4</sup>期以降に位置付けられるものと考えている。

以上、出土土器の変遷について述べてきたが、VI期以降の年代比定、「コ」の字状口縁甕退化後の土器群の変遷等も含めて、誤まりも多々犯しているかと思う。後日再考したい。（富田和夫）

註1 C、D地点窯に関する年代比定は研究者によ様々である。10世紀<sup>1/4</sup>期に位置付ける見解（金子1982）、10世紀<sup>1/4</sup>期に当てる例（松本198）の他、新久窯跡の報告者である坂清氏は、最近第Ⅱ期として900～1000年の間に位置付けている。更にC、D地点窯のうち、C地点1号窯をD地点窯よりも後出的であるとして分離させようという意見も出されている（服部、福田1981）。

#### 参考文献

- 浅野晴樹「埼玉県出土の平安末期の施釉陶器」埼玉県立歴史資料館研究紀要2 1980  
市川 修「田中前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書32 1977  
小川良祐・高橋一夫「前内出窯址発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告24 1974  
金子真士「埼玉県における9世紀代の須恵器—東金子窯址群を中心として—」  
小林昭彦「八坂前遺跡の調査」シンポジウム「関東地方における9世紀代の須恵器と瓦」資料 立正大学文  
学部考古学研究室 1982  
栗原文蔵ほか「水深」東北綿貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 1972  
栗原文蔵・野部徳秋「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書16 1973  
駒宮史前「甘粕山」埼玉県遺跡発掘調査報告書30 1980  
坂詰秀一「武藏新久窯跡」1971  
「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」立正大学人文科学研究所年報17 1980  
齊藤 稔「若葉台遺跡群 第二次発掘調査概報」鶴ヶ島町教育委員会 1980  
佐森健一「川崎遺跡(3次)・長宮遺跡」上福岡市教育委員会 1978  
菅谷浩之ほか「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告20 1973  
高橋一夫「国分削土器の細分・編年試験」埼玉考古13・14 1975  
谷井 虹「山田遺跡・相模原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告18 1973  
「鶴ヶ丘」埼玉県遺跡発掘調査報告書8 1976  
谷本銘次「No.87遺跡」多摩ニータウン遺跡発掘調査報告Ⅴ 1968  
中島利治・野部徳秋「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡」埼玉県遺跡調査会報告22 1973

- 中島 宏「清水谷・安光寺・北坂」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 1 1981
- 服部敬史・福田健司「南多摩窯址群における須恵器編年再考」神奈川考古 12 1981
- 早川 泉「武藏国分寺遺跡発掘調査概報Ⅳ」武藏国分寺遺跡調査会 1980
- 星野達雄「いわゆる『国分式土器』について」原始古代社会研究 3 1977
- 松本富雄「新開遺跡!」三芳町教育委員会 1981
- 早稻田大学本庄校地文化財調査室「大久保山!」1980